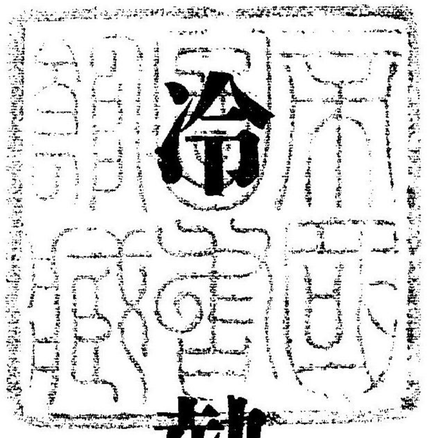
冷熱集

特22
436

吉岡濁海遺稿



冷熱

集

君治節岡吉故

余輩は形式主義の破壊者也

現は吹ッ[illegible]一[illegible]と云ふ[illegible]秋中余輩[illegible]
之を思ひ之を吹い之を破壊せんとするものは彼
の形式主義なり　之を倫理学上に見るも彼の
カント一派の形式説なる者か人の天禀を偏ッて它
紙力者たらしむることは瞭然たるを失也　之を
以て古人見るも或は叛徒の形式と云ふ一切異
の説正に然り　して古人之れ形式美と記録する
世界の色を変ずるの所分形式者の本義を誤り

序言

世に傷ましきこと數多ある中にも才氣ある青年の夭折ほど惜しむべきものはあらじ。春花開かんと欲して風雨遽かに之を散らし、明月正に昇らんとして黑雲忽ち之を蔽ふが如し。人生の恨事之に過ぎたるはなし。故吉岡節治君の如きは即ち其の一例なり。君が鄉里を辭して東都に來り、早稻田中學四年級に入らんとするや欠員僅に二名、而して補欠志願者八十人に超ゆたり。即ち競爭試驗の結果、君は我が中學生徒の一人となれり。學力優等ならずして豈に是くの如くなるを得んや。君が遺稿の一に屬する

在學日誌を讀むに、事に觸れ、興に乘じて筆を投じたるもの、而かも血あり、涙あり、讀む者をして自から同情の感を催さしむ。故に君の日記は尋常一樣、乾燥無味の文字にあらず。天若し君に假すに年を以てせば天下有數の文士たりしやも亦た未だ知る可からず。今や君既に亡し。君の才能は萠芽の中に葬られたるの感なくんばあらず。然れども吾人が君を惜しむは君の爲めに非ずして寧ろ君が念々忘るゝ能はざりし社會及び人類の爲めならずんばあらず。君今現世の苦樂を脫して宇宙の大靈に歸化せり。君の抱負や君の責任や今は移りて君の同窓生及び後進者の上に在り。君は不幸にして夭折せりと雖ども其の才氣既に顯はれ、其抱負亦た見る可きものありき。健在長生の人豈に奮發興起せずして可ならんや

八月九日

浮田和民

緒言

一、亡友の面影たゞ懷しく、この書を輯集して同好の士に頒つ事とせり

二、この書輯むる所は、概ね故人が早稻田中學入校以來、同校興風會雜誌及び生等の間に隨時發行する肉筆雜誌「瓔珞」の爲め起稿せしもの、並に最近日乘中よりの選抄にかゝれり

三、故人の性行風采の一般は、卷末に載す可かりしが、冷熱集一編そを說明して十分なるを以て、態とこゝに樓上屋を架するの愚を避けたり

四、本書の爲め生等の乞を納れ、序文を草せられたる浮田和民先生、本書の上梓に關し多大の盡力と有益なる助言とを與へられたる松本洪、中桐確太郎、佐久間謙、小田内通敏、宮坂錦吉、大西熙等諸先生、並に特に寄附を申し出でられたる諸師諸友の好意を深謝す

明治丁未八月

瓔珞同人

冷熱集目次

第一編　論評

泣き蟲の多き世なる哉（明治卅九年三月）……一頁
マホメットを讀みて感あり（同年四月）……五
青年を罵るものに答へん（同年十月）……一二
斷々錄（同年同月）……一七
一　宗教も何もあつたものに非ず
二　眞の教徒は即ち泣け
三　眞の教徒は教會に行かず
四　隨喜の前に戒心を要す
五　パンの他に目的物なき學生
六　先輩連にも罪あり
七　大に私立學校の特色を發揮せよ
八　自己の修養
九　一度病氣になれ
十　眞正の競爭に非ず

目次

目次

十一　眞正なる意味の競爭とは如何……二八
十二　奈翁豐公の亞流か……三七
十三　誤られたる教育……四七
十四　乞ふ意を安んぜよ……五三
八方美人(明治四十年一月)……五四
漫評(同年三月)……五六

第二編　感想

新島先生の墓に詣づる記(明治卅九年三月)……六八
戀(同年四月)……
思出のまゝ(同年六月)……
嗚呼ダンテを憶ふ哉(同年八月)……
冷熱集(同年秋)……
一　余輩は形式主義の破壞者也
二　余輩は形式の何たるを顧るの暇なし
三　大熱情の人となれ
四　泣き言を廢止せよ
五　一大快樂主義の人となれ

六　勉學か然らずんば運動然らずんば睡眠のみ
七　厭ふべき哉夢の情落
八　無題
九　覺醒の第一歩
十　我が志
十一　我が心
十二　科學を樂しむの精神を養成せよ……八〇
十三　戀愛の心を想ふ……八七
十四　嚴重なる規律的生涯に入れ……九二
十五　百の感動畢竟一の實行に如かず……九四
十六　戒むるは近きにあり……九七

第三編　雜

夢の記(明治卅九年三月)……
僕は馬鹿で御座る(同年同月)……
日本民族の天職を論じて東方政策及び世界政策に及ぶ序(同年六月)……
某氏に與ふるの書(同年同月)……
憐むべき人の子よ(同年同月)……

目次

瓔珞同人に與ふる書（明治卅九年九月）……一〇一
胃の獨語（同年十月）……一〇七
眠られぬ記（同四十年三月）……一一六
第四編　日記抄
明治卅八年度……自一二一頁　至一二六頁
明治卅九年度……自一二七頁　至一五九頁
明治四十年度……自一五九頁　至一七六頁

冷熱集

第一編　論評

泣き虫の多き世ふる哉

今の世は幼き泣き虫の多き社會なる哉、其聲紛々擾々として日毎に其數を增しつゝあり或は無情と叫ぶものあり、或は人生不可解と叫ぶ者あり、冷酷と罵るものあり、惡魔と罵るものあり、泣いては呼び呼びては且つ罵る、而して僅かに泣き止むものあるかと思へば、愚にもつかぬ繰言や將た痴言を吐き散らし或はラブと云ひ或は宗敎と云ひ、神と云ひ、眞理と言ひ、近頃に至りては無我の愛といふ、何れにせよ、各自分勝手な熱を吹き散し猶ほあきたらぬにや、哀れげに又悲しげに泣面さげて何物か慰籍物を得んと血眼になりて跟々と世の中に彷徨ひ、絕えず靑白き顏を力無げに動かしつゝ煩悶々々と叫ぶ、この徒の手先きに使はれたるラブや宗敎や神や無我の愛や誠に氣の毒千萬の事と云

ふべし。それ泣くことや必ずしも惡しからず、苟も大なる悲哀に觸れ大なる憤激に觸るゝ事あらば大に泣け、而も一度泣く、天に仰つて長大息し以て號泣すれば天をして爲めに涙に曇らしめよ。地に俯して慟哭し汪然涙を注がば地をして沸々煮へかへらしめよ、然れども漫りに泣く勿れ、彼の泣虫の徒の如く、失戀や、境遇や、將た不如意や、病痾の爲めに……小感情の浮動するまゝに……。

さりながら、若し夫れ眞に失戀に泣き、眞に人生を悶えて泣き、眞に世の無情を觀じて泣き、眞に人情の冷酷を憤つて泣くものならば猶ほ吾輩も亦此徒と共に幾分の涙を注がむ、而かも斯くの如く眞摯なるもの果して幾許かある、彼等の多くは實に附和雷同的の泣き虫の徒のみ、淺薄なる泣虫の徒のみ。

失戀！、彼等の失戀はそれ斯の如きのみ、一寸或る女の美に迷ひ、一寸それに罔惚れし、忽ち肘鐵砲を食ふ、こゝに於てか今更ら人情は冷酷なり世は無情なりと騒ぎ出し、どのつまりは人生不可解などとんだ處に理屈を付け、遂には瀧壺の往生ともなる、之れ無論其極端なるものならむも、彼等の失戀や將た人生問題は多くかゝることを語る、其他或は社會問題にせよ、宗教問題にせよ、或は眞理と云ふも無我の愛と云ふも、大同小異、皆失戀や境遇や將た疾病によりて來らざるもの殆んど無し、所詮は失望やら不平やら薄志やら弱行やらより起る痴言と言はずして又何とか云はむ。

オー天下幾多の泣き虫の徒よ、汝等の口邊は猶ほ乳臭きを忘れたるか、汝等は泣くべく餘りに早からずや。やめよ泣くことを。泣くことは之を片脚の既に墳墓の中に埋もれたる老者に讓れ、彼等の生涯は短かし、短かきが故に泣くもよからむ、叫ぶもよからむ、悶ゆるも可あらむ、困しむも面白からむ、されど汝等の生涯やながし、この長き生涯を泣きつゝ送るはあまりに馬鹿氣たらずや、餘りに沒趣味ならずや、且つや何程泣けばとて泣きやむべき時の來らぬに於ておや……然り太陽は依然として東より出でゝ西に入る、人は依然として百歳の壽を保たで逝く、よしや幾億年を經とも猶ほ然らむのみ。再びいふ、やめよ泣く事を……而して來つて時代の謳歌者となり、現代の嘖美者となり、悲觀する代りに樂觀し、泣く代りに笑はずや、かくいへば今の所謂泣き虫の徒は直ちに吾人を物質的なり、下根なり、人に非ずなんどと嘲らむ、嘲らむと欲せば汝の思ふが儘に

嘲けれ、吾等は如何にも下根なり、物質的なり、又人に非ざるべし、されど泣き虫たらざるはまだしもの幸福なり、いでや吾人の本性を暴露して御目にかけん。

登張竹風君は吾黨の一人なり。曰く吾より見れば世事物々皆面白し。花もよし月もよし美人更によし酒も妙なり菓子も不可なし。歩行する時は歩行が面白く。車に乘る時は車が面白し。二日酔するは辛らけれども、下戸の知らぬ酔ざめの水は旨からずや。厭な人に出會へば厭な人のある世なりと觀じ、一念常に樂世の巷に遊べば心は常に光風霽月、行住坐臥樂しからずといふとなし。所詮吾輩は樂天家なり。世を面白しと觀ずればこそ遊ぶも面白く働くも面白けれ。樂天家ならずして何の遊戯ぞ。樂天家ならずして何の活動ぞ。日本人は由來活潑なる國民ならずや。笑ひを解せざる國民は大國民にあらざるなり。泣き虫の多きは如何なる社會に於ても榮譽に非ざるなり。世人何ぞ奮勵一番大に活動して大に笑はざる。今日日本には小厭世家多し。彼等は人生の苦悶を説き、陰鬱なる小説を愛讀す(中略)、兎に角厭世主義を青年の玩弄物にするは危險也云々と……然り吾輩は竹風君と共に今の世に泣き虫多きを悲しむ。要するに吾輩の人生觀は左の歌によりてつくさる。

何をくよ〳〵川端やなぎ
水の流れを見て暮らす、

故大久保甲東は此歌の眞意を解せざるものは共に政治を語るに足らずと云ひぬ、吾輩は此歌の眞意を解せざるものは俱に人生を語るに足らずと云はむ。（環珞第一號所載三十九年三月中作）

マホメットを讀みて感あり、

余は、英雄崇拜論を愛讀す、殊に其マホメットの章を讀む事に於いて……

蓋し、この絶偉の文豪によりて描出せられたる絶偉の人格は、遺憾なく此處に發揮せられ、眞英雄の眞面目、此の間に躍然たるものあればなり。余はこを讀む毎に、恍として無我の境に入り、吾れを超越して遠く一千年の昔に遊び、彼の凛乎たる英姿に接するの感なくんばあらず。誰れか云ふ、マホメットは死せりと、否、否、余は敢て云

ふ、少くもこの一大文章のある限りは、彼れは斷じて死せざるなりと。乞ふ、余輩をして少しく彼れに就て云ふ處あらしめよ。

夫れ偉人とは何ぞ、英雄とは何ぞ、カーライルは即ち是れが定義を下して曰く。

「偉人は人間の首領にして、是れ等偉大なる人物は、凡そ一般の群民が、終には必ず爲すを得べき、若くは必ず達するを得べき、事物の模型儀表にして、更に廣義の意味より云へば、又之れが創造家とも謂ふべきなり」と

即ち、現世に於ては、人間として最も進化せるもの、換言すれば、人間として最も完全なるもの、更に一歩を進めて云へば、最も神に近きものなり。

カーライルは更に偉人崇拜に就て曰く

「余輩は、偉人を仰ぐ事、如何に不完全なるにせよ、之を仰げば、彌々高く、常に多小の利益を收めて、自ら養ふ所なくんばあらず。彼れは生れる光明の源泉にして、之に近づけば、近くに準じ、彌益々昇騰して、以て快美を感ずべし、若し、この光明たる、古往今來の宙を通じて、世界の暗夜を照し得るもの、（中略）思ふに、光輝に浴するもの、天下亦何者か愉快の感想を起さゞらんや。假令何等の章程を經るも、暫く其傍に逍遙せむことは、諸君の吝まざる所なるべし」と

是れなる哉、余輩がマホメットに就いて云ふも、亦この意に外ならず。然り、偉人既に人間の首領なりとせば、彼れの命はこれに服せざる可らず、彼れの敎へは受けざる可らず、進んで彼れを崇拜せざる可らず。

崇拜する所、其所に感化あり、感化ある所、其處に向上あり。これ豈最も高貴にして最も敬重すべき人間の一事業にあらずや。感化なる哉。釋尊の偉大なるも、基督の偉大なるも、孔子の偉大なるも、畢竟この力あるが爲のみ。さなり、吾人がマホメットを目して偉大なりと云ふも、亦此の意に他ならず。

嗚呼、彼れマホメット何者ぞや、これ炎暑燒くが如きアラビヤの地、平沙漠々として天に連なる邊りに、孤々の聲をあげたる、一箇曠野の子にあらずや。而も一度起ちて絶叫するや、四面呼應し、一擧すれば、サラセン帝國忽ちに勃興し、再擧すれば、歐洲諸强爲めに震駭す。夫れ絶偉非凡なる所あるに非ずんば、如何ぞ斯くの如きを得んや、絶偉よ々々々、これそも何處よりか得來る、カーライルは是れを唯々一の眞なるものに歸せしめたり。且、彼れを僞善者なり、虛僞の人なりと云ふものに答へて曰く

借問す、虛僞の人宗教を建てしと云ふか、虛僞の人は一瓦屋だも造る能はず。……若しも彼れにして誠實に、

白堊、粘土、磚瓦等使用物の性を知つて、之に從ふに非ずんば、其造りたる者は、家にあらずして只是れ廢殘の一堆のみ、亂層斯くの如きもの、安んぞ能く一臆八千万の蒼生を宿して以て十二世紀の久しきを保つを得んや、否直に顚覆せんのみ。人は先づ須らく自然の妙法に契合し、万物の眞理と交通せざる可らず。然らずんば、自然は斷乎として、万物皆非なりと答へん。僞善の行は僞善なり。嗚一ゲのカリオストロ、幾百万のカリオストロ、滔々たる俗界の領袖は、其虛僞を逞うし、種花一朝の榮をも得ん。然かもこれ贋造の銀行紙幣の如し、彼等は是れを其卑劣なる手より出して世に流通せしむ、而してこれが損害を蒙むるものは、彼等にあらずして世人なり。こゝに於てか、自然は遂に其熱烈なる火焰を發して、佛國革命の如きを演出して、痛烈嚴正叫んで曰く贋造紙幣は贋造なりと云々

諷し得、罵り得て切なる哉、それ贋造紙幣なり、一時は世を瞞著し、一時は人を欺くを得ん、然も到底そは贋造たるを免る能はざるなり、鍍金にして剝げざるは稀なり、何ぞ絕偉彼れが如き事業を成しとぐるを得ん。

又思ふ、這般カーライルの語は、移して以て紛々たる頑者輕薄者流に食はすの三十棒たるを得るなきか。何となれば、今や世は彼れが所謂贋造紙幣に滿ち、然かも、彼等は日夜其贋造たるを秘し蔽はんとし、而してそを秘し得たりとなし、得々として虛僞の巷に相彷徨する者、比々然らざるは無ければなり。

他は暫くをき、其超俗的事業として、最も尊敬に價すると云ふ、彼の所謂宗教家、教育家なる者を見よ。嗚呼、彼等も遂に贋造となり終りしか、今更彼等に向て嘲罵を逞うするも詮なし、吾人は彼等に就て云々するに、今や實に疲れ終りぬ。あゝ、贋造紙幣を驅逐して、正貨流通の社會を建設すべき天職を有する彼れ等にして、彼れら自ら贋造となり、滔々相率ゐて虛僞の言動を恣にす、吾人又何をか云はんや。然りと雖かゝる社會に棲息するは、吾人の斷じて快とする所にあらず。よしや、世はあげて贋造を歡迎し、世はあげて虛飾を以て充たさるゝとも、吾人及び吾人の同志は、飽く迄も正貨を流通するに努む可きなり。敢て全生涯を犧牲とするも亦辭する所にあらず。吾人はこの目的を以て奮鬪せむ。今の所謂宗教家教育家なるものは、實に吾人の大なる敵と知れ。

あゝ、至難なる哉、此目的を達する事や。吾人は如何にして此目的を達し得べきか……吾人はこゝに本題に歸つて、これをマホメットに學ばざる可らざるなり。

聞く。彼れが一度天子なりと呼號して說教擅にたつや、左手にコーランを持ち、右手

に劍を握りしと。左手のコーランは彼れが傳導の生命なり、右手の劍はそも何の用にか供する物ぞ。劍は殺人の具なり、劍は兇器なり、而かも彼れは宗教の如き最も神聖なる事業に從事するに、斯くの如き武器を以てす、彼果して耻づる所なかりしか、果して自ら信ずる所ありしか、曰く然り。余思ふに、彼れは劍を以て彼れが信仰を敷衍するに、何等天意に反する所なしとし、毫も恐るゝ所なく、耻づる所なく、正々堂々と說敎擅に立ちしなる可し、然り、大丈夫苟も信仰の立脚地に立ちて自已の信念を吐露せんとす、一言以て人を首肯せしめ、二言以て人を感動せしめ、三言以て人を信服せしめさる可らす。然らずんば滔々たる數万言も必意何の要する所ぞ。而して彼れは實に斯くの如き大抱負を以て人に臨みしならむ。此に於てか、一言半句たりたりとも彼れに叛んものは、皆彼れの敵なり、信仰の敵なり、彼れは之れを斃さゞる可らず。辯論を以て服さゞるものは、劍を以て服せざる可らず、斯くして猶服さゞる者には死を與へてもこれを服せざる可らず。彼れは眞なる人なり、衷心自已を信ずる人なり、劍は彼れが信仰の實行者なり、果然劍の使用は決して天意に反せざるを知る。遮莫、斯くの如き劍は常人に於ては、得難しとする所なり。

あゝ劍なる哉、吾人にして今や正貨流通の社界を建設せんと欲せば、先づこの劍を得るを要す。劍によるにあらすんば決して吾人の目的を達する能はず。劍よ、劍よ、あゝ爾果して何をか意味す。

吾人は、劍を知る爲めに學ぶを要す、吾人は劍を得る爲めに修養するを要す。これを他にして吾人の修養は何等の意味をも有せず。希くば鋭利なる劍を得ん。吾人は弱し、然れ共劍に伴ふ吾人は强からん……前途遼遠なり、自重すべき哉。自愛すべき哉。

（三月二十日）

マホメット論終るに臨み……

今の若き者よ、汝何ぞ戰々競々たる。汝の智足らざるを恐るゝか、汝の識足らざるを恐るゝか、やめよ、智や識や吾れも人もその差毫のみ、吾人は知や識の爲めに生くるものにあらず。彼のマホメットは未だ學校教育を受けし事なきなり。あゝ吾人學校教育なるものを受くる事こゝに十又余年、得し所何者ぞ。余をして思ふがまゝに云はしめよ、十又余年の學校生活は、余をして虛僞を云ふに巧ならしめ、虛飾を施すに長ぜしめたるのみ。如斯もの吾人に於て何の要する所ぞ。野の百合は如何にして育つかを思へ、彼等は勤めず、紡がざるなり、然れ共ソロモンの榮華

の極の時だにも其裝、この花に及ばざりきと聖者は云ふ。希くは吾人をして野の百合の如くに育たしめよ……倦みたりな、勞れたりな今の生活……遮莫余輩の反は自然なる哉、乞ふマポメットと共に之れを嘆美せむ、（瓔珞第二號所載卅九年四月中作）

青年を罵るものに答へん。

世に書生論と云ふものあり。空論を意味し、暴論を意味し、生意氣を意味し、輕蔑を意味し、嘲笑を意味す。嗚呼、書生論果して斯の如く價値なきか。

書生と云ふ……青年學生を意味するなり。（老書生と雖心だに若けれは此部に屬す）。故に、書生の論とは、即ち此青年學生によりてなさるゝ論を意味する也。之を空と云ひ、暴と云ひ、生意氣と云ひて、輕蔑し嘲笑す、要するに、青年に對する大なる侮辱なり。

現時の青年たるもの、かくても、猶ほ沈々默々として、唯々諾々、之に甘ぜざるべからざるの理、果して何處にかある。余輩大に疑なき能はす。此疑はやがて憤となり、進んでは、大に其侮辱を雪ぎ、一轉しては、所謂書生論の爲めに萬丈の氣焰を吐かんとす。乞ふ、吾人の云ふ處を聞け。空と云ひ、暴と云ひ、生意氣と云ふ……之は甚だしく實際問題に遠ざかれるを意味し、其大に無謀なるを意味す。然れども、知らずや、其實際問題に遠ざかれるは、主として其標榜する處高くして、絶對的理想に憧憬せるを證し、其無謀なるは、主として冒險的性情を發揮せる所以のものたるを……

憧憬と冒險、之ぞ眞に青年の一大特色にして、又其價値の存する處なり。

見よや、彼の佛蘭西の革命兒ダントンの幼時に於ける憧憬を。彼れ嘗て某所に於て彼のバスチュル監獄の高塔を仰視し、呼んで曰く、高塔破壞せむ哉と。……彼が此叫びを出す瞬間の憧憬、之は實に人道の擁護てふ、一大標榜を有したりしに非らずや。之を吾國に徴するに、維新の頃に狂奔せし幾多の青年は、皆之れ王政に憧れ、忠君愛國てふ、一大標榜に向つて活動せしに非らずや。

眇たる一少年の憧憬は、遂にバスチュル監獄の破壞となり、微々たる青年輩の憧憬は、遂に王政復古を實現す。更に、之を他に求むれば、彼の戀に憧れ、彼の絶對的理想に憧るゝものを見よ。前者の如何に熱烈に、而かも愛らしく、後者の如何に崇く、美しきや。彼等は、實に前後を顧み、左右を慮るの暇なく、全精神と全肉體とをあげて、

之が前に捧げんとす。人と戰ひ、世と戰ひ、境遇と戰ひ、遂には爲めに前途に蹉跌を來たすとも恐れず、壓迫來りて鬪志愈健に、百難來りて猶屈せず、眞に活動の樣、見るからに、大なる同情と稱賛に價するにあらずや。

然れど、茲に一種の僻目を有せるものあり。彼等は物を見るに必ず呪のレンズを用ふ。此徒よりかゝる有樣を見れば、其言や空に、其論や暴に、其態や生意氣ならん。まことに、彼の常に一二の勘定に忙を極め、寢食の時も、なほ黃金と名譽の觀念を、腦中より離し能はざる、所謂レンズ連中の眼より見ればさもあるべし。蝙蝠は人を見て、却て其顚倒せるを怪しむと云ふ。畢竟、己を以て、みだりに他を律せむとするもの、寧ろ其痴愚を表白するに止まらむのみ。而かも自ら稱して、實社會の經驗を有せり、實社會の空氣を呼吸したりと云ふ。噴飯の極なる哉。

茲に於てか、余輩は、先づ此實社會の空氣を呼吸し、實社會に經驗を有せりと呼號する、彼の所謂實社會の人てふものを、研究するを要するに至れり。

實社會の空氣とは果して如何なるものなるか、余はこゝに之を斷言す、之は不健全を意味し、銅臭を意味し、俗惡を意味すと。

實社會の經驗とは如何なるものなるか、之は阿諛を意味し、佞辯、曲學、叩頭を意味し、パンの生活と弄權と、其他幾多の惡德をも意味す。

然り而して此空氣を吸ひ、此經驗を有する、彼のレンズ連中の、品位や、價値や蓋し洞見するに難からざる也。

余輩が、今茲にレンズ連中と稱するは、今の所謂敎育者、道學先生、悟り顏なる似而非學者の類を一括して、附したる名稱なり。青年の言論に侮辱を與ふる者は、實に、之等レンズ連中なり。これ吾人の敵也。單に吾人青年の敵たるのみならず、眞理の敵也。吾人は飽くまで、之と鬪はざるべからず。

吾人は、先づ天下のレンズ連中に向つて、卿等果して青年を罵り、嘲り、笑ひ、叱り、敎ふるの權利ありやと問はんとす。卿等は吾人の言論を目して、書生の空論なりと云ひ、暴論なりと云ふ。卿等の言論は、果して實質に富めりや、果して穩健なりや、卿等は吾人が少しく社會問題等を口にすれば、直ちに生意氣と云ふ。借問す、卿等の腦

中に、一度たりとも社會問題等の思想湧き出でしことありしや。カーライルは卿等の如きものを目して、實に人狐と云ひたりき。滔々たる世上人狐、なす處、抑も何物ぞや。只虚飾のみ、詐僞のみ、方便のみ、卿等が口に筆に物する幾多の言論、畢竟、狐をして人に化けしめしのみ。皮一重披げば、即ち單なる野獸のみ。野獸に裝飾して、之を人の世に出し、得々として吹聽す。若しこゝに天眼通ありて、觀破一番すれば、卿等果して如何に繕縫せむとはするか。宜なり、人の皮かぶりたりとて、野獸は依然たる野獸也、卿等の口を衝いて出づる、道德も、宗敎も、何等の生きたる感化を世に與へざるとや。……まことに卿等の爲めに計るに、須らく其レンズを取り、僻目を矯正せよ。鄕等は、しきりに青年の言論を是非し、其行爲を批判し、或は形式により、或は其他の方法によりて、しきりに青年を抑壓せむとす、卿等の配慮と勉勵は、吾人青年のまことに感謝する處なりと雖も、要するに、無用の沙汰と云はざるべからず。何となれば、無生物より生物を造ることは、到底不可能なればなり。卿等の中に、既にくに生ける生命なし、如何ぞ生ける青年をつくり得ん。やめよ、かゝる無用の心慮を、而して卿等自ら修養せよ、青年を罵るの寸暇だもあらば、卿等の思想の一波なりとも浪うたせよ。寸時たりとも黄金と名譽とを腦中より忘れ、而して同情の眼鏡を以て、青年を見、常に翼々之が誘導につとめよ。今や吾國の思想界は渾沌として、青年は跟々適歸する處を知らず、迷々裡に彷徨し、此間に得たる思想を、最も露骨に、最も大膽に表白す。之れ青年の憧憬性と冒驗性の然らしむる處、宜しく之を利用して、益々向上の階梯を辿らしむべきなり。特に、青年の言論は、其不健全なる空氣と、無價値なる經驗とを有せざる點に於て、頗る眞摯なるものあり。レンズ連中、須らく猛省一番を要すべきなり。（十五日夜）

（明治三十九年十月作櫻路雜誌第四號掲載）

斷々錄

宗敎も何もあつたものに非ず

「右の頰を打たば左の頰を向けよ」とは基督の御敎なりき。何ぞ其語の厚德にして崇高

なる。借問す、天下の基督教徒及び其教國の、此語を三度唱へて懺死せざる者あるか。慈善を名として、寄附金を募集し、私懐を肥せる牧師あり。布教を名として、弱國を呑圖せんとせる宣教師あり。高等官の其信者たるを誇りとせる教會あり。若し夫れ、路傍に小雜誌を配付せる、救世軍と稱する徒に至りては、其醜態宛然乞食に類す。パンの外に粮を與ふと云ふ、所謂基督教の使徒を以て任ぜるもの、比々斯くの如きのみ。宗教も何もあつたものに非ず。

眞の教徒は即ち泣け

「暗きに居りて獨り祈れ」とは聖書の教ふる處なり。今の教徒は、爛燈輝く處、衆と共に禱るのみ。嗚呼、彼等の祈る所を聞け。……其言語は即ち美、形容は即ち巧、音調は抑揚に富み、時に悲しむが如く、時に訴ふるが如く、求むるが如く、喜ぶが如し。其表情ある祈禱の辭は、宛然一の美文を朗讀するが如し、吾人は、彼等が祈禱其もの丶練習をなせしにあらざるなきやと疑ふ。嗚呼練習後の祈禱!!!斯くの如きものを神は果して饗け給ふや。嗚呼、基督の名は今や虛飾の用に供せられんとす。眞の教徒は即ち泣け。

眞の教徒は教會に行かず

父と子と精靈の御名を借りて、彼等の所謂信者なるものは、牧師の手によりて、所謂バプテスマを受けたり。而して、彼等は自ら稱して信者と云ふ。敢て問ふ、汝等が受くるバプテスマとは、衆人環視の前に整列し、牧師の口よりして父と子と精靈の御名を唱へられ、牧師の手……その手は罪にけがれし……よりして、僅かに信者てふ名稱を附せらるゝのみか。此瞬間より汝等は信仰てふ一大神秘的印象を獲得し得たりとなすか。

嗚呼、今の人は、人によりてバプテスマを受くることを知りて、基督によりてバプテスマをうくることを知らず。宜なり、トルストイ翁が、彼の徒を痛罵することや。まことに眞なる教徒若しありとせば、彼の徒と教會に行き、僞りの口より出づる、讃美の

聲を聞くは、堪ふる處に非ず。僞りの口よりして爲さるゝ祈禱を共にするは、猶更に堪ふる處に非ず。故に余輩は斷言す。眞なる信者は敎會に行かずと。

隨喜の前に戒心を要す

基督敎國とは、「人の國を奪ふ國」の別名稱にはあらざるか。見よ、所謂基督敎國のなす處を……奴隷の賣買……人の國の奪掠……之を他にし、果して基督敎國の謳歌すべき件ありや。之を今古東西に見よ。其跡の歴然として、蔽ふべからざるは、少しく意を致すものゝ等しく想到する處ならん。亞米利加に於ける然り、南洋又然り、其他世界のあちゆる敎國の間に於て、比々皆然らざるはなし。吾人は進化論に示す生存競爭の、人類向上發展の階段として、避くべからざるを信ずるが故に、あながちに之を咎めず。然れども、之が博愛平等を云ひ、平和を標榜する基督敎の名によりてなさるゝは、斷じて許すべきに非ず。オ、彼の西歐文明を謳歌して、所謂基督敎に沈溺せる幾多の信者よ、先づ其皮面を披き、汝等が惰喜の涙を流す前に、戒心の要するものあるを知らずや。

パンの他に目的物なき學生

現今の學生の云ふ處を聞け。曰く「何がよい何が有望だ」と。ヨイとは金の多くとれるを意味し、有望とは世の風潮に投合し、俗物の爲めに喝采せられ易きを意味す。彼等は性情の好む要求に從はずして、時代の要求に棹さす。流されずむば幸なり。嗚呼、轉輾として金と空名とを逐ひ、滔々乎として墮落の深淵に沈み行く、今の青年學生は憐れむべき哉。

先輩連にも罪あり

宗敎家敎育家等を罵るは、吾人既に飽々したり。まことに、青年をして、斯の如く墮落せしむるものは、單に是等の徒みのならず、あらゆる社會に於ける、所謂先輩連にも大なる罪あり。試に現時の新聞雜誌に就て見よ。無主義、無節操、無氣力者よりな

れる新聞雜誌の、無主意、無節操なるは事の當然ならんも、吾人は現時の新聞雜誌の墮落を見て、實に忍ぶ能はざるものなり。彼の赤新聞を以て、久しく侃諤の筆を專らにせし某紙を見よ。彼の富豪を敵として、健鬪目醒しかりし某紙を見よ。何々世界と稱する雜誌を見よ。日々の紙上に麗々しく掲げらるゝは、花婿花嫁、男女學生云々、又は新聞雜誌の切拔、淫風の鼓吹……何處にか主義ある、何處にか節操ある、何處にか氣力ある。些々たる黃金の爲めに、渴仰の筆を弄するの徒のみ。社會の先覺者とは尾籠がましくも沙汰の限りなり。

大に私立學校の特色を發揮せよ

今の私立學校は、官立のそれを眞似て及ばざるものなり。特に私立中學に於て然りとなす。私立中學の尙ぶべきは、自由にあり、獨立にあり、意氣の旺盛なるにあり。然れども其最も貴ぶべきは、師弟間の情宜愛然として、些の隔心なく、其間恰も父母の子に對する如く、子の父母に對するもの、如くなるにあり。然るに何ぞ今の私立中學に自由なく、獨立なく、意氣なく、更に愛然たる和氣なきは何ぞや。かけ持ち敎員ありて、月謝により、僅かに學校を維持する間は斷じて此美風を興起する能はざるなり。嗚呼、私立中學遂に似而非公立中學を以て終るべきか、やみなん哉。

自己の修養

余は近日特に修養の大切なるを悟れり。余は過去の吾れを顧みて、憮然として長大息す。

本日、醫師のもとに至り、具さに身體の各部につきて診査を遂げしめしに、遂に神經衰弱の病狀にあるを宣言せられたり。(胃は云はずもがな)

神經衰弱と胃擴張……最も明白に其薄志弱行と放縱を證明せるにあらずや。

余は、深く斯の如き病氣を得るを恥づ。またそれと同時に、一大勇猛心の胸奥より湧くを覺えたり。

「敢て病と鬪つて、之を征服せむ哉」。と

先づ、余は、甚敷惑亂の裡にある、感情の整理につとむべし。蓋し小感動の激動し易き者は、決して、大丈夫としての資格に於て、完全せりと云ふべからざればなり。實に、神經衰弱の一部の源因は亦茲にあり。胃擴張の一部の源因も亦こゝにあり。余は先づ此方面に向つて戒心せんとす。次に、意志の强健を計る第一着歩として、規律的生涯に入らんとす。百の空論畢竟するに一の實行に如かず。默して斷行す。之れ丈夫の本領とする處なり。故に余輩はこゝに多くを云ざるべし。

智的方面に渡りては、餘り重きを置かず。蓋し吾人に强健なる身體と精神だにあらば讀書万卷蓋し易々たるの業なればなり。

事々しく修養の必要を云爲し、議論するをやめよ。先び手近き一時に就て、之が矯正と發展とに從事せよ。かくして、一歩一歩吾人は修養の眞域に到達するを得ん。

一度病氣になれ

一度病氣になれ。斯くしてぞ、眞に、人生の樂しむべきを知らん。病氣となりて、厭世觀を抱くものは、未だ以て共に談ずるに足らざるなり。基督は云ひ賜へり、「悲あるものは幸なり。其人は慰を得べければなり」と。眞個人情の温きを感ずるは、其病める時なり。眞に榮華の巷を低く見て、天上の榮に憧るゝも病む時なり。進んでは達觀一番、彼の喧々擾々の裡に、遑々の生を貪り、小才を抱いて暗鬪を事とせる輩を、憫笑の間に送迎するに至るも、病氣の時に於て然りとなす。

云ふ勿れ、人事に堪ふべからざる瘦我慢的言辭なりと。或はこれあらん、而かも之が眞理なることを如何にせんや。

眞正の競爭に非ず

曰く競爭と……競爭可也。眞の意味に於ける競爭は大に可なり。而かも、區々たる感情の一部たるバニチーに扇動せられて、僅かになせる餘義なき競爭的努力の如き、畢竟遂に何するものぞ。宜なり、彼等の事業が、唯、單に目前の小問題にのみとゞまり永世不朽の大事業を建設し能はざるをや。

眞正なる意味の競爭とは如何

吾人は、生存競爭が進化向上の一大原則なるを信ず。故に、吾人は不斷の競爭を行はざるべからず。此競爭は人類の進化に裨益するものたらざるべからず。吾人は、之を世界の三聖に見る。彼等は野心ありて、斯くの如き大事業をなせしが。はたまた、虛榮心によりて然りしか。否々、彼等は宇宙の大道の爲め、不眞理との大競爭裡に立ちて、見事に勝利を凱せるの徒なり。吾人が競爭の一大中心は、實にこゝにあり。又あらざるべからず。世の汲々者流少しく活眼一番せよ。

奈翁豐公の亞流か

奈翁や豐公や、現時の人の目して、所謂偉人と稱するもの〻事業が、今杳として影をとゞめざるは何ぞや。蓋し彼等の競爭心が甚だ小なりしによるなり。彼等は人を相手として、競爭したり。競爭の相手亡びては、之れ退化の一方面あるのみ。まことや、豐公天下を統一して、閑居に不堪、朝鮮征伐等をやらかして、遂に得る處なく、奈翁歐洲のすべてに覇となつて〻遂に禍の資をつくる。之を現時の奴輩に見るも、たゞ時勢に投合し、虛榮や野心の爲めに努力し、競爭するも、所謂世の競爭に克ちて、一度虛榮心を滿たし、野心實現し得れば、即ち酒色に沈溺して、社會に害毒を流す。今や吾が國、奈翁豐公の亞流を汲む、小奈翁小豐公の多きに不堪。

誤られたる教育

曰く試驗……試驗なる哉と。まことに然り。現時の教育者輩にとりては、教育の効果も、此試驗てふものによるに非ずんば、實現し難からん。而かも、之れ即ち小虛榮心の挑發物のみ。吾人は、區々たる試驗的競爭に、凱歌を奏せん爲めに、全力をあげて一二三の勘定に頭を惱ます青年あるを見て、氣の毒にも亦憫殺の念に不堪。何ぞそれ達觀一番、一大競爭心を發揮せざる。

乞ふ意を安んぜよ

友あり、師あり、吾れに忠告して勉學を促し、競爭心の振起を望む。好意多謝す。余輩も、元より彼の紛々たる輩に、蔑視せらるゝが如きを見ては、時に憤起せむとすること度々あり。

さなり、余と雖も嘗ては大に競爭心を有したりき。又勝利を博し得たり。然れども憂ふる勿れ。余が競爭心は未だ〳〵消磨せず。もとより連續せる病痾等の爲め、身心の不健を招き、著しく頭腦の不透明を來せるは事實也。然れども意を安ぜよ。今や、一歩一歩修養の階梯を辿り、新たに生れ出でたる一大競爭心を發揮して、花々しく人生の奮鬪場裏に出でんとするの準備に汲々たり。……一度、二度、三度、四度の挫折、畢竟、丈夫に於て何の關する處ぞ。……再び云ふ。意を安んぜよ。吾が親愛なる諸師諸友。（明治三十九年十月稿環珞所載）

八方美人

一

○「吾人は弱し然れども吾人の主義强し」、之れあらゆる世の迫害に遇うて百難をつぶさに嘗め、權勢に屈せず富貴に淫せられず、或主義を標榜して健鬪目醒ましかりし某誌の宣言せし語なり。凛として秋霜の如く、烈として生氣滿つ、まことに近時痛快の語なる哉。

○それ主義と云ふ何をか意味する、吾人は斷言す、主義とは吾人人類が始終を貫いて標榜すべき活動の目的なりと、故に吾人の見地よりすれば主義なき人は活動の目的を有せざる者、換言すれば彼等の活動は盲目的活動なり、吾人は斯の如き活動を危ぶみ且つ嫌惡す。

○然り斯の如き輩の活動は眞に危險なり、爲政者にして若し然らんか、彼が無定見なる盲動は國家民衆をして如何なる渦中に陷るゝやも知るべからず。教育家にして若し然らんか、彼等は遂に人の子を毒せずんば止まじ。眞に危い哉。

○政治は云はず、吾人は我が國の教育に主義なきを聞くこと久し、今に至つて眞に然るを覺ゆ、吾人が初等教育を受け始めてより今に至るまで所謂國家教育を受くること

殆んど十又餘年、今に至り省みるに茫漠として何等よるべきなし、小學讀本より進んで幾何三角物理化學の一片を機械的に注入せられし外そも何物を得たる。試に問へ、汝何の爲めに學校に學ぶか、現今の中學生乃至其卒業生にして明瞭に之に對して答へ得るものそれ幾許かある。或は答へん、高等學校及其他の高等專門學校に入らんが爲めと、嗚呼果して斯の如きものが普通教育の唯一目的なるか。

二

○「人は二人の主に事ること能はず」、之れ豈主義の重んずべきを人に教へたる最も痛切なる語ならずや。主義なき人は二人の主に事るを毫も意とせず、否々三人四人乃至五人の主に事へて恬然たり。今の教育はまことに斯の如き者を造りつゝあり、而して世は之を怪まず、怪まざるのみならず、却て之を嘆稱して呈するに才子の美名を以てす。

○嗚呼才子なる哉。才子汝を飾るものは叩頭阿諛佞辯。かくして汝は俗流の喝采を博し得べく、人爵の空名をかち得べし。多幸なる哉才子。

○才子は八方美人を意味す。八方美人は女として最も圓滿なるものなり。彼にも秋波之にも秋波彼にも甘言之にも甘言、かくして彼は爭はず鬪はず惡まれず恨まれずして巧に衆人の間に游泳す。世は之を稱して處世術に長けたりと云ふ。

○今の教育者には八方美人多し、從て今の教育は八方美人教育なり。宜なり今の學校に八方美人の卵累々たるや。

○苟も主義あるものは爭はざるべからず鬪はざるべからず惡まれざるべからず恨まれざるべからず、斯の如きことは蓋し八方美人の最も嫌惡する處のものなり。

○從て八方美人の社界は常に所謂平和なり。嗚呼平和平和礎なき家も雨ふり大水いで風ふきて其家を撞く迄は平和なり。斯の如き平和を吾人は不安なる平和と云ひ又姑息なる平和とも云ふ。

○それ家にして礎なし、よしやかゝる天災なしとするも地下三寸蟻群の穴を穿つあらば忽ちにして崩壞動搖せん耳、知らずや平和平和と八方美人連が徒らに謳歌せる間に、蟻群は既に盛んに其地盤を侵蝕しつゝあることを。今にして醒めずんば、禍亂は遠からず汝等が平和の夢を破らん。

三

○敎育家の八方美人主義（之でも主義と云ひ得べくんば）にもまして八方美人主義なるは今の宗敎家なり。特に基督敎徒なり。

○彼等が或は國家に愛嬌をふりまき、或は國民性に愛嬌をふりまき、彼に秋波を送り之に秋波を送り、彼の意を迎へ之の意を迎へ、只管所謂平和の傳達に從事するの陋態氣の毒にも亦憫笑に價するものあらずや。

○嘗て故樗牛が基督敎の逢迎主義てふ題のもとに、縷々數千言を費して其八方美人主義を難せしことあり。近時此傾向特に甚しきを覺ゆ。

○醜ならずや、基督敎徒、汝眞の神の爲めに傳道するならは何ぞ徒らに其會堂の美々しきを衒はんとする、何ぞ徒に信徒の多きを誇らんとする、言はずや、主よ主よと曰もの盡く天國に入るに非ずと。

○汝等が會堂の美しく所謂信者の多きはたゞ之れ汝等が八方美人主義によりて然るのみ。借問す汝等のうち天に在す父の旨に遵ふ者幾許かある。

○汝等は實に二人の主に事へつゝあるものなり、神のものをカイゼルのものとなさんとしつゝあるものなり。知らずや基督の敵は眞に汝等自身なることを。實に今の基督敎徒は朝に神に事へて夕にカイゼルに事ふるの徒なり。吾人は斯の如き八方美人を惡む。

四

○日露戰爭は終へたり、世界は平和なり、基督敎徒は盛に社會にあつて人道の鼓吹につとめ、神の祝福が全世界人類の上にあらむことを祈れり。國際間に於ける八方美人的外交は盛んに行はれて桑港の震災には義捐金の募集すらありき。而して各國は競うて軍艦の製造武器の精練守兵の訓練に努力しつゝあり。そも何が爲めの武器ぞ、何が爲めの軍艦ぞ、借問す、人道と云ひ神の祝福と云ふは劣等人種を撲滅して他の國を强奪するの謂か、抑もかくの如きことが果して神の御心に協へりや。

○基督敎徒にして眞に人道を叫び人類の祝福を祈るならば、何ぞ先づ他の國を傳道する前に各自其國の軍備を撤廢せしめて眞に光榮ある平和を世界同胞の上に下さんとはせざる。

○トルストイ翁に見よ、內村鑑三氏に見よ、汝等所謂似而非基督敎徒等是等二人の人格に對して衷心果して恥づる處なきか。

○學べトルストイを學べ、內村氏を學べ、眞のクリスチアンたるものは正にかくあらざるべからず。若しかくある能はずとすれば速かにクリスチャンたるの看板を撤去せよ。クリスチャンとは徒にバイブルを讀み朗讀的祈禱をなし泣きさうな讃美歌を歌ふものゝ謂に非ず。

○或は云はん、基督敎必らしも劍を退けずと或は然らん。而かも眞なる基督敎徒の劍を用ふる場合と、現時の國際間に於て劍を用ふる場合と、果して同一なりや。吾人は之に對して言下に否と應へん。

○さなり、シャレマン帝が遡遜人を化するや劍を以てしたりき。マホメットが其宗敎を擴むるや劍を以てしたりき。而かも是等の劍は皆之れ上帝の祝福を異邦人に傳へんとする至誠より出でたる一大信念のもとに用ひられたるものなるを忘るべからず。借問す。現時の戰爭に斯の如きものありや。況んやそれすら猶說敎と論證とを以て平和に之を弘むるの高貴なるに如かざるをや。

○如何に辯護するも世界に於てはいざ知らず、(單なるト翁の外)日本に於ては內村氏及其他二三の人の他、吾人は眞正のクリスチャンなしと斷言して憚らず。實に所謂クリスチャンの大多數は八方美人なり、二人の主に事ふるものなり、カイゼルと神とに事ふるものなり、吾人は斯の如き僞善者を惡む。

五

○今度は學生の番也、山路愛山氏嘗て演說して曰く今の青年(學生)には漸次面の△や口なるもの減少して○いもの多くなれりと。○は圓滿を表象す、マルボチャは八方美人の特徵なり。今の學生には實に八方美人多し。

○同氏又曰く今の青年は矢鱈に友人をつくる、而かも其等多くの友人の中金を貸せと云ふて貸すもの果して幾人かあると。之れまことに現時の青年(學生)の八方美人主義なることを最も痛切に罵り得たるもの。言や皮肉なる哉。

○それ八方美人なり。甲にも贊し、乙にも同じ、丙にも握手す當らず觸らず其間に利

を得んとするは八方美人の欲する處なり。故に彼は誰人に向つても愛嬌をふりまく、親切らしく見せ掛ける、而かも一朝利害の衝突に相遇するや、掌をかへすが如く吾不關焉とすましたるものなり。之を當世學生氣質と云ふ。

六

○是を要するに今の世は政治家たると教育家たると宗教家たると學生たるとを問はず。八方美人ならでは渡れぬ世なり。吾人は斯の如き世を惡む。

○記臆せよ、八方美人は一種の奴隷なることを。奴隷は他の意志に從て盲動す。八方美人の行動は正に然り、彼等の生涯は到底奴隷的生涯なり。彼には人格を形づくるべき自我なし。苟も人格あるものは主義なかるべからず、八方美人主義は眞正なる主義と容るべきものにあらず、主義あるものにとりては不安なる平和姑息なる平和は七世の敵なり。彼の八方美人の徒が是等のものを得て得々たるに比して其差豈霄壤のみならんや。あわれ主義あるものよ、希くば奮起せよ、光榮ある地上の平和は眞に卿等によりてぞ得られん。卿等は弱からん、然れども卿等の主義は斷じて强し。（興風會雜誌第十年第四號所載四十年一月稿）

漫評

一

○頃者一清人あり、革命の可否に就而吾人の所說を叩く。余即ち、君等の如き粘液質な奴等ばかり居る、清國の現狀にては、革命等とは思もよらぬことなりと一喝す。

○清國留學生の多くを見よ、皆其顏色蒼白にして、ノッペラボーなり。胸中に汪溢する活動の根本なる熱血何處にかある。よし、革命來たるにせよ道更に遠きを想ふ。

○蓋し革命の價や決して廉なるものに非ず。慘憺たる犧牲の山をなして、而て后に漸く之を實現するを得。佛國の革命、クロムウェルの革命皆然らざるはなし。

○近くは之を露に見よ、如何に醒風慘雨の大活劇を演じつゝあるかを。清人の如く小悧怜にして、禍を恐るゝ輩の夢想だにもなし能はざる處なり。

○吾人は、世界をして、否少なくも東洋をして、平和ならしめんが爲に、清國の自覺

を切望するや大なり。而して、沈滯せる現狀を打破するは、一に革命の大鐵槌による外、策なきを信ず。

○蝸牛角上に何事をか爭ふ、蠢爾たる生よ、富よ、名よ、かゝる泡沫の如きバニティーを捨てゝ、四億の民を有する、四百餘州に革命を宣傳するも亦快ならむや。

○よしや、かゝる壯圖を畫する能はずとも、他日の破壞に資すべく、鋭意ダイナマイトを造るも亦快ならずや。こゝに云ふダイナマイトは人のそれなり。吾人は、清國の前途、猶ほ吾人の囑目に價するを覺ゆ。

○而して、吾人を以てこれを見れば、革命は必ず來るべしと思惟す。こはたゞ時の問題たるのみ。

吾人は、帖木兒を生み、忽必烈を生みし此國に、第二帖木兒忽必烈の必ず再び生づることをを信ず。

二

○青年のハヾのきく時代は幼稚なりとは、故樗牛が青年を戒めし文中にある語なり。

眞に然り、然れとも日本の社界は、未だ青年の活動を要とするの時代なり。蓋し時と處とを問はず、革命の先驅たるものは、實に青年なればなり。

○日本の現社會は、あらゆる方面に於て革命を要求せり。宗教に、教育に、果た政治に。試に現時の政治界の有樣を見よ、議會果た何の要する所ぞ、二三者流の私語により、國家の政治を左右せらるゝのみ。斯くの如き生命なき、形式的議會は斷じて無きに如かず。

○現時政黨果た何の價値かある。說の爲めに鬪はず。主義の爲めに爭はず、利を見て東奔西走、何等偉大なる主張のあるあらず。何等鮮明なる旗織の標榜するあらず。宜なる哉、其委微として振はざるや。

○頃者政界革新會てふもの起る。吾人は切に其の健全に發達せんことを祈る。

○青年の後援を有する者は、多望なる未來あり。假令、當時に於て挫折敗壞したりとも、何等憂ふるに足らず。時來らば噴出すべき熱血は、一難一壓來たる毎に、益々蓄造せらるればなり。

三

○北米合衆國に於ける排日問題は確かに吾人の注目に價す。或は勞働者の猜疑より來たるとも云ひ、或は撰擧の方便の爲めにとも云ふ。或はしかあらむ。然れども、根本とする處は、確かに人種的憎惡の念に外ならず。

○蓋し人種の競爭は、必然まぬかるべからざる事なり。歷史は繰返すとかや、吾人は羅馬とカルセージの興亡史を讀む毎に、戰慄を禁ずる能はざるなり。

而して劣等人種の、漸次地球表面を驅逐せられつゝあるは事實なり。十八世紀より十九世紀を通じてより、アリアン人種の偉大なる勃興は、帝國主義てふ副產物を產み、今や此の思想潮は、全世界を汪流しつゝあり。

○此反動として、一方に、平等主義、社會主義、人道主義は盛んに皷吹せらるゝに至れりと雖も、彼の帝國主義に比すれば、蕞爾として論ずるに足らざるなり。

○所詮廿世紀は帝國主義全盛の期なり。而してアリアン人種と、亞細亞人種との、激甚なる競爭の開始するの期なり。吾人は、亞細亞の覇者たる、吾が帝國に生れて、此世界的大競爭の渦中に出づるを深く喜ぶ。吾人は、人道の語にあざむかるゝや久し。嗚呼人道、寧ろ吾人は、此語それ自身に劍の含まれたるを覺ゆ。基督敎の敎ふる處は、實に此人道に非ずや。而して彼の基督敎國と自稱する、即ち最もよく人道を口にする國民は、最も多く他の國民を奴隷にし、逆遇し、剿滅せし國にあらずや。吾人は未來永劫決して人道の語に欺かれざるべし。

四

○現時の社界は、あらゆる方面に新人材を要求す。而して、吾人は、切に健全なる新人材の出現によりて、幾分此眠れる社界を警醒し、自覺せしむるに至らむとをのぞむ特に吾人が切望措かざるは、健全なる新聞記者之れなり。

○嘗て故樗牛が、新聞時弊てふ欄に於て、新聞記者の改良を呼號せしとありしが、吾人は今に至りて、一層更に此必要を感ず。

○東都の新聞約二十を以て數へ得べし。而かも、讀むに足るもの幾許かある。其の言論公明正大にして、時勢を指導し得るもの果して何處にかある。自ら稱して社界の目

標と云ふ、甚だしいかな自ら欺むくの大なるや。

○今の新聞紙中、社會に重んぜられ、其言論の貴ばるゝもの殆んどなし。新聞紙の勢力なきは、即ち記者の品位の劣等なる事を表明す。朝飯前のなぐり書にては、人は首肯し能はざるなり。

○今や吾が國過渡期に入りてより時久し。而かも、何等國民に、自覺的精神の顯著なるものあらず。依然として左顧右眄適歸する所に迷ふが如き態あるは、確かに其罪の一半は、自ら操觚者を以て任ずる、新聞記者輩に歸せざるべからず。

○新聞記者なるもの、もとより至難の業なり。彼や時勢を達觀して、一世を指導せざるべからず。現時の如く、刧つて時勢に筆を左右せらるゝが如き記者は、害あるも斷じて社界を益するものにあらず。

○輿論の重ぜらるゝは、現時の大勢なり。然れども、輿論必ずしも眞理にあらず、苟くも新聞記者たるものは、確固不動の信念のもとに、時に當つては輿論に抗して、孤行邁往奮鬪せざるべからず。徒らに輿論の提燈持をして、利是求めんとするが如きは斷じて非なり。

○萬朝報は、嘗て吾人青年に、最も喜ばれし新聞なり。言論熱誠に富み、活動の氣紙面に汪溢したり。而して今や如何、日々唯に三面を飾るものは、花嫁花婿か？吾人は今や憎惡寧ろ面に唾せんとす。

○讀賣新聞は、嘗て吾人に、其文學的なるの故を以て喜ばれし新聞なり、而して今如何。小說は卑俗になり、三面を飾りて、唯一顧客をひかんとするものは、女學校評判記なり。

○知らずや、花嫁花婿よりも、女學校評判記よりも、より多く呼號すべき急務のあることを。

○他の新聞に於ては、多く知らず、知らずと雖も似たるもの同志、否、より以下ならんと信ず。たま〳〵國民の如く、一定の主義を標榜するものありと雖も、權勢に阿俯して筆を弄するが如きは、斷じて吾人の欲する處にあらず。日本も雪嶺博士退いて昔日の面影なく、二六又當年の慨なし。他は何れも論ずるに足らず、繪を入れて、僅か

に婦女子の歡心を求むるが如きものならむのみ。

○希くば、パンの如く、一日食はざれば、飢を感ぜしむるが如き、新聞紙を吾等に提供せよ。こは、蓋し、現時の、混沌たる社界にありて、必須缺くべからざる事に屬せずや。

○淋しい哉今の文壇、特に評論界の寂しさよ。樗牛逝いてより幾星霜、吾人は吾人のハートを衝動せしむべき、生ける筆に接せざるや久し。文界人なきか。人あるも沈默せるか。

○吾人は、善かれ惡しかれ、自己の胸奥を披歴して、常に所信を開陳する人を尊しとなす。人なり神に非ず、不完は所詮免れざる所。若し完璧の後に立論せんと欲せば、永久沈默の外なけん。

○言はずや、沈默は啞者の爲す處のみと。吾人は、健全なる手と口とを提供せられたり。使用に堪ふる丈口と腕とを振ふべきなり。何んの踟躕するとを要せん。

○思へ、樗牛が美的生活論の如き、如何に大膽なる信條の告白に非ずや。時や新舊思想衝突の時なりしとは言へ、情弊未だ舊思想の支配たる處多かりし時に於而、かゝる思想を公言す、吾人は眞に學者としての、勇氣と信念とに服せざるべからず。

○此間、萬朝報の論說欄に、中等教育の改良と稱せる記事あり。一讀啞然云ふ處を知らず。逢遇甚敷哉現時の新聞記者。

○人が永久に嬰兒ならざる以上、威壓と形式は永久に權威あるものにあらず。試驗制度の改廢や、二三形式の變化の如き、教育それ自身に關して、幾許の價値がある。吾人は、今迄中等教育を受來たれり。最初に於而こそ、兎角教育の形式に幾多の價値を附せしも、人間本然の性質は、如何に善良なる訓育も、到底如何ともする能はざるを悟り、飄然と去て、今や、中等教育の如きは、現狀のまゝにて充分なりと悟れり。たゞ吾人はあまり此時代に於て思想の壓迫だにせられざれば足らんのみ。

○吾人は、今に及んで、早稻田中學が日本に於ける最も善良なる中學たるを公言して憚らず。余は社界に出でゝ、決して早中を惡口せざるべし。

○興風なんどゝ騷ぎまはりしも、思へば痴けたる業なりき。吾がなすべき事は、かゝ

る事以外に重積せるに非ずや。

○さらば瓔珞同人諸君よ。余は、今后余が一大事業として、宿痾と新病（一は胃病一は神經衰弱）との驅逐につとめん。泣かず、笑はず、騒がず、しばらく靜養せん、本年は專ら精神修養の爲めに費す覺悟なり。（瓔珞第五號所載四十年三月中作）

第二編　感　想

新島先生の墓に詣ずる記

今日は安息日を幸、故新島先生の面影を偲ぶべく、友と手をとりて若王寺山頂の墓に詣でぬ。

山は洛東に在り。鴨水を渡りて東するしばしにて麓に達す。秋のくれなれば、山紅葉に彩られて道心坐ろに起り、心三昧に入らむとす。

落葉にうもれたる小徑を辿れば、足もと通ふ谷川にも人の世ならぬひびきあり。

墓地につきぬ。草結ばれて卒塔婆も仆れたり、苔生じて碑もよめずなりぬ。此の地この墓そもや幾人のたましひを宿すならん。逝きにし人の惜まれもし悲しまれもして幾その時を經たりけん。此より此、彼より彼、墓表の中を辿りて、とある墓門をくゞりぬ。苔堆く生ひて枯葉石段を封じたり。碑の頂十字架の默せるに葛のまつはりて、云ひ得ぬ思ひはまず我が心を領しぬ。

是。これぞ彼の新島襄先生の偉靈が千歳の憂をのこして長しへに眠らるゝところになむ。友も我も懼然として御前にぬかづきぬ。奇しきたもひのむらむらと、たゐやらぬ胸の糸のもつれ哉。

なつかしさは起りぬ。

夕の風は一しきり、寂しさは加はり行く。うれし、ありし昔の其の人の、朧おぼろとまのあたりに笑みませるよ。恍。先生の温容を見る。友は祈りぬ、吾も祈りぬ。友に聲なく、我に聲なし。夜色は加はりて月未だ出でず。

吁先生、去つてより幾春幾秋ぞ、洛北相國寺畔の學舎、今に讃美歌の聲は響けど、何等靈のひゞきを傳ふるぞよ。彰榮館（同志社の一部）の鐘に、三百の兒今に起き臥しすれど、赤毛布健兒は長しへに其の影をたちぬ。日毎説教はくり返さるれど、學生の机上バイブルに塵つもりぬ。

先生の靈それ安きを得るか。

嘗て先生の靈柩を奉じて、茲に吊らひ泣いて誓ひし一千の子、今は何處に求むべき。涙痕未だ乾かざるに、彼等は道ならぬ道に入りぬ。かはる世とは云へ、餘りに人事の儚からずや。先生が慘憺たる訓旨泡沫の夢と過ぎて、あはれ影だに止めずなりぬるか。墓標は徒らに風露に委せられんとす。

先生の靈はそれ安きを得るか。

追想は感慨を生み、感慨はやがて悲哀の泉となり。惆として見る天の一角、愁をふくめる下弦の月、今宵は血の色を現ずるぞやや。

吁月も愁へよ、星も泣け、吾も亦共に泣き共に愁へん。砧の遠音にまじはる虫の音、淋しとも寂し、悲しとも悲し。

我は醒めぬ。

先生の靈よやすかれ、世濁れど我濁らず、否先生の靈前には濁る能はざる也。

罪ふかゝりし我が半生、殘恨の念に腸もちぎるゝよ。

淅瀝風又一しきり、先生の御手にバプテスマを受ると感ず。悔いん、罪の身はこゝに悔いん、悔いて神のゆるしを得て、信仰の綱たぐりて信念の山のぼりせん。

更闌けたり。心も心ならず、身も身ならず。

去らんか去り敢えず、俯仰低回、木の葉の紅き二ひら我が顔をかすめぬ。（三十六年の秋の或日曜の夜）

附記

余が茲に殊更にこの舊稿をとりて諸君に示さんとするものは、衷心の要求まことに已むを得ざれば也。

余が過去の生涯に於て未だ此時程吾心を感動せしめしことなし、インスピレーションに接するとはかゝる時の謂なるか。

殊に頃日、口に宗教を云ふ人漸く多くして、而も一人の眞なる宗教家眞なる教育家出でず、吾人をしてそゞろ故先生を追慕する情を禁ずる能はざらしむるものあり、乞ふ其何の故たるかを告げん。

此の所謂宗教家教育家なる人々は、彼等の事業に對し、其根本に於て大なる誤解をなせるを思ふ。蓋し彼等の事業は至難中の至難なるものに屬す、然るにもかゝはらず彼等は何等の準備もなく何等の確信もなく、たゞ教會と校舍と說教壇と教壇と經本と教科書と手と口と其他の形式とを以て輕々にもかゝる事業に從事したり。嗚呼單に是等のもののみを以て人の子を教へ導き育てんとす。又危い哉。

若き人は煩悶（もだえ）たり。彼等はよく之に解決を與ふ、而も與へられし人は依然として不安也。若き人は迷ひたり。彼等はよく之を導く、而も導かれし人は依然として適歸する處を知らず。若き人は悲しめり。彼等はよく之を慰安す、而も慰安されし人は依然として歎ばず。若き人は怒れり。彼等はよく之をなだむ而もなだめられし人は依然として憤慨あり。若き人は罪を犯せり。彼等はよく之を責めよく之を戒む、而も責められ戒められし人は依然として悔悟なし。

是覆ふべからざるの事實、世の識者以て如何となす。

嗚呼水中に薪炭を投じて火を燃やさんとす、又難い哉。彼等が尊重するあらゆる形式なるものは冷かなる水のみ。若き人々は乾燥せる薪炭なり、宗教や教育や之を燃やすに於て始めて價値を生ず。之を燃やさんと欲せば須らく火氣を以てせよ。

火氣とは何ぞや、吾人が稱して品性と云ふもの即ち之なり。品性なる哉品性。吾人が憧憬する其人は、必ずしも博識なる人に非ず、タイトルを有せる人にあらず、たゞそれ品性の人のみ。新島先生の如き人のみ。品性の人は吾等に對して大なる權威を有す。吾人は彼の前に出ずる時敬慕の情と共に又畏敬の念を生ず。敬慕する處其處に感化あり。畏敬する處其處に謹慎あり。かくして彼は容易に吾人を燃やし得るなり。

今の所謂宗教家教育家なるものにして自ら顧みて忸怩たらざるもの、それ幾許ありや。

吾人は今更ら彼等を追究して、罵るの餘りに無情なるを思ふ。たゞ一事の許すべからざるは彼等の多くは是等の事業を、一方の方便に使用せる事なり。單に粮(かて)を得んが爲めに、單に名を求めんが爲めに、單に私利を貪らんが爲めに。嗚呼宗教教育を方便に使用するものを包容せる社會は禍なる哉。

思うて茲に至る、品性の人を想ふの情、切にして新島先生を想ふの情切更に切なり。(興風會雜誌第十卷第二號所載卅九年三月中作)

戀

此の世ばかりの夢ぞかし、かかる思をする事よ、東方朔が九千歳、西王母が一万歳も、名のみ殘りてあとも無し。うきよを物にたとうれば、岸のひたひの根無草、入江の水にすて小舟、波にひかれて行へなく、花のうへなる露よりも、あやうき人間のしらですむこそ拙けれ。だいぼんわうの樂しみも、思へば夢の中ぞかし。かりなるあだし世に、思ふ人になぐさみて、思ひ出とは成るべけれ、又いかに榮ゆとも、思はぬものは如何にせん―云々

こは、瀧口入道が、此頃はまだ齋藤時頼と申し丶頃、彼の横笛を見初めてより、鴛鴦のちぎりも啻ならず、思ひ思はれし中の、父なる人にせまられて、つきせぬ名殘をぬれにし袖にしぼりつゝ、いざ彼の女忘れむとせる刹那に起せし菩提の心とや。

嵯峨野の行澄も、其心を尋ぬれば悲しき限りならずや。之が浮世の義理とよ、さてもさてもつらきは人の世なれや。いつくしみ深き神は、如何なればかくも酷なる制を定め給ひしぞ。あはれ世に吾等の見て美しと思ふものは、まこと人の情ならずや、かくも憂き、かくも果(はか)なき世の中に、吾れ人が假の命を露と頼みて、今日と暮し、明日と暮

すも、唯之あるが爲のみ。愛とは誰が云ひそめし、戀とは誰が云ひ初めし、男も女も親も子も、彼等の前には、已れの身をも命をも貴き犧牲となして、猶ほ微笑めるに非ずや。智とは誰が授けし苦痛ぞ、意とは誰が授けし憂き事ぞ、智は吾を苦しめ、意は吾を惱ます。嗚呼智よ、意よ、汝を渴仰せし昔しは吾も幼なかりしよ、而も吾は汝によりて一も得る處なかりき、汝は徒らに吾れ人を僞りの渦中に投ぜしめ終るのみ、行澄も、大悟も、吾に於て何するものぞ。横笛を得たる齋藤時賴と、横笛を失ひし瀧口入道と、ア、吾れそも何れをか選ばむや。（瓔珞第二號所載卅九年四月中作）

思ひ出のまゝ

吾心弱うして、吾肉を思ふがまゝに統べ能はざるぞ悲しき、あゝ意志の修養！、吾れ幾度か之れをつとめて、幾度かこれに敗れ、敗れ〳〵て吾心吾肉と共に弱うなりまさるが如き心地す。人里離れたる陋屋に、獨り悵として思ひに惱む時、ゆく末の長き〳〵行程が、いと堪へ難く覺えて、何とはなく胸苦しうぞ覺ゆなる。

今日で學校欠席する事約三日、此の間唯なすこともなく、あらぬ思ひに耽り居りぬ。樗牛の靜思錄等ひもどき見るに、病はかわるとも、同じく惱める身にとりては、同情の想ひいやまさるを覺えつ。

君よ、弱しと笑ふ勿れ。まこと吾れは弱きものなるを。あらゆる懷疑は次第〳〵に吾が胸につもり、積り〳〵て解くすべもなく、一行一動皆夢の中の心地ぞする。誰れか云ふ靈ありと。あゝ、吾身に果して靈ありや、靈ありとすればなぞ吾靈のみしかく吾れにつれなき。あはれ吾靈吾身を率ゐよ、かくて吾れ初めて安ずるを得ん。

吾れ今靜思の身となりぬ。初夏の朝は氣もうらゝかに、庭前の綠樹生き〳〵として、そよ吹く風はそをやはらかに撫でつゝ、白き雄蝶雌蝶のひら〳〵と其間に飛ひ交ふ樣、得も云はず美しけれ。

よい哉自然！吾れは無心になりて、汝れが懷に抱かれんことを望むぞかし。いざさらば、吾れ浮世の名利を捨てゝ、こゝに神の默示に從はむ。（瓔珞第三號所載三十九年六月中作）

嗚呼ダンテを憶ふ哉

一昨日來懶きこと限なし。時に郊外に嘯きて、古今に逍遙し、時に机邊に兀座して、獨り空想を驅るタマ〳〵机上にある英雄崇拜論を繙き、ダンテを讀む、吾人の胸奥に頻に、生ける衝動を與ふ。即ち慨然筆を呵して、此章をつくる。(二十一日午前六時半)

カーライルは、其像に題して、曰く、

『仰き見れば、頭上一片の桂冠を纏ひ、其像趣の物寂しさ、宛ながら虛空に描けるが如し。不死の悲哀、不死の苦痛、搗て加へて、不死の勝利は髣髴として、眉間に漂ひ——ダンテ一生の經歷、坐ろ此畫に徵すべし。余の考ふる所によれば、古來、人の描かれたる人物中、未だ曾て、斯の如き慘ましき風貌を備ふる者あるを見ず、滿面に湛ふる、斷腸の苦色は、悽愴として、人を襲はむとし、而かも其底を窺へば、小兒の如き愛情ありて、柔和温情近づく可し。然れども其情緒も一度び凝ては、峻酷を加へ、痛烈を加へ、肝離背反孤行傲然たる絶望の極致と化し、柔和温存なる天魂の、嚴然凛乎粛々として、内より淋しく眺むるは、物凄くも亦恐ろしく、恰かも、玲瓏たる氷嶽に伸吟するに、髣髴たり。而して、之れ、又無音の苦痛なり、無音冷嘲の苦痛、其心腸に蠹食せる事物も、鬼神の如く之を蔑視し、唇端爲めに、緊まるをみる。——恰も、之れ、彼を呵責せる暴力も、彼を絞殺する酷刑も、亦顧るに、足らずと爲し、我が大威力を以てせば、遙かに之に優れりと謂ふが如し。之れ實に畢生の間、亦手を探つて、天下に對し、不屈の爭鬪に怯まざるの容貌なり。愛情は擧げて憤怒と化せり。何人も其怒氣を解く能はず。然れども、其徐々として、嚴正なる、其默々として、確然たる宛然ら神の怒れるが如し。——眼中又驚愕の情を含み、恰も詰問せるが如く、凛として、四邊を驚視す。曰く、天下何物ぞ、斯く無情なる耶。——と是れ即ちダンテ也。其外貌此の如し「沈默一千餘年の聲」一度彼が口を借つて、「霽妙不思議の聖歌」を謠ふ矣』

嗚呼ダンテを想ふ哉。冥して、遠く回想すれば、彼が悽慘なる風貌、切—切—吾人の胸奥に通ふて、肺肝を貫き、吾人に向つて、痛烈なる一大刺戟を與ふ。曰く、不死の悲哀、不死の苦痛、曰く、不死の勝利、斷腸の苦色、曰く、小兒の如き愛情、無音冷

嘲の苦痛!!!不屈の爭鬪!!!誰が斯の如き語を聞き、肅乎として、襟を正し、奮然として、一大勇猛心を發揮せざるものぞ。……まことにダンテ一生の苦痛に比ぶれば、吾人の前途に横はれる、人生の行路難の如き、些々又論ずるに足らざる程のものならむのみ。

いでや。吾人をして、更にダンテの生涯に就て云ふ處あらしめよ。余輩が其生涯に就て、知る處のものは、實に炎々たる、天をもやかん一大熱情なり。さなり、彼が胸は實に沸騰せる熱血を以て滿たされしなり。現時の淡々者流或は、意志の修養を說きつとめて、感情の抑制を唱導す。然り、彼の所謂眼中空名と黃金とより無く、その前には叩頭も、虛飾もはた佞辯をも辭すなきの徒輩にとりては、高貴なる感情の聲、こは實に彼徒の所謂榮達を防げ、成効を呪ふものならむ。何となれば、其聲の發動する處、天下國家をも猶ほ顧みるの暇あらず。況はんや、己れ一身の利害問題に於てをや。而かも、余輩は彼等此聲を聞く能はざのものを目して、世の最も憐はれむべき者となす。何となれば、彼等は自己てふ一大實在者の威嚴をすら保つ能はずして、之を惰落の深淵に陷らしむるものなればなり。まことや、此感情（熱情）——の聲を聞く時は其前には如何なる困難も、あらゆる俗界覇權も。之を如何ともする能はざるなり。見よ、ダンテが其故國たるフローレンスを逐はれて後の行動を。……彼れそも何が爲めに故國を逐はれしや。……彼が熱烈なる感情の併發する處、到底フロレンスの長官となり、教長となりて、悠々一生を送り、所謂空名を鄕黨の間に嘖々たしむとが如きこと能はざりしによるなり。況や、其教長の倚子にある時に當つてや、各派の軋轢漸く其度を高めて、ダンテの排擊愈急なりしに於てをや。遂に、其財産は全沒せられ、其生命又求められ、『何地にダンテを捕ふるにせよ、之を生きながら焚くべし』てふ慘忍なる公文書をすら發せらるるに至れり。……而かも、斯くの如き迫害に遇ふて、彼れの情は、益々激し、健鬪益々壯烈也。遂に、フローレンスの長官稍温和なる交渉に出で、若しダンテにして、謝罪と罰金とだに承諾せば、歸國を許す可しと云ふに至れり。此時。……此時ア、此時に當つて、ダンテの答ふる處を聞ケ『若しそれ無罪と呼ばるゝ無くして爲めに歸る能はずむば余は斷じて歸らず』。と嗚呼、何等

崇高にして、森嚴なる語ぞや、實に彼にとりては、同じく罪惡の子たる人によりて、罪を許さるゝが如きことは、本懷とする處にあらざるなり。彼は人に罪を得るも、猶自己をあざむくこと能はざりしなり。況んや、天をあざむくことに於てをや。彼は人の世に於て、罪に死するも、天國に於て、罪を許さるゝことを信じたり。嗚呼此高貴なる感情……さなり、余輩は、之を、感情と云ふ、斯くの如き信切は、決して、冷かなる意志や、淺薄なる智識を以てはかる事能はざればなり。嗚呼斯の如くにして彼れは其故國を追はれたり。カーライルは、今后のことを記して、曰く、『世界の廣き何ぞ限らん、而かも此ダンテに取ては、今や天下に隱れ家なし。こゝに於てか、彼は出でゝ、東倚西托保護者を尋ね、其所謂離騷たる行路難を澄しつゝ、何處ともなく徨び行きね。夫れ窮士は快心の侶に非らず、不幸の極にあるもの、勢ひ世を憤らざるを得ず。今や、ダンテは、苦々しき追竄の身となり、其倨傲熱實の性、其沈蔚短慮の情、固より人を懷つく可き、人物に非ざるなり。ペトラークが記によれば、彼に左の如き逸話あり、ダンテ曾て、カンバラスカラの宮廷にあるや、一日、其憂蔚寡言なるを咎められて、廷臣にあるまじき答辭をなせり。デラスカラは廷臣に圍繞られ、俳優戲言の徒を以て、慰められ、打ち興じつゝ樂みしが、偶々ダンテに向つて、曰く、『此碌々たる徒輩すら人を娛ましむこと、此の如し、然るに子は賢にして、悠々此宮廷に坐し、又一物の吾人を慰むる無きは、何ぞや?』ダンテ苦々しく、答へて、曰く、『否決して、怪しむに足らず。殿下世に「似たもの同士」との諺を記さず哉と……娛ましむる者あれば、又娛めらるゝ者、無くんばあらず。此の如き人物は、其倨傲なる沈默を以て、其諷刺と憂悶とを以て、到底志を宮室に得可き者にあらざるなり。……彼は次第に自反して、此地上又求安の地なく、又恩惠の希望なきを悟れり。浮世は既に彼を捨てゝ、飄零窮まり無からしむ。今や、一人の彼を愛する士あるなく、天下又一慰籍の澁苦を撫するなし』と、

嗚呼權者の前に立ちて、猶ほ自己の本領を沒却せず毅然として、痛罵一番「似たもの同士」の語を吐露す。之れ實に、孟子の所謂威武不能屈もの、大丈夫の面目躍動せるを覺えずや。

ダンテ既に悉く現世に呪はれ、又現世を呪ふ身となれり。……『是に於てか永遠世界は自然に滋々深きを加へ、ダンテの心腸に感銘せり。爾來彼は想を此一點に集注するに至れり。其フロレンスと追竄を有する、此倏忽たる時間世界も、之れを夫の凛乎たる眞如の世界に較ぶれば、只だ空假なる小天地にして、畢竟幻影に過ぎざる耳。嗟吁、フロレンスの如きは、爾決して、見ざるべし、然れども、地獄鐵獄天國の如き、爾必ず之を見ん。フロレンスや、カンデラスカラ幻、浮世や、人生や、是畢竟何者ぞ。！！人間萬事泡沫夢幻消え行く先きは、「永遠界」のみ、豈他にあらんや。

塵界茫々家無きのダンテは、今や、其偉愛を攬して、愈々凛乎たる、他界に近づき、身の一大事に於けるが如く、自然に思想を此方面に傾注せり。夫れ、他界の有形なる乎、無形なる乎は實に萬人の一大事也、……然れども、當時ダンテは、之を以て、確かに、科學的定形を有すと信じ、血の池地獄、叫喚地獄、常闇地獄等は、歴然ととして、彼方にあり。其之を見るや、疑無しとする處、猶ほ吾人か彼處に行かば、コンスタンチノープルを見るや、疑なきが如し。ダンテの心は、永く此確信に滿ち、肅然無言の冥想に沈んで、凝らしに、凝らし、其結果は遂に、ダンテの心竅を破り、「靈妙不思議の聖歌」と成つて、天外地表に發出せり。嗚呼近世の最大雄篇「デバインコメディイ」は即ち是也。

ダンテ浪々身を以て、かゝる大文學を屬せしことは、彼に取りて、大慰籍たるや疑なく、又自らの驕矜たるや、知るべきなり。

其之を著はすに當つてや、一フローレンスも、一介の士も、曾て、之を障ぐる能はず、又之を助くる能はざりしなり。其一大雄篇たり、人間の最偉業たるは、ダンテも亦了知せり。』

ダンテが著述に盡したる大苦心は、吾人の知ざるべかざる處、彼、曰く、『多年此身を瘦却せしは、實に斯書に在つて存す』と。嗚呼、然り、是れ誠に痛苦辛勞の結果にして遊戯にあらず、烈々たる熱誠によるなり、蓋し彼れの書たる、總べての最善の書に於けるが如く、亦幾多の意味に於て、其心血を披瀝して、書かれしもの也。

則ち、此書たるダンテ一生の全史也。彼は此の大成后、未だ老いたりと云ふべからざ

るも、五十六歳を一期として、沒せり。世傳へて、之を憂心の狂と云ふ。碑銘に曰く、

『我はダンテ也、故國を逐はれて、此土に伏す』と……

嗚呼ダンテは死せり。ダンテの肉體は死せり、而かも其偉靈は斷じて死せざるなり。ダンテの心影を宿せる彼の「デバインコメデイ」は、まことやチエークの云ひけん如く、靈妙不思議の歌として、そが永刼に歌はるゝにあらずや。

嗚呼、其歌には生ける天地の聖靈の宿せるを覺えずや。カーライルはダンテを呼んで詩人と云ふ。嗚呼詩人、詩人なる哉、此の如き詩人こそ、眞に一世を壓倒して、乾坤を開拓するもの……淋漓たる肝血の滴……滴れ凝つて、こゝに一大詩篇をなす。

嗚呼ダンテ一生の歴史既に一大詩にあらずや、アゝ肝血を注いで染めし彼の歴史……

……之が織りなせし其詩……宜なり、人の肺腑を貫いて、生ける衝動を與ふることや。之れを現時の徒らに閑榻に凭り、句を摘み、韻を敲き、飽食暖衣現世の歡樂を貪りて、日もなほ足らざるが如き、悠々たる詩人に比すれば、何ぞ其差單に霄壤のみならむや。云はずや、其身先づ勇者たらずんば、如何ぞよく勇者を咏ぜんと。

嗚呼ダンテが一生の歴史は、實に其風貌にあらはれたるが如く、不死の悲哀也。不死の苦痛也。よし不死の勝利はありとも、其中には又斷腸の苦色を湛えては、不屈の爭鬪を濟さずや

嗚呼彼の雄篇をなせし所以のものは實に此不死の勝利なりし也。

不死の勝利……之れ豈高尚なる勝利にあらずや。而かも、こゝに吾人が觀過すべからざる一事あり、そは彼の風貌也。さなり、如此悽慘なる風貌中、小兒の如き愛情ありしこと之なり。

嗚呼、小兒の如き愛情……愛情はあげて憤怒と化せる中に、なほ此温き面影のありしはそも何が故ぞ。余輩はこゝにダンテの戀物語を記して、這般の消息を明かにせんと欲するなり。カーライルは記して曰く、

『彼の尚幼なるや、嘗て同齡同格の一小美女ビアリスト、ポーチナリと云へる者に邂逅せしが、是ぞダンテが戀愛の前初にして、爾來時々相見えて、遙かに交際を持續せり。

讀者諸君は、皆此優美慇懃の情話を知らむ、兩者互に相離れ、彼女は遂に他にとつぎ、

後幾何もなくして、夭折せり。思ふに、ダンテの詩作中、彼女は較著なる人物にして、又ダンテの生涯に大なる影響を有する者の如し。故に、ダンテが戀情の底を敲いて、其全力を傾注せしは、即ち彼れと相別れて、獨り幽明途遠き永遠界裡のビアトリスなるが如し。彼女逝いてよりダンテ妻を娶りぬ。然れども、伉儷全く密ならずして、琴瑟互に其和を失せり。思ふに、嚴峻熱實の人、加ふるに其過敏の激性有るに至つては、共に幸福を收めんこと、容易の業に非らざるなりと、即ち知る、ダンテが其生涯の悲慘なる最初の頁は實に、失戀てふ苦がき經驗なりき』と。

嗚呼、氏の苦き經驗は、遂にダンテを驅りて、フロレンスの敎長を去らしめ、長官を棄てしめ、鄕黨の間に名聲を失はしめ、更に鄕里を放逐せしめて、流離落魄、天下に隱れ家なきに至らしめ、遂に憂悶苦惱の中に、終生を了はらしむるに至れり。而かも、斯くの如き間にありても、猶ほありし昔の戀の影心の裡に消えやらず、小兒の如き愛情、其風貌にあらはれしなり、彼が死の伴侶とせし一大詩篇も、詮じ來れば、其源はこの初戀の破れしに發せることを覺ゆ。嗚呼、初戀の破壞……誠に悲しき限りなる哉。吾人は今やこゝに筆を措かんとす。觀じ來れば、ダンテ其人は實に一大感情の權化なり。……吾人が此感情の權化について記さんとする時……吾れ又、たゞ情波のみなぎるを覺ゆるのみ。此一篇統一なきをせむる勿れ。吾人は頻々たる刺戟に觸れて、まこと統一の暇なかりしなり。問ふを止めよ、感情の効果如何と。借問す、効果とは何ぞ？嗚呼、人爵と、黃金と、現實界より以外、何者をも認めざる走屍行肉の徒、何すれぞ高貴なる感情の威力を知らむや。事毎に人を測り、事業を測るに、是の尺度を以てす、畢竟葦の穴より天をのぞくの類、如何ぞ其眞相を探り得んや。由來成敗利鈍は、以て人を論ずるに足らざるなり。今の世、豆大の眼孔を以て、踉々怯々、靑蠅の臭きに競ふが如く、利をみて集まる「似たもの同士」多き時に當り

嗚呼、何者の權威をも恐れず、濁惡の社會と奮鬪して止まざりし、大熱情家、大詩人ダンテを想ふ哉。（明治三十九年八月中ノ作、櫻珞雜誌、第四號所載、）

冷熱集（明治三十九年秋）

余輩は形式主義の破壞者也

現時呪ふべきもの一にして足らず、就中余輩が最も之を惡み之を呪ひ之を破壞せんとする處のものは彼の形式主義是れなり。之を倫理學上に見るも彼のカント一輩の形式說の甚敷人の天稟を傷けて無能力者たらしむる事は瞭然たる事實也。之を敎育上に見るも、或は敎授の形式を云爲し、敎具の整正に腐心して唯之れ形式美を謳歌する、其の弊の至る處や即ち敎育其の者の本義を誤り、各自個性の發展向上を阻害し任に當るものは熱烈を缺き、眞摯を缺き、結果の及ぶ處や彼の敎育者をして又一時の形式を通過すれば萬事終れりと云が如き謬想に滔らしむ。形式主義の心醉者或は言はん、國家としては即ち國家の形式ありて國家を統一し、一家としては又一家の形式によりて之を統一す、敎育に於ても宗敎に於ても世上百般の事皆然りと。誠に吾人も又其の統一美のうるはしきを嘆美するものなりと雖も統一美の眞價ある處は永世不朽の一大眞理のもとに翕合せられたるものこれならざるべからず。借問す、現時の片々たる形式主義、果して斯の如き大信念のもとに樹立せるものなるか。

遮莫、余輩は飽くまで形式主義の破壞者也。僅かに一事のなつてあれば之を嘆美し、謳歌し、之れがためにあらゆる形式表情を講ずるは現時の社會の通弊なり。余輩頃日ひそかに、余輩自身の行動を客觀的見地に立ちて觀察し、自分も亦形式主義に甚敷同化せられ、區々たる形式を以て世に立たんとして、些々たる形式の威赫によりて、修養に資せんとするを見て、醒然悟る處あり即ち此章を錄す。

余輩は形式の何たるかを顧るの暇なし

余輩の前程の指針たゞ之あるのみ Go it! Go it!! 爲せと我が心が命ずれば即ち之をなせ。なすべからずと命令せば即ち斷じてなす勿れ。事の善惡正邪畢竟自己の個性によるもの、斯くして結果の惡しきに至らむは即ち個性の惡しき證のみ。個性は即ち天の授くる處、惡なりと豈其の中に幾分天意の存する勿らんや。凡々たる善人となるよ

りも傑出したる惡人となれ、之れ吾輩の主張なり」。

大熱情の人となれ

今の形式謳歌者は即ち口を開けば意志修養を云爲す。而かも知らずや、古來幾多の大事業は殆ど之れ大熱情家によりてなされたるとを。

吾人は之を遠きに求めず近くは老西郷の如き……人或は言はん彼は意思の人なりと何ぞ其の英傑を見るに其の半面のみを以てするや。城山の露と消去りしは何が爲ぞ。彼は國を憂ふるの熱情と子弟を愛するの至情とにかられて即ち事こゝに至らりしに非ずや。滔々たる世上の小才子連如何ぞよく這般の消息を解し得んや。」

泣き事を廢止せよ

茂々として消極的道德を守り戰々として事勿れ主義を遵奉する如きは丈夫の本懷にあらず。況んや、戀に泣き、逆境に泣き、人情の浮薄を泣くに於てをや。泣く勿れ、悔ゆる勿れ、泣く時間あらば、悔ゆる時間あらば、更に一大勇猛心を發揮して奮鬪場裏に入り、かゝる不健全なる思想を忘却し、驅逐し去れよ。世上の事、觀じ來れば與し易し、何ぞ泣き言を繰り返すの要あらんや。

一大快樂主義の人となれ

一大快樂主義の人となれ、小快樂には常に苦痛伴ふ、大快樂には即ち之れあるなし。何をか大快樂と云ふ、孟子の所謂大丈夫の如きもの即ち之れなり。三唱して嚴に之に向つて邁往するを要す。

勉學か然らずんば運動然らずんば睡眠のみ

勉强か、然らずんば運動か、睡眠をなせ。此三者は即ち神身を健全ならしむるもの、茂々として學び、飽けば即ち郊外に出でゝ蒼々たる天を仰げ茫々たる平原に俯し、遼乎たる古今に逍遙す、疲れば即ち鼾聲雷の如く山岳崩るゝも猶醒めざる迄に眠れよ。此域

に達すれば即ち人事たゞ易々たらんのみ。

厭ふべき哉夢の惰落

夢は心の幻影なり孔子が夢に周公を見ずと嘆きし何が爲ぞ。嗚呼之は實に周公を追慕する念の胸中に失せしを嘆ずる聲ならずや。余思ふてこゝに至り顧みて騒然深く吾が心性の惰落を慨嘆す、吾が頃日夢る夢は果して何ぞ……オ、……惰落の影よ……

……願くば彼方に去れ。

●

「爾等先づ神の國とその義とを求めよ、然らば之等のもの皆汝等に加へらるべし、是故に明日のことを思ひ煩らふ勿れ、明日は明日の事を憂慮らへ一日の苦勞は一日にて足れり」

之れ豈人生に至大なる樂天地を與ふる啓示にあらずや。嗚呼吾人は一日……其の一日をベストを盡して神の國と義とを求めて毫も悔ゆる事なきに至るべきなり」。

神の國……之は實に絶體理想の彼方を指す、吾人が標榜して憧憬する所は實にこゝにあり、又あらざるべからず。義とは相對理想の此方を指す、吾人の努はこゝに向つて進まざるべからず、相對界にありて、絶對界を忘るものは人生を不幸ならしむるものなり。單に絶對界のみにあこがれて相對界を顧みざるものは足の地上にあるを知らざるものなり、オー吾をして永代不滅の神の國を仰慕せしめよ、不斷の清き祈りをこゝに向つて注かしめよ、而かも一日……此一日を片時も忽になさしむる勿れ、一日の苦勞、其の苦勞をして微笑ましめよ、勞中の笑み之れ實に至甚なる人生の慰安にあらずや。嗚呼吾をして願くば明日のことを憂慮せざる人とならしめよ』。(十一月一日午前五時)

覺醒の第一歩

我が心の弱きを悟りては又迷ひ、得ては又失ふ。輾轉たる悶々の情、此間に湧き來り

て堪へやらぬ痛苦胸に浸み渡るなり。われ覺醒を叫びてより而かも幾百回ぞ。われ修養に志してより之も幾年ぞ。うとましき吾よ、何故なれば吾が思ひの幾百分の一だも達し能はざる。

顧みて心を思ひ肉體を想ふ。心は惰落し肉體は病めり。かくして吾は茫乎として五十の人生を惰落せる心を伴侶として病軀を抱て送るべきか。嗚呼鏡に向ふ時にのみ頭の白きをかこつ老婦は猶幸なるべし、鏡に向て疎髯の鼻下に生へしを見、懼然として吾が生の既に二十を越て何等なす處なきを思つて悵乎、惆悵のやるかたなきを嘆つ吾は……あゝ幸なるべきか？十一月九日午前五時半

我が志

深き意味に於ける志に非ず、吾は自己の性情よりして躬ら社界の覺醒者となり、警告者となりて世の奮闘場裏に出でんとす。事もとより容易のことにはあらず深き修養を要せずや。

我が心

朝起きしは正に四時過、細雨蕭々の聲を聞く、覺りては醒め、醒めては迷ふ。嗚呼吾が心弱き哉。さなり、吾心は弱しと雖もなほ靈性のつきせぬ激勵と慰藉とを感ず。嗚呼吾は甘んじて靈性の頤使に從はん哉。うとましかりしよ、吾の力を信ぜしことの……自ら罪なしと云ふものばかり世に罪あるものはなしと。誰人か敎へけん自ら偉大なりと云ふもの如何ぞよく大宇宙の前に於而之を誇り得るものぞ。神を嘆美し渴仰するものを目して迷へりと云ふ。嗚呼誰か迷はずして人生を送り得るものぞ。激然迷はずと言ふものに悲しみあるは何が爲ぞ、憂ふるあるは何の爲ぞ、爾は春の爛熟に憧れしこゝろを以て秋の惆落に泣かざるか？吾人は人たる以上又迷はざらんと欲するも得ざるなり。

科學を樂しむの精神を養成せよ

吾人はあらゆるものを知らんことを希ふ、とは言へ愚かなる智と短かき生涯とは之れが願をして百分の一だも達せしめざるなり。

君人はまことに三界茫々の境に逍遙して冥々裡に適歸する所を知らざるものなり。然れども凡てのものは之れがなされ果たされし時に慰藉あるものに非ず（よしありとするも甚だ短かきものたる也）。之が一の標榜に向つて憧憬の力を注ぐ處、そこに大なる慰藉と奬勵はあるものなり。

さなり吾人は小さく弱し然れども吾人の靈性は偉にして又强なり。宇宙の神秘は靈性によりて幾分光明の曙光をもたらし來たる。誰れか己れの小弱に絶望して自ら棄つるものぞ……まことに吾人は靈性の擁護によりて絶對界の彼方をも幾分洞見（よし誤謬ありとも）する事を得、況んや相對界のことに於てをや。よし吾人の智は淺く小さくともなほ相對の此方にある宇宙眞理の幾分を發見し、之れによりて慰安と娯樂を感ずる蓋し小量にあらざるべし。つとめずや、其間に穩情と强志とを養成する事を得ん。

戀愛の心を想ふ

美はしき哉情!!吾等之あるが爲めに無趣味なる社界に猶餘生を樂しむものになむ……

……情の極致、之を戀愛と云ふ、偲ばるゝ哉。四面楚歌の裡、佳人の紅涙に征衣の袖を濡らせし古英雄の面影や、戀愛は人をして自然にかへらしむ、虛飾なく、虛僞なく、衒氣なし、美はしき哉。

歡樂の姿は實に青春の秋に於て人生に綾羅を纏はしむるに非ずや。青春……之なくんば、

花何の美かある、月何の匂かある。春の爛熳も秋の淸冽も何の意義かある。吾人はまことに樗牛と共に之を疑ふものなり。吾人をして願くば戀愛を得せしめよ。之に憧れしめよ、かくてぞ吾が心は永劫に歡樂の姿に彩れん。

嚴肅なる規律的生涯に入れ

これ余輩が幾度かなさんとして能はざるものなり。もとより吾人は機械にあらず、故に萬事萬端一法則のもとに統率し能はざらむも、而かも或る程度迄は修養の一方法として規律を嚴守するを要す。

起臥飲食修學の時間を豫め定むるは規律的生涯に入るの最大重要問題なり。吾人は先づ之れに向つて成心するを要す。

次に起るべき問題は雜談運動新聞雜誌閲讀時間の制定なり。嚴肅なる生涯を欲する如きは卑穢なる俗息的言辭を謹まざるべからず。青年の頃は殊に女の品評他人の評論の如きを好むものなればかゝる事は斷じて廢止するを要す。

新聞雜誌の閲讀に當りてもなるべく俗事……新聞の三面記事等は斷じて眼に通すべからず。論文二面を讀まば他は顧みるを要せざるなり。運動は戸外運動尤も欲する所なれども嘯くに適せる地、此近郊になく趣味ある地とてもなければ修學後サンドウをなすべし十分乃至十五分間之をなさば頭腦を透明ならしむるに裨益する所蓋し鮮少にはあらざるべし。先づ余は斯くの如くにして嚴肅なる生涯に入むとす。」

百の感動畢竟一の實行に如かず

余は性來情に脆し、故に事毎に感動し、其の感ずるや前後を忘却すと雖も、一度醒めて後常に悔恨の念に不堪。如此は實に丈夫の本懷とする所に非ずして寧ろ醜恥とする處なり。故に輕々に感動する事をやめよ。寧ろ外貌冷酷を意味するか如きに至らむ事を期せよ、而かも一度感ずれば必ず之を實行せよ、百の感動畢竟一の實行に如かず乞ふ之を心せよ。」

戒むるは近きにあり

戒むべきは近きにあり或はノートの整理と云ひ、文字の脩正と言ひ。可は即ち可なりと雖も要するに何等心智を啓發する所以の道にあらず。寧ろ卑淺なるバニティーの然らしむるのみ。

無用の沙汰たるを免れず、戒むるは之にあり乞ふ之を心せよ。

第三編　雜

夢之記

夢……何と云ふ不可思議なものであらう？、古人は是を五臟六腑のわずらいと云ひ傳へて居るが、或はそうかも知れない、滿腹して眠ると妙に夢を見るから。而かも孔子の如き聖人でさへ、猶周公を夢に見られたと云ふからあながち五臟六腑のわずらひとも限るまい、まさか孔子が食ひ過ぎるやうなこともなからうから。序に云うて置かうが、夢を見るといふのは間違つて居る、夢は目で見るものではない、夢みるのであるさればこそ、英語では To dream a dream と云ふのださうな。

而し夢と云ふものは實に樂しいものである、夢みる間が人生の花だと思ふ、夢みぬやうになつては、人生も末路だ、孔子が『吾又夢に周公を見ず』と云ふて嘆かれたのも無理ではない。

世の人は醉生夢死の徒などゝ笑ふけれど、實際醉生夢死することが出來るならば、是程結構なことは又とあるまい、が悲しいことには夢は醉と共に醒め易いのである、而して醒めた後は悔恨とか失望とかゝ常に伴ふのである、吾輩は幸か不幸か知らぬが、まだ酒に醉うたことはない、而も彼の憐むべき勞働者の徒等が終日汲々として、生活難に追はれ、もがきもがきて、僅に得たる報酬を惜氣もなく、一醉の快を貪らむがために散ずるのを見て、其如何に醉ふことが樂しきかを知ることが出來る、嗚呼一椀の濁酒、以て終日の苦惱を慰め、終日の疲勞をいやすに足るのである、酒を飲むものに聞くところによれば、酒は味の美なるよりも醉ふのが面白いのだそうな、實際さうであろう、他から見ても如何にも面白さうに見える、彼等醉へる人の眼中には、王侯もなく、貴人もなく、富もなく、名譽もない、たゞ大言し、たゞ壯語し、あらゆる胸中の秘密まで暴露して憚らない、此の時に於いて、彼等は虛僞の人ではない、今の所謂、似而非道學者や、宗教家の徒は、頻りに酒の害を唱道し、醉へる人を狂せるものなりと呼ぶものさへある、而し是等の徒が僞善や將た虛飾をこれ事とするに比して、寧ろ吾輩は彼等醉へる人の天眞爛熳なるを愛する。

偖又夢は吾輩の屢々夢みたところだ、吾輩の過去の夢は實に樂しい者であつた、幼い時暖かい母の懷に抱かれて靜かに靜かに眠つた時、ア、其時の夢はそもどんなものであつたかしら、春風駘蕩たる中に、蝶となつてふわりふわりと菜の花に戯れたこともあらう、鶯と化して馥郁たる花の間に嬌音を競うたこともあらう、或は月姫樣に抱かれて天國とやらに遊んだこともあろう、オ、斯樣なことを夢みた時、其ま、遠い遠い彼の世とかへ行つたならば、きつと大慈大悲の御手にひかれて、極樂淨土へ行つたにきまつて居る、吾輩は此の意味に於いて醉生夢死を希ふのである、而しか、る夢は既に醒めて、今は殆んど記臆にすら存しない。

次に夢みたのは青春の夢である、これは幼い時のそれに比して、大に現實的である、こ、に至ると夢も大に進化して、夢中と雖も眼を開き、而かもよく談じ、よく笑ふのである、之を夢みて居る間が人生の最も樂しい時期であるさうな。

吾輩の夢みた否夢みつ、ある青春の夢は、實に斯樣なものである、吾輩は無我夢中に、何時しか百里の長程を越えて、東京は花の都、其實は紅塵の巷へと出で來たのである、而して直ちに書生といふもの、仲間入りをした、凡そ世の中に是程氣樂な職業は又とあるまい、元來氣樂な時は種々無用なことを考へたり、又行つたりするものである、そこで吾輩も折角書生の仲間へ入つたのだから、一つ書生とは如何なるものかを觀察し、併せて吾輩の夢に於ける樂天觀と比較して見やう。

吾輩が嘗て幼い時、夢に書生といふものは、眞黑なつらをして破れ帽子を載き、衣は肝に至り、袖は腕に至り、手には大きな棒を携へて、意氣揚々然として、街道を濶歩し、女の事などは口にするのも汚らはしいと云つたやうな風のものであつたが、これは又違つたもの、面はといへば眞白く、頭は奇麗にさつと分け、髪はピカピカ光つて之れに近けば、一種異樣の臭氣　プンとして鼻を衝き、袖をブラブラさげて袴をゾロリと穿つたところなどは、吾輩田舍漢の眼にはとても婦人としか見えない、而しピョコピョコ頭をさげて妙に人の機嫌をとるところなどを見ると、どうしても男子とは受け取れないがさりとてよく見れば結髪もして居らぬ、故に彼等は多分男でも女でもない、要すに中性のものであらう。吾輩は假に此等の徒をハイカラーと稱する、然し

數多い書生の中だから決してか樣な輩のみではないが、其餘の徒と雖も、大分ハイカラーかぶれをして居るもの、又は近き將來に於て此徒たらん事を欲してる者もあるやうだ。

此頃或人が「今の書生は餘り墮落せず、されども元氣なく無邪氣なし」と言つたそうな、評し得て妙なる哉だ。此等の徒は小智慧はあるから所謂墮落などはしない、或は墮落する樣な氣慨がないかも知れないが、兎に角彼等は打算に長じて居るから、維新當時又は二十年以前の學生の如く一身の利害をも顧みず、花柳の巷に徨彷する樣な下手な墮落はしないが、これ決して自ら覺る處があつて、然るのではない、其故にコセ〳〵した惡事即ち墮落をよくするのである。從て意氣は悄沈し、元氣はなく、又無邪氣でない樣になるのだ、而も彼等は虛飾を施すには中々長じて居る、彼等は露骨に自己の思想を吐く事をし得ないで廻り遠い處から、優美な辭をかり來つて云ふのが常である。曰く神聖なる戀愛、曰く、星、曰く、菫、曰く何、曰く何と殆んど五月蠅い程、形容詞や、代名詞を巧みに使用するのだ。甚しきに至つては、人生問題の如きすら此等ハイカラー連の流行語となつて居る樣である。

吾輩いくら夢中なりと雖も、眞に人生に煩悶するものあらば、敢て一掬の涙を注ぐに躊躇せざるべし、然れども口に煩悶、煩悶といふもの必ずしも眞に煩悶せるものといふべからず、況んや彼のハイカラー連や、はたこれに類似したる輩の所謂煩悶の如き豈云ふに足らんやだ、彼等の煩悶の多くは附和雷同的のものなり、流行にかぶれたるものなり、人生とか煩悶とかの語は甚だ高尚さうに聞ゆるものなり此を以て之を口にするに非ずんば人格でも下つた樣に感じ、みだりに人生とか煩悶とかを繰り返すに至つたのだ、さなくば餘りに間暇なるより來たつた寢言である、若し彼等にして始終活動し始終奮鬪して居たならば如何ぞ人生問題を口にし煩悶を口にするの餘裕あらむやだ、試に思へ天下の橫綱常陸山梅ヶ谷の徒か兩々相對し龍虎の活劇を演じつゝある時に於て、何すれぞかゝる事を思ふの寸暇だもあらむや、吾輩とても專心一意同一の業務を勵む時に於ては毫もかゝる思ひに耽る事無きなり、所詮は怠惰や間暇より來たりし寢言と云はずして將た何とか云はんやだ。

吾輩の見地よりすれば宇宙絶體の眞理や人生の意義の如きは、到底窺知し得べきものでないと思ふ昔より幾多聖哲の徒が之が爲に惱み苦しんだか分らない、而も依然として解すべからずだ、然るに彼等乳臭兒の分を以てかゝる大問題を輕々に口にするはそも〳〵沙汰の限りに非ずや。

よしや如何程煩悶すとも到底悟る能はずとすれば寧ろ煩悶を中止するに如かずだ吾輩は何物によりて作られしやは知らざれども兎に角此の世に生れ出た以上今更ら仕方がないなまじいに現代を呪い、現境を悲しんだとて何の興味も無く何の得る處も無いのである、故に此の何物かゞ吾等に賦與した個性を益々發展して何物かゞ吾等に與へた快樂を安んじて受けたら宜敷いではないか、殊に人生の黄金時代とも云はるゝ青春の期に於て求めて煩悶するものゝ如きは、吾輩は其何の故たるかを知るに困しむのである、而して來つて此の樂しき青春の夢を味はずや、花もよからずや月もよからずや此意味に於てならば戀も亦よからずや菓子もよく酒もあながちに惡しからず壓な人に逢へば壓な人のある世なりと觀じ一念常に樂世の巷に遊べば心は常に光風霽月行住座臥に樂しからずと云ふ事はないのだが、何分吾輩は目前に記した通り夢中であるから之本氣の沙汰だか何だか知らぬが、兎に角現今はかゝる有樣で毎日快活に毎日樂しく暮らして居る、青春を夢みて居る間は之に變化は無いと信ずるが其後の事は今にして斷言する事は出來ない。呵々（興風會雜誌第十卷第一號卅九年三月中作）

僕は馬鹿で御座る

僕は、何故此樣な馬鹿になつたのであらう、生れつきは、こんなでもなかつたろうに……殊に小學校から中學と、十年餘と云ふものは、所謂學校と云ふものへも出で、髯のある先生から、修身や、道德等の話も、耳が痛くなる程、聞かされて居るのだから、成長するに從つて、怜悧にならねばならぬ筈だのに、はて面妖な、どうしてこんなに、馬鹿になつたのであろか、そこで馬鹿になつた順序を、御話し申そう。

僕は、小學校へ通ふ頃は、先生から、豪いものになれ〳〵と敎へられた、やれ豐大閤かどうの、關羽かどうの、正成かこうの、誰か豪いのと、やたらに、僕等の感情を刺

激された、而して少し學業でもよく出來ると、怜悧だの、前途か有望だのと、をだてられた。そこで、天晴、大豪傑大英雄にでもなろうと思うて、中學校へと、進んで來た――此頃の僕は、若干勉學もしたし、たしかに、今より學業もよく出來た――（だから）

年はだんだん、ふえて來る、身體もだん〳〵太つて來る、新聞も讀む樣になる、雜誌も讀む樣になる、頭もだん〳〵妙になつて來て、是までの英雄主義、豪傑主義が何だか、つまらぬ樣な氣かして來る。同時に、肉體の慾は、遠慮も無く盛になつて來る、彼や此やで、中々多忙になつて來る――と、追々馬鹿になつて來たのだ。

父母の膝下を離れて、初めてさる都の、さる學校へと入學した時、僕の理想と違つたものが多かつたのに僕は驚いた。敎師も理想と違つて居た、生徒然り、其他何彼と皆さうで、大分僕の心地を惡くした、而し此頃の僕は、未だ今の樣に馬鹿ではなかつた。

吾人は、社界を改良せざるべからずとか、

吾人は、克己せざるべからずとか、

吾人は、罪惡と戰はざるべからずとか、

修養せよ、忍耐せよ、とか、

精神一到何事かならざらんとか、何とか彼とかと、やたらに呼んで、せつせと、氣張つて勉强して居つたが、此樣な無趣味無意味（今の僕から考へて）な生活は、程無く僕を倦ましめた、そこで此度は、其反動として、極端に馬鹿氣た考を持て來た。何が爲めに生れて來たのか、

何か爲めに勉强するのか、

英雄とは何ぞ、豪傑とは何ぞ、

名譽を得て如何する、富貴になつて如何する、

何か何だか、さつぱり分らない。

道德とは何ぞ、何故に道德は守らねばならぬか、

彼も分らない、是も分らはい、

いやになつて來た、世の中かいやになつて來だ、所謂、厭世と云ふのであらう、世か厭はしくなつて來た、やれ宗教の、やれ人生のと、騒いでも見た――が、何がさて、其樣なことか分るものか、そこで不平になつて來た。咄、宗教家何者ぞ、咄、教育家何者ぞ、彼等は、云々なんぢゃ、不平は、攻撃に變じて來た。吾人は汲々として居るのに、揚々馬車等を驅りて馳せ廻る、貴族とか、富豪とかを見ると、癪にさわつて仕方かない、是も攻撃するべしだ――と、目につくもの、耳に聞くもの、苟も少しでも隙があつたら、得たりかしこしと直に攻撃をはじめた――が、如何程僕等か、攻撃したつて、何等の反響もない、何等の効果もない。是に於てか、僕は悟つた、馬鹿になれ、大に馬鹿になれ、馬鹿になるなら、馬鹿らしき馬鹿になれと。

馬鹿になると、なか〳〵氣樂なものだ、世の中の人は、殊に青年等に「汝は馬鹿だ」などゝ云はゞ、直に、怒るに、きまつて居る、而し、馬鹿になつてしまうと、成程御説御尤、僕は馬鹿であると、笑つてすまされる、彼奴は、學問が出來ない、何とした、馬鹿だろうと罵られても、御説御尤、彼奴は、意志か薄弱だと云はれても、左樣で御座ると答へて、笑つて居ればよい。聞く所によれば、馬鹿は長生するそうな、成程左樣であろう、何も苦かないから、何も心配がないから……

人に、怜悧と見られ、人に稱讃せられようなど、思ふから、くだらぬ事にまで、氣をもまなければならないのだ。安心立命の地を得る爲めには、大悟を要するさうだ。而し、死際にいくら悶えて、死んだとて、僕は少しもかまはぬ。教育家かどうの、宗教家がどうのと云つた所で、彼も人である、僕と同じ樣な人である、餘り彼を買ひかぶるから、不平などか出て來るのだ。美しいものを、美しいと思い、汚いものを汚いと思ふのは、吾も彼等も違はないであろう。彼等か私利を貪つたり、外觀をよくしようとするのも、強ち無理ではないのだ。彼等は僕等の樣な馬鹿ではないから……馬鹿になつた僕には。何等の不平もない、（あつてもないにするさ）何等の憤もない、（あつてもないにするさ）何事にも笑つてすまさう。

而し、馬鹿にも、亦馬鹿魂と云ふのがある。馬鹿の目から見る世の中は、なか〳〵面白いものだ。馬鹿の目から見ると、怜悧さうにして居る奴が、皆馬鹿氣て見える。彼

奴も此奴も（例をあげることはやめよう）皆馬鹿面して居る。彼の云ふ事も、是の云ふ事も、彼のする事も、是のする事も、皆馬鹿氣て見える。終には此の世の中か馬鹿〳〵しくなつて來る。

こんな風になつたのは、果してよいのか、又、惡いのかは、知らないか、僕は、勢此樣になるより致し方かないのだ……敢て誰の罪だなどゝ、今更、馬鹿氣たことは云はない。皆、僕自身でなつたのだから。

馬鹿が書いたものを、讀む人も亦馬鹿になると、氣の毒だから、是れで擱筆する。要する所、僕は小學校敎育では自稱英雄になり、中學敎育を受けて馬鹿になつた、高等學校（若し這入れたとして）から、大學へと進んだら、何になることやら……

（奥路第二號所載卅九年三月中作）

日本民族の天職を論じて、東方政策及び世界政策に及ぶ。

序

余は、前記の表題のもとに、今夏期休暇を賭して一大論文を書かんとす。今や、吾、星、菫、戀愛、煩悶等の語を聞き、又見るに飽きぬ。さなり、吾れとても人の子なれば、戀を欲せざるに非ず、星や菫の美しきに憧れざるに非ず……されど、余は、更に〳〵より多く愛すべく、又欲すべき或物あるを自覺したり。こは正しく日本國と、日本民族と是れなり。ア、、吾れ不幸にして、世界と世界の民族とを愛し、是れが爲に、吾が全生涯を捧げんとする程、大なる自覺をなさゞりしを悲む。され共、これ吾が二十世紀に生れし罪なり。吾をして若し二十一世紀に生れしめば、必ず世界を愛し、世界の民族の爲に盡すの人たらしめしものを……。

何は兎もあれ片々たる蝸牛角上の爭鬪は是れを捨つべきなり。宇宙の軸なきサークルは、大なる威力を以て運行しつゝあり、吾人が蕞爾たる力を以て、到底そが法則の微細たりとも、變じ得べきものにあらず。然り、如何に、もがきたりとて、はた何の益

する事かあらむ。然れども、吾人は、地上に無意義に生れ出でしものに非す。必ずや、上帝の攝理により、何等かの使命を帶びて來りしものたるや明けし。果然、吾が使命は、日本國と日本民族の上にありき。

故高山樗牛が、二十世紀の幕は極東問題より初まるべしと豫言せし語は、幸か不幸か適中しぬ。日露戰爭は、實に其最初のベーヂなりしなり。極東問題は、今後愈々多く、吾國民は今後益々多忙ならん。

吾人は、須らく此の手近き問題に就て、攻究するを要す。

余は、必ず今次の瓔珞に、約百ページの論文を出すべし。乞ふ活目して待て。（瓔珞第三號所載。明治卅九年六月中作）

編者曰、本論は未だ起稿するに及ばずして長逝せられたり。

某氏に與ふるの書

拜啓、近頃笑止千万のことこと候へ。そは餘の義にても御座無く、彼の文部大臣と申す御方より其の部下の敎育家と申す方々へ訓令とやら云ふ物を御達しに相成りし爲め、所謂敎育家と申す方々が狼狽なされ、やれ具體的成案だの、やれ學生取しまりだのと蕣しめきめされ居り候事に候。抑々物には凡て因果律と申すことの候へば、今日男女學生が如斯相成るも何とかそこには源因あるべしと察せられ候。されば先づ以て現狀を打破して健全なる國民を養成せむと欲せば、其の源因を枯渴せしむる必要有之べしと存ぜられ候。世の識者と申す、方々は如何に考へられ候や。然るにこの源因をも探らずしてたゞ其の結果のみを見今更の如く御騷ぎ遊ばす大先生方、いやはや何とも評し樣も御座無くと乍失禮拜見仕候。敢てこの御方々に御尋ね申さむ。御方々は果して、何の抱負を以て何の信仰を以て何の主義を以て万人の儀表たるべき敎育家の席につき給へるか。若し御方々にして是等のものを少しにても御持ちなされ候はゞ、今更文部大臣の訓令出たりとて、やつさもつさと騷ぐ必要も無之に候はずや。さりとはまことに解し兼ぬる次第に候。聞く處によれば段々地方の中學等にては圖書の取しまりの如きも嚴重に致さるゝ樣子に候。さりとは御苦勞千萬の事ながら果して効果有之

べきや否や疑はしきものに候。青年男女の學生が木石ならばいざ知らず苟も血と骨と肉とあるものに候はゞなどてかゝる馬鹿氣たる命令に服從せむ、蓋し外部よりの壓迫は常に何所へか洩れ出るものに候。見給はずや彼の禁烟法の如きすら然り。法律となりて出で來りしものすら其禁を破るは殆んど公然の秘密なる有樣に候はずや。小生は常に登校の際戸山の原さては穴八幡邊をぶらぶ〻致し居る本校の二三年級位の生徒がさも得意氣にスバ〳〵とシガーをくゆらし居るを見て、一種云ふべからざる感想の起るものにて候。さるにても喫烟の爲めに停學又は退學をうけし憐れむべき犧牲が遂に何等の意義なかりしを見て更に同情の念に堪へず候。之を見ても外部よりの束縛が殆んど無價値なるを知るべきに非ずや。又聞く處によれば某女學校にては文部大臣の訓令中男女學生云々の語ありし爲め更に生徒に加ふるに數層の壓迫を以てしたりと申す事に御座候、小生はかゝる事が苟も教育家と申す樣なる方々によりてなさるゝとは呆きるゝの外無之候。さらでだに現下の日本の女學生と申すものは非常なる束縛の内に教育せられつゝあるものに候はずや。其の寄宿舍にあるものゝ手紙はほしいまゝに寮監又は舍監などゝ申す者共によりて開封せられ、其家庭にあるものは單獨に外出する事をすら禁ぜられつゝありと、之れすでに人格の無視に候はずや、之れすでに人權の蹂躙に候はずや、此の上に更に壓迫を加へてはまことに女性の立つ瀨が無之なる譯に候はずや。女性をたゞ子を產む道具とせば即ちかゝる教育も必要かは存ぜず候へ共然らざる限りはまことに女性にとりては氣の毒千万の教育に候。ちと四角ばつた御方々も御ひらけ遊ばさしては如何に候や。女性にとても靈もあれば、智情意も相當にこれあるべく、御方々が御心配遊ばす程、まさか墮落は致さゞるべしと存じ候。まだ〳〵申し上げたき事は山々あれど生憎原稿用紙が無くなり申し候間これにて筆を止むべく候（瓊珞第三號所載明治三十九年六月中作）

憐むべき人の子よ

あゝ人の子よ、人の子よ、汝は何故かゝる處に住ざるを得ざるか……是れ吾輩が常に九段坂上に立らて、紅塵蒙々たる市中を眺めたる時に發する嘆聲なり。

試に見よ、かの市井の巷に蠢動する幾多の人の子等は、終日炎々又營々として、恰も餌を漁る豕の如く、もがきもがきて、そも何者をか、求めつゝある？

富か、名か、然り彼等の、求むる處のものは地上の富なり、下界の名なり。

あゝ憐むべき人の子よ、汝が求めんとする地上の富、下界の名とは、そも何をか意味する？

金殿玉樓か、美味佳肴か、綾羅か、重裀疊褥か、紅粉を以て裝はれたる木偶的美人か、人爵を表彰する黄金の玩具か、僅かに一時代に於いて、一國民一民族に謳歌せらるゝ浮世の空名か。

汝の欲するものはまさしくかくの如きものならんのみ。

あゝ汝が富のまづしき哉、汝が名のはかなき哉、汝が地上に於いて、占むる領は起きて半疊、寢ても一疊のみ、汝の胃の腑如何に擴くとも、以て日に一升の米を食ひ一斗の酒を飲むに足らず、身に綾羅をまとひ、重裀疊褥の上に、美婦の膝を枕とするも、現世の現の歡樂は、つかの間のみ、一代を風靡する汝の名譽も、權威も、汝の肉の冷かならん時即ち消え失せんのみ。

それかくの如し、而も猶ほ汝何の要ありてか紅塵の巷に跟々する？

汝の眼は黄金の爲めに眩惑せられ、汝の耳は空名歡呼の聲に聾せられ終りしか。

醒めよ、醒めて限りなき宇宙の富を求め、眞個美はしき自然の聲を聞け。をゝさなり、つきせぬ富まことの名は汝が求むるまゝに得られんのみ。

汝が胸に靈はありや、……これぞ此上もなき天與の賜物にこそ、汝なぞ此限りなき貴き寶、……そは地上の富の幾億にもかへがたき……を捨てゝ顧ざるの甚しきや、靈の眼はよく美はしき自然の眞相を見、靈の耳はよく限りなく樂しき天地の清籟を聞く、あゝ汝を捨つべくあまりに悲しからずや。肉の眼を以て見れば、たゞ燥乎たる星のみ、而も靈の眼より見る時は、そこに幾多の啓示はあらずや、そは永遠より永遠を繼ふ針のあとの如くに。

下界の夜はいと靜かに、寂として聲なし、而も靈の耳には、妙になる天つみ空の樂ぞ聞ゆるなれ、汝富みたる……

下界に於いて……貧しき……天國に於いて……ものよ、汝が住む玉樓は人の造りたる陋屋のみ、來つてこの神によつて造られたる常世の樂園にさまよはずや。

春野邊に佐保姫に抱かれて、そよ吹く風に微吟の調を合す時、吾に浮世の名利なし、綠したゝる木の下蔭にたゝずみて、浴衣の袖を涼風に拂はせつゝ、微笑む時、吾に惱の心なし、牢晴なる朝霜を踏んで、身にしむ清澄の氣に浴しつゝ、靜かに歩む時、安けき慰あり、見渡す限り縹渺として世はしろがねに彩られたる時、赫灼として輝き出づる朝日の色を見る時、吾が心に清淨の氣みつ。

月の夕に月に憧かれて吾が想をやり、花の頃は花を慕うて吾が初戀をかたる、かくてこそつきせぬ富をほしひまゝにし、いや高く吾が名は自然の聲に歌はるゝなれ。

汝はそを望まざるか、汝はそを羨まざるか、あゝ憐れなる人の子よ。

たとへ雨露庇廂に撒して席をうるほし身に纏ふは襤褸のみ、飢饑を凌くは僅かに半椀の麥飯のみと雖も、猶ほ吾胸には汝の知らざる光榮あり、我は阿房宮に三千の美女に侍つかれつゝも蓬萊の國に不死の藥を求むる始皇の境涯よりも一簞の食、一瓢の飲、身は陋巷にありて、其行を改めざる顏回の境涯を慕ふあり。

あゝ人の子よ。人の子よ。汝何故汝が戯れごとの片影を後の世までも殘さんとはする。

些細の觀覽料を貪る玩具となり終りぬ、やみなん哉。あゝ人の子よ人の子よ。汝は何故かゝる地にありながらなほ區

々たる利慾の奴隷となるやとは吾が中禪寺湖畔の旅宿にて與へられたる辨當を見たる時の慨嘆なりき。

山川を跋渉していたく疲れぬ、いで復活の妙藥を味はんとて開き見れば握飯三ツに梅ボシ三ツ……あゝわが胃の腑汝之にて滿足するか？

こゝも浮世のはてなる哉、山紫に水明らかに生活難を訴ふる哀泣の聲絶えて純乎たる自然の親しき心吾等の胸臆に通ひ渾濁の氣吹きすさむ榮華の巷にひきかえて清涼の氣吾が肺腑を洗ふ。恍たゞ自然眞相に接し自然の寵兒となりて彼の女の膝に眠る。吾に今世の富を求め名を希ふ心なし。さるを汝何ぞ自然富を捨てゝ人爲の富をのみ欲求するや？あゝ憐れむべき我利〳〵盲者よ！かかる山容水態の美も遂に眼にはたゞ黄金を得る爲めの器どより外に見る能はざるか？宇宙の限りなき富を捨てて地上の蔑爾たる富をのみ希ふ人は禍なる哉。

嗚呼人の子よ人の子よ汝何故しかく悶え煩ふやとは吾が湯本の溫泉に俗塵を洗ひし時に先づ發せし聲なり。

自然は正しく慈母なり見よや時の何れを問はず處の何れを問はず雨と云ひ風と云ひ靜かに思へば皆慈母の愛の發現ならざるなし。殊に溫泉に於て……吾が身も心も世のわづらいに關はりて勞れはてたゞ勞苦のみ吾を攻め。吾身吾心其重荷に堪へざる時。こゝに慈母が愛の猛火によりて地上に湧出せられたる溫かき泉に浴せよ。すべての憂苦こゝに消え、すべての勞苦ここにいえん。徒らに煩ふをやめよ徒らに悶ふるをやめよ。たゞ求めよ、たゞ贊美せよ、慰安は慈母の手中にあり。吾今華嚴瀑下に立てり、吾は先づ彼の小年哲學者を思ひ浮べぬ、あゝ憐れむべき人の子よ！

汝は云ひき「悠々たる哉天壤。遼々たる哉古今。吾今五尺の小軀を以て此大を計らんとす。云々」と汝何ぞ悟らざるの甚敷や。借問す汝は宇宙を離れて生活し得しか？あゝ汝。汝は宇宙と自我とを別々にして觀察しぬ。されはこそ無限絶對なる宇宙の前に出でゝ自我の餘りに小なるに驚き悚然としてこゝに絶望せしなれ。されども汝は思ひ到らざりしなり。汝も亦宇宙の一分子なることに……。汝ありてこそはじめて宇宙あり（汝にとりては）、宇宙ありてこそ初めて汝あり、果然宇宙は汝の胸中にありしなり。汝は餘りに狼狽して近きを見る能はざりしか？

觀じ來れば悅樂に充ち滿ちたる宇宙の大道を忘れて不安なる畢の小道を歩み、宇宙の片影を示せる自然の審善美を忘れてたゞ人爲の眞善美をのみ求め、迷々裡に適歸する處を知らず、現世の光榮のみを求めて永世の光榮を求めず、地上の富や下界の空名にのみ憧れて煩ひ惱む憐れむべき人の子の多きことよ！

（十七日朝）（興風會雜誌第十年遠足號所載明九年六月作）

瓔珞同人に與ふる書

拜啓

永々の暑中休暇、定めて御樂しみのことなりしならむと察し入り參らせ候、皆々樣喜色滿面笑を湛へて御出校遊ばされしを見て、小生も何となく喜ばしく存じ奉り候、中にも吐月峯君の美的生活は云はずもがな、越路の邊にさすらひ給ひし城山君には何の目出度きことありしにや、見る度毎に笑クボの一つ一つ殖えまさる樣に覺え候は、僻目か、何か其間に消息なくてかなはぬことゝ恐れながら憶察仕り候。定めて多情多感

の君にてましませば、月色淡き夏の夕、楊柳の影にたゝづみて、遠音にもるゝ追分の節は腸九廻の思をなされしこともあるべく、越路は名にし負ふ何やらの名物處、日頃御自慢の審美學の實地研究でも遊ばせしこともあるならんと奉存候。時もあらば又御高說を拜聽致し度、たゞ今より御願ひいたし置き候。

空々閑人君は例によりて空々閑々五十日の休暇を徒消せしならんと存ずるが如何にや。人生五十寧ろくだらぬ事に齷齪するよりも、空々閑々たゞ其日を樂みて送るが趣味あるやも計られず候。さりながら閑人の吾は外面空々閑々たるが如くにして、其實は中々の活動家なれば、定めて休暇中は活動の歷史を殘されし事と推察仕り候。

朝暉先生鎌倉あたりに御避暑とは隨分洒落なし草と流石吾が輩も聊か羨望の次第に候、何か御土產のありさうなものゞ存じ候。

あやぐも君の御成功は目出度目出度の萬々歲に候。早や數年を出でずして、英姿爽颯たる年少士官を見るを得べきかと一日千秋の思にて待ち居り候。

豐穗君の病氣は御いたはしき極みと存じ候。何とか皆々同人にて見舞品でも送りてはいかにや、切に其恢復を祈り居り候。

海人君には實に失敬致し候。吾が輩の爲めに滊車はおくれ、其上京都にては穢き處に御とめ申し、段々の不始末、愚兄よりもくれ〳〵謝しくれとのことに有之候。然かし歸鄕後は定めて一家團欒の樂を恣にせられしならんと存じ候。朝鮮あたりにさまようて異國の山川風物につき、如何の御感有之候や、何か面白き物語もがなと渴望の至りに候。

偖て吾が輩の番と相成候。吾輩は元來今夏は歸省いたさざる心算、一つ由井が濱邊の瀟洒たるわたりに詩情を練らむものをと多大の希望を持し居りし處、思ひきや從兄のすゝめ且つは阿兄の病と聞き、倉皇として歸途にのぼりし樣なる次第に御座候。同行三人、海人君の同鄕の友と……新橋を出でしは正に七月二十三日六時三十分……其夜は滊車中にてあかし、翌朝午前七時頃京都に着し候、一同打ち連れて下車し先づ海人君を伴うて本願寺より東山の邊を過ぎ、同志社の邊を廻りて阿兄の寓居を訪ひ、一先休息の後夕刻より又打ち連れて新京極と申すに遊ひ或は入浴し或はビーヤホールに

入りなどして滊車中の疲を醫し九時頃歸宅臥床……

翌朝六時の滊車にて京都發、大阪にて海人君と名殘りを惜しみつゝ袂別致し、吾れ等はいよいよ阪鶴線にて鄕里に向つて發し候ひき。丹波は名にし負ふ山國の事なれば、トンネルトンネル又トンネル、五月蠅き事限りなし、而かし時に山水の眺景絶妙の場所も有之、座ろ旅情を慰むるに足り申し候。

舞鶴に着きしは其日の午後二時頃、停車場に着しや直ちに十丁餘の道程を船場まで腕車を驅りしが、咄殘念京都より托せられし蝙蝠傘及び土產物を餘りに狼狽して停車場に忘れ來りし爲め、吾れは又引きかへし友は先に船に乘りて出で、吾は一便遲るゝこと、しぬ、然れども幸に傘は有之候ひき。次便は午后六時半……待つこと殆んど四時半、其間の退屈さ加減乞ふ御推察下され度候。定刻に至りて、漸く小氣船に乘り宮津に向つて出發仕り候、此日は天氣晴朗、折しも夕方なれば紫紺の雲、低く西天を彩り海の色夕映に映じて、風光崇美、今更ながら自然の妙景にみとれ候ひき。

日全く暮る、甲板上に立ちて海の夜の色を見る眞に森嚴、濤聲ゆるやかに闇に消え、舟の波を蹴る音耳もと近く響く、嗚呼吾れに詩才あらば此絶妙の感、限りなき空想境裡に逍遙し、思ふがまゝに才筆を馳せて自然を謳歌せむものをなどと、はてしもなき感吾胸に躍り候ひき。十時に近かき頃宮津着、友は波止場に待ちつゝあり即ち打ち連れて一板亭に腕車を驅る。

翌朝目覺めしは正に九時過、偖々こゝに又一つ困つた事の出來致せし次第に候。は小生が舞鶴にて旅程をくるわせし爲め、吾れ等の經濟界に大恐惶を來せしことに有之候、實は舞鶴にて遲くれざりせば、其日歸宅出來る筈なりしも、宮津着が餘り晩かりし爲、最早船なく、止むを得ずこゝに宿泊せしことなれば、元より例によつて例の如く餘分の金などは一文もあるべき理なく、一夜の宿賃二人で正に壹圓五十錢而かも懷中にあるは合して僅か五十錢……嗚呼之を如何にかせんや、隨分困つたことに相成候。

兎やせん角やせんと、兩人額を接して相談せしも無きものは何處までもなく、遂に書になりて晝飯を食ひ、又負財を增し絶體絶命と相成り候。こゝに於て吾が輩大英斷を以て、一談判試みるべしとて主婦を一拍手のもとに呼びよせ偖て更まつて實は云々……

と主婦君の返答如何にと注視すれば、ニッコリ笑つてあなたは「ドコソコの何々サンのムスコサンと違ひますか」と意外の質問、これはとんだ事だと思ふたが、而しシメたと得々然として然りと答ふれば、主婦君僕の父の名を呼び、夫れならばよく存じて居ります、どうぞ御遠慮なくとのこと、万歳〳〵万々歳意氣揚々然として此旅舍にグットバイをつげ。あやしげなる乘合船にのり出發致し岩瀧と申す處に着從兄のもとに至りて饗宴を受け、ホロ醉ひ機嫌にて鼻歌唱へつゝ、同夜九時過無事歸宅、漸くなつかしきホームの人となりし樣なる次第に候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

休暇中の記事は省略致し候、時に琴引濱（此景につきては別に一文をつくる考）天橋立新舞鶴等にさすらひて、只管身心の健康に注意致し候爲めにや、今秋は是までになく健康狀態よろしく、此分ならば幾分活動も出來るならむと存じ居り候。時節柄皆々樣の御健康を祈り居り候、筆持つ手疲れ候ま丶之にて擱筆致し候。　匆々頓首

九月十六日朝（明治三十九年九月作瓔珞雜誌第四號所載）

胃の獨語

編者註「カド」とは日本橋々際の天ぷら屋也

編者註須田町に價安く偉大なる「しるこ」なる粉屋」あり

此樣に、ヤタラつぎ込んで貰つては、いくら吾輩と雖も、辟易せざるを得ない。おや今度來たのは何だな。

天ブラ君か。「オイ天ブラ君。君は抑も何處から來たのだ。「吾が輩か、吾輩は御得意の「カド」だよ。「何に又カドか、今日は又大將が、例の連中と大々的活動せむと、して居るのだよ。先づ吾輩を手初めとして、今度は花の牡蠣か何か襲擊した後、須田町をも占領する計畫だとよ。君も充分覺悟をキメテ、働かねば失敗するよ。まあ吾が輩から御世話になりましよう。「オイオイ、左樣（ソンナ）にもぐり込んではいけないよ。僕は、實の處君は嫌なのだ。君が來る度に、吾輩は如何程苦悶するか知れやしない。君と須田町のシルコ君とは眞平御面だ。「だつて、君が嫌でも、君の門番たる口君が非常に僕を可愛がつて、くれるから仕方がないざやないか。僕を責める前に、先づ口君を免職させ給へ。「ソウダ〳〵、口の奴には實に困まつてしまふ。何か

よい工夫は、ないか知らんて。「それは、それとして、吾が輩はどうせ君の御厄介にならなくつては、ならんのだから、どうか宜敷願ひます。「よし〳〵、どうせ、ヤブレカブレだ、まあ受け付けて悠々往生さしてやろふ。「難有〳〵。

胃「一體全體、大將は、吾が輩を何と心得て居るのであらふ。抑も、吾が輩は、全身體の活動の源泉たる、滋養素を供呈する重大なる責在を負へるものだ。若し吾が輩にして不完全ならむか、全身體の凡ての、活動が緩慢となり、遂には、人生を最も、不愉快に送らねばなるまい。故に吾輩を充分に優遇して、然るべきであるのに、此樣に逆待至らざるなきは何の故ぞや。吾が輩は、大將が這般見易きの道理をも辨へさる痴態を惡む前に、寧ろ大に愍笑を禁ずる能はずだ。オヤ〳〵、又歩き初めたな、何だ大きな聲で喋りやがつて、ヤ、止まつた、どう〳〵又入り込むだな、又初めやがつた。

「オイ〳〵君は何だ。

「僕は牡蠣だよ。

「道理で柔かで肌觸りがよいと思ふた。

「僕なら歡迎して、くれるだらふ。

「然り〳〵、僕は、君を好むが而し今ヤツテ、來られては、少々困るね。今ヤット、天君を驅逐しかゝつた處だ。

「左樣か、其れは、御氣の毒だね。而し今に、至つて、又如何ともすべからずたから宜敷御願み申す。「まあ仕方がない。嗚呼、何故僕は、此樣に、苦しめられるのだらふ。ヤア、モウをしまいと、見えて、歩き出した。今度は、須田町か、もう、よして、くれば、よいになー。「オイ、貴樣は、もう入ることならん。

「何だと、僕は、口君の許可を得て、入り込んだのだよ。

「イクラ口の許可でも、吾が輩が許さなければ、致し方がないでは、ないか、早く出て行け。

「へーへー、どうか、御勘辨なすつて、私丈で、後の奴等は、きつと、差し扣へさせますから。

「其樣に、云ふなら貴樣丈は許して、やらふ。後の奴は、もう斷じて受けつけぬ。

「ヤレ〳〵安心した。

胃「之れでまあ、一段落ついた。大將があまり吾が輩を馬鹿にして、居るから、一つ示威運動をやつて、やらふ。一つ吾が輩の苦痛を神經君に傳へてやれ。

神「ア痛ッタッタッ、胃の方から大に、苦痛を訴へてくる。オイオイ胃君ドウしたのだ

胃「如何したの斯樣したのつて、御話になりませんよ。

アナタの御力でもかりて、制禦して、貰はなければ、吾輩は、到底破壞せられるゝより外はないのですよ。今日も之で三度も吾輩に大々的、難事業を與へたのです。而かも、其難事業が勞して、効無き事なので、吾輩は夫をなすべく最早勞れ果てたです。勞れたのみでなく、堪へられなくなつたのです。どうか、アナタの力で今后かゝる無謀なる擧動のない樣に、御取締あらんことを願ひます。

「ヨショシ、吾が輩も幾分其事に就て、考へて居た處だから、今後は、充分警告を與へて、禍を未然に防ぐ樣に方法を講じよう。先づ第一着歩として、吾が輩自身衰弱の徵を顯はしてやらう。左樣すると、頭痛がしだす。全身體が物憂くなる、勉强が出來なくなる……と遂には責任を自覺して、先づ君の健全を計る樣になつて來るであらふ。抑も、君より不幸を吾が輩に訴へ來たる事が既に三年餘になる、去年の春は、大分閉口したらしい、やれ、温泉だの、醫師だのつて騷いで居たが、モトモト其根本的治療を忘却して、單に枝葉の治療、即ち姑息的手段を取つて、居るから、何時になつても治りはせないのだ。君を健全にしやうと思へば、先づ吾が輩を强健にせねばならぬイヤ吾が輩ではない、吾が輩を統卒して居る心と云ふものを强健にせねばならない。心を健全にするには修養と云ふものがいる。コリヤ、一つ大將に、修養をさせねば、ならぬわい大將由來小感情に浮動せられ易い。一つ之を改めさせねばいけない。區々たることに、左顧右眄したり、感動したりして居て、此複雜なる、世の中に、處せらるゝものか。ヤレ、路傍に、老乞食が斃れて、居る可愛さふだ、ヤレ、彼奴は貧乏して、居る救つてやりたい、ヤレ、此奴は失敬なことを云ふた、ナグッテやりたい、ヤレ、彼奴が如何したの此奴が此樣したの、アレは感心だの、コレは、不感心だの、何だの彼だのと、泣いたり、怒つたりして、居た日には、終には、眞から笑ふ時がなくなるであ

らう。自分に附屬して居る胃の腑の看護すら圓滿にやれないものが、他の事に干渉するなど云ふことは、以ての外の沙汰ぢや。先づ自分を統卒する丈の力を得て、後他の事に手を出すがよい、左樣ぢやないかね！胃君、「左樣ですとも、大將は常に、自分の責任を僕に負はすのです。ヤレ、胃が惡い爲めに勉强が出來ぬの、鋭氣がなくなつたの、精力が消磨したのと、ヤタラに、吾が輩のみを責むるのです。所謂己を責むるに寛に、他を責むるに酷なる類でしやう。神「まあ而し、過去の罪は、餘り追窮しまい戒むるは、今後にありだ。君も之迄苦勞したのだから、きつと今度は樂が來るよ、樂は、苦の種、苦は樂の種だと云ふからね。

胃「どうだか、危いものだなー而しまあ、神經君が救援的態度を取つてくれるから、や、安心だ。二人合して、改めて、やつたら、いくら亂暴な大將でも、幾分謹愼するであらふ。吾が輩は而し困つたな、連續したる苦鬪の爲め此樣に、擴張して來た、これでは充分なる活動が出來ぬではないか。消化の資本も缺乏して來た。オヤ〳〵、何か又來たぞ。これは通常御飯だな、一日位は休憩さして、くれ〳〵ばい〳〵に而し先度の樣に絶食だなんて、後から暴食をやつて貰つては、差引同じ事だ。……ア又何か來たよ、オヤ此奴は吾が輩の應援に、來たらしい、盛んに僕の事業即ち消化をたすけるオイ〳〵君は何だ。「吾が輩は、タカヂアスターゼだ。「何だ、タカヂアスターゼ六つか敷い名だな。君は舶來か。「然り、吾が輩は、君を應援する爲に、遙々米國（アメリカ）からやつて來た消化劑の王樣だ。「なる程……是れでは盛に應援して、くれ給へ。君の御蔭で吾が輩も大に、安樂になつた。之も神經君の御蔭か知らん。

「モシ〳〵神經サン、此節は大變景氣がい〳〵ぜ、何せい舶來の應援が來ましたからね。

「何舶來の應援……それや、アノ、タカヂアスターゼ君では、ないか。「左樣よく御存知ですね。

「知つて居るとも、知つてるのみでない、其樣な品物なら何程でも、供求することが出來る。君は舶來だなんて喜んで居るが、天下到る處に之れはあるよ。

「そりや妙だな、どうか敎へて下さい。

「よし、君も過去に於て般に經驗して居るだろう、それあの大根のスツタのだよ。

編者註
瑠璃珞會人時し
同相
に牛
て飲
食馬す

「ハア道理で、彼奴馬鹿に奇拔な奴だと思つた。

「さう〳〵、それで、思ひ出したが、何時だつたけな、例の連中と、瓔珞會とか何とか云ふことを、大將が催した時に、どしどし喰つては、どし〳〵其大根の生カヂリをやらかして居たよ。

「さうか、それで今後は、舶來品の代りに、其大根製のものを使ふことゝしやうね。

「これで結構〳〵。

「まあ、何でもいゝから、早く健全になつてくれないぢや吾が輩も不快で堪まらむね。

「道理で君も大分衰へだね。なる程、何某君が大將を指して柄にない病氣だなんてヒヤかして居たつけ。だから、大將も此節は大分愼しむ樣になつたゞろー。

「そうたね、此頃は例の餅菓子君は餘り來ない樣になつたわ。

「左樣だらふ、一つは種が缺乏したのらしひよ。

「種とは何だ。

「種は種さ、俗にMとか何んとか云つて居るよ。

「而し吾が輩の爲には餘り種のない方が結構だよ。「兎に角、餅菓子は、一番君の爲めに、よくない奴だから。極力排けしめねばならない。

「どうか御願ひ申す。何、君さへ確かりして居てくれゝば、吾が輩は直ちに恢復するよ。

「イヤ、君が先づ確かりして、くれなくちや、困るよ。

「イヤさうぢやない。

「……

「コリヤ何れも半眞理だ。共力して大將を健全ならしめねばならないね。吾輩も、君も要するに相關連して居るから。

「左樣〳〵、そこで、僕は君からの怨言を悉く心と云ふ奴に通知して居るから、それであのヂアスターゼ君や何かゞ君を應援に來るのだ。

「感謝〳〵多謝、ア、之で遂に、恢復して行くことが出來るかな。吾が輩さへ健全ならば、全身體が健全になり、大將の人格も段々上るだらふ。吾が輩が不健全ならば單に飯食物が消化せないのみならず、凡ての精神的のものも消化する力がなくなるから…

……大將がほゞ警醒しかけたのは慶賀至極だ。マアこれで、一安心だ。

（此編は大に書く考であつたが、まぬけた樣で書けなくなつた十月十九日）（明治三十九十月聖珞雜誌第四號所載）

眠られぬ記

七時半床へもぐり込んだが偖なかなか眠られない。階下の柱時計は今十一時を打つた。眼は愈々冴えて頭はいよいよ懶い、家内のものも眠つたらしく、さゝやきの聲だにしない、世の中は次第次第に靜かになつて、春の夜の寂莫はいやが上に加つて來た、折から濕つぽい風が雨戸を撫でたかと思ふと雨がシトシトと降つて來た。春の夜の細雨、、、さらぬだに淋しく物思ひに沈ましむるが常なるに、今宵の如くそれとは得言はねど心の奥底に何だかふかアい煩悶があるやうな心地がせられ、その上眠られぬ苦痛は刻々そを誘ふ折柄とてこの雨が何となう一種の淋しみと憂へとを何處よりか吾が爲めにもたらすやうに思はれて、吾が胸は更に寂と哀愁とを覺えた。

眠らうとつとむれはつとむる程、眠られぬが常である、思ふまい思ふまいと思ては思ふ程思ふのが常である、でかゝる境遇は幾度か經て來た吾は今更眠らうとは思はぬ、今更思ふまいとも思はぬ、眠られぬなどはよし、されば終夜吾をして轉輾極まるまで思はしめよ。之れやがて來らむ宵をして安らかに眠らしむる所以ならむか。

かく決心して吾は徐ろに起き床上に端生して冥想を續くること、せり。先づ思ひ起すは「吾は過去と未來との連鎖である」てふ道也先生の演說の冒頭句である。

吾は過去と未來との連鎖である、なる程吾なしには過去も現在もある筈がない樣であるが、しかしこゝに疑問ある、若し吾をして過去と未來との連鎖であるとしたならば吾の生れた時は正に過去の出發點で死する時は即ち未來の終焉である、で一日一日過去は成長し未來は短縮す、而して過去が最も成長した時は未來は最も短縮した時である、而して吾れなしに過去も未來もないとしたならは死とふ事實は此の最も成長した過去と最も短縮したる未來とを同時に無に歸せしむるのである。

嗚呼喘きあえぎて漸くに辿る連鎖は無てふ一事實に到達せむか爲めのそれなるか。吾は大に疑なき能はず、されど道也先生ならぬ吾は先生の所謂吾が過去未來てふ語の眞

意を知らざれば是以上評論する能はざるなり。且つや若き警世家が數學の頭腦なきものは哲學の思索に耽るべからずと喝破し給ひし折柄なれは吾の如きは斯かる事を論ずる資もなきものとあきらめて先づ此の思考は中絶すること丶せり。何れこれ等のことは2×2=4なる數學の公式中より解決し得るとならむ。

思ひは過去より過在に移つた、過去の追想は多く樂しいと云ふ人があるが、しかし僕にとつては寧ろ苦痛である。却つて現在の方が樂しい、、、友人のことなど、、、瓔珞同人のことなど思ふも亦樂しみの一つである、吾を忘れて友のことを思ふ、こは實に此の上もなき快事である、吾は吾の全然忘却し終らる丶を希ふのである、吾の早中に於ける一年有餘の生涯は諸君によりて大に慰められた、僕は深くこのことを謝する、海人の温容、吐君の快活、空君の豪快、城君の洒脫（一寸適評を見當らぬ）豐君の情緒、朝君の直摯、、、嗚呼吾は長へに忘れぬであらう、思ひは諸君の未來に馳せる、趣味の生活を希望し給ひし「海吐兩君の」如きは「牧の鈴、ふればゆう野のもや晴れて、羊などよぶ、入日の背に」と云ふ如き悠乎超俗の生涯をなし給はむか、豐君よく海を讃美し給ふ、君はハイネの如く情緒又麗はしく未來の詩人として吾人の囑望するや大なり、希くは自愛自重せよ。城君もハイスクールに入り給ふとのこと、希くは俳的趣味をしていよいよ深からしめよ、朝君は穩健なる實業家として世を渡り給ふべしと信す、唯吾々同人のうち憂ふるに足るものは殘れる空々と吾となり、空や閑々として常に嘯く、波の顏は樂天の隨一なり、磊々として常に呵々大笑す、彼や實に愛すべき者なり、憎まんと欲して憎む能はざるものなり、されど世は濁れり果して此の可憐兒をして多幸ならしむべきか、聞く處によれば南米渡航を欲せりと、大によし切に前途の祝福を祈る、吾輩は多く自らをこゝに喋ふするを欲せず、たゞ諸君、吾は孤行邁往道の爲めに闘はむ事を期す、本年はやがて我が精神界革命の期なり、吾は未だ全く死せず希くは憂ふる勿れ。

タイムは刻々として一寸時も休み間なく過去はいよ〳〵成長しつゝあり、時計に今一時を報ず、耳を聳つれば雨やみたるにや寂として靜寥なり、即ち雨戸を排して窓外を見る、月色淡く中空にあり、メランコリーなる空氣はモヤの如く地上を壓せり、女子

大學の校庭にある電燈のみ燦として眩ゆし。

かくして泣くべかりし此宵は寧ろ多く慰められぬ、（八日午前二時頃）（瓔珞第五號所載四十年三月中作）

第四編　日記抄

明治三十八年八月

廿日、老いませる、父君母君、偖は病床に臥し給ふ、叔母君に別れを告げ、家兄に送られて、鄕を出づ。途嫁げる姉君を訪ひ、午餐を喫し、和船にて宮津に至る。

五時卅四分家兄に Good by を告げ、第二宮津丸に乘じ、舞鶴に向ふ。顧みれば、家兄猶目送して埠頭にあるを見る。

この夜朧月團々、人をして自然の神秘に醉はしむ。

廿一日、曉風河を拂つて船は孰賀灣頭に入る。直ちに上陸して、汽車に轉乘し、東に向ふ。午后六時靜岡着。清水屋と云ふに一泊す。夜、樓婢給仕中に放屁し、赤面坐に堪へず、匆惶として去る、滑稽、

廿二日、早朝靜岡を發し、午后一時新橋に着く。直ちに今西兄を訪ふ、夜新美君來訪、

廿五日、連日雨蕭々、村田梅田に端書を出す。

生駒子たつ子の面影――無邪氣――其體度――其笑顏――天使――長へに余はこの天使を愛せんかな。（今年十一だよ）

廿六日、雨依然として降りやまず。

冷頭熱誠なるべし。

廿八日、Who will not he can, can not he will. 心すべき哉。妹より手紙來る――清き情け溢るゝ許りなる――。

○九　月

五日六日七日、早稻田中學入學試驗を受く。掲示を見るに、補缺二名とあり、あゝ二名の補缺に受驗者八十余名、四年級だとて馬鹿にしたものにあらず、入學し得らるゝや否や。日々谷公園に國民大會中止せられ交番の燒打ち始まる。

十日、入學許可の通知來る、先づ〳〵慶すべし。入學手續きをすまして生駒榮方に行く。

十一日、今日始めて學校に行く、始業式あり大隈校長の訓誨增子幹事の報告及び注意等ありて終了す。

吾人は現實を離れて生活し得べきものにあらざれば、中學卒業といふ一形式も亦必要なるべし呵々。

十二日、若松町、加納方に引き越す、閑靜にして神田の無賴的下宿に優ること數等。夜生駒家を訪ふ。余は何となくこの家に暖かき空氣の滿てるを感ず。

十三日、陰曆十五夜なり。今西兄と共に生駒家の月見に招かる、豐子孃の心からのもてなし、興いと深し。龍子さん信ちやんの可愛らしい笑顏！月の夫れと意ありて通ふが樣―樂しき夕であつた。

豐子孃今何處！懷舊の情に堪へず（廿九年八月廿日夜）

十六日、放課後、室内に閑眠す、三由、森の兩兄來訪。雜談數刻夕食后暮色に包まれて近郊を散策し、月を踏んで歸る。

十七日、昨夜惡夢に襲はる。

正俊君を拉して百花園に遊ぶ。秋草方に妍を競ふ、一遊の價値あり。歸途淺草にて釣り堀りをなす、五錢を投じて一擧大魚を獲んとして果さず、更に五錢更に十錢二十錢と消費する事一圓有餘にして初めてやむ、穫しものは何ぞ。鯉二尾黑鯛三尾のみ――いゝ馬鹿の皮かな。生駒樣方に持ち歸る、黑鯛は豐子孃自ら手を下して膳に上す、美味なり、鯉は下宿屋にやる。

吾が最も缺點とする處は、餘りに神經質にして、且つ繃縫の間に凡てを通過せしめんとするにあり。之れ大なる過なり、罪惡なり。

僞りの口より出づる原因は、女性的虛榮心に起因す、汝只眞實なれ、虛榮の如きは、婦女小人輩の特質のみ、未來に抱負を持する者の、斷じて近づくべきものにあらず。

廿日、小感情の奴隷となりて、一日を送る。咄

廿二日、曉起窓を開けば、眞紅の東雲天に朝し、日將に上らんとす――壯嚴――雄大――余は朝の雲を愛す、

廿三日、風邪にかゝる、

廿五日、風邪未だ快からざれど登校す、阿兄より手紙來る

無益なる事をなす勿れ。

爲すべき事を捨て去る勿れ。
爲すべき時は全力を以てせよ。
爲すとは最上(ベスト)をなすことなり。

○十　月

十四日、午后三時、今西兄來訪　共に手を携へて、郊外に出づ、途半僧半俗の奇人、近藤某を早稻田近郊の某寺に訪ひ、快談小時、辭して更に高田附近を散策す、沃野千頃、茫乎として際涯なく、秋草亂れ咲き、尾花風をいたむ、薄暮鬼子母神に參詣し、林樣方を訪ひ、日全く暮るゝに及んで、生駒樣方に着す。天眞爛熳なる、信ちやん、龍ちやん！半開の花の如く可憐なり、九時頃辭し去る。

十五日、陸上運動會あり、正俊君龍子君德子君武君等を拉してこれを見る、

十七日、(神嘗祭)天高澄み氣清し、日々谷に散歩せんと思ひ、下宿を出る、途生駒家を訪ふ、豊子嬰より今西兄に送る可き、花輪及び手帳を委託せらる、行つてこれを兄に渡し、午餐を喫し、日々谷公園に至る、紅塵萬丈長く留まる可からず、京橋の梅田家を訪ひ岩君と少時快談して去る、歸途再び今西君を訪ひ、先きの返書を託さる、愉快なる一日なりき。

十八日、早稻田大學に米國デモクラット黨の名士ブライアン氏の演說を聞く、會場は、圖書館前の廣場にして、天幕を周らして、演壇を設く。先づ鳩山校長たつて英語演說をなし、ブライアン氏を紹介す。こゝに於て氏は、便々たる腹筒をつき出して演壇に立つ、除ろに、滿堂を一睨し、偖語を「吾が學友諸君」と云ふに起し、其大隈伯に招かれて、斯くの如き青年諸君の前に一場の演說をなすの、甚だ光榮なる旨を述べ、遂に、得意の雄辯術に說き及び、洪鐘の如き聲を

以て、縷々敎子言を連れ、終りに、敎育の必要と人生の目的とに論及し、遂に吾人は死する時、世人をして、「夜は暗し光消えたればなり」と叫ばしめよと、論結して萬歲聲裡に壇を下りぬ。この間僅々三十分を要せしのみなりき。

二十一日、高瀨と敎場で騷いて增子先生に叱責せらる、放課後、生駒家を訪ひ、更に高常君と今西兄を訪ひ、西洋料理を奢らる。

今西兄の、諤々たる訓誨は吾人の切に感謝する處なり。余は同兄を訪ふ毎に、常に何物をか得つゝある如く感ず。

二十二日、明日の觀艦式を觀んものと獨り横濱に向ふ。此日囊中僅に一錢五厘、實は野宿の覺悟なりしが途にて初めて語を交へし友、谷某君と云ふに奢られて、食事ぬき一と晩十五錢と云ふ下宿に泊す、

二十三日、昨夜、夢屢々驚かされて眠るを得ず、明くるを待つて、直ちに不快なる宿を飛び出す。途、偶然河原昇君及び其兩妹に遭ひ、其親戚なる林某氏方に至り、小憩し、打ち連れて後山に登り、觀艦式を見る。此の日余は例の破れ服に、破れズボンをまくりあげ、脚胖もはかず素足に素草鞋と云ふ粉裝(イデタチ)、然かも手に、犬殺し的野生のステッキを持つ。宜なるかな河原君の兩妹、切りに余を窺視してクス〳〵笑ふ（因に曰ふこの兩孃一は實踐女學校他は華族女學校の生徒なりと）

二十六日、放課後高橋千里君を横寺町に訪問。雑談數刻の後更に麹町に河原君を訪ふ。

ピーコンスフイルド曰、人の爲せし事は吾れ亦なし得ざるの理なし、余は奴隷にあらず、又捕虜にあらず。希くは氣力を以て困難に打ち勝たん。

編者曰く以上を以て三十八年度日記終る。左記一篇は其餘白に細書しありしもの、あはせてこゝに錄す。

○○磨足下

余は、三十八年の一大紀念として、足下を記臆す。今にして追想すれば、恨事多しと雖も、余は時に足下を想起して、惆悵の念に堪へざる者なり。足下希くはこれを聞け。

餘は初めて足下を見たる時、言ひ知らぬ溫情と、懷かしさを覺えぬ、蓋し余は當時實に情に飢ゑたりしなり。足下想へ、未だ四五にも滿たぬ若き吾れ、血は内に燒ゆる靑春の時、骨肉の情に離れ、獨り冷かなる社會に出で、冷かなる人に接す、何ぞ悵として悵まざるを得んや、飢ゑたる者は食を撰はず、冷えたる時は微細の大氣も大なる滿足に慣す。

余は實に君を得て一昧の溫情轉々掬すべきを知り、心ひろかに君に接するの日を以て樂みとなしぬ。

斯くの如くにして、余は、遂に君が胸中の琴線の、妙なる響に、耳をかたむくるを得ぬ、君が胸中の琴線そも何を誇りしや?!

君はまことに彼の人を愛しぬ、彼の人も亦君を惡からず思ひき、彼の人は吾が兄事せる人、從而余は君に姉事しき、計らざりき、君と彼の人との交情は、微細なる、一蹉跌に會ふて、頓坐せむとは、さるにも君の心の弱き事なりしも、嗚呼、君も遂に智の人なりき、君の情は父を動かすに足らず、君の意は愛人の爲め犧牲とならんとするの氣力なし、やみなん哉。

余は、嘗つて、女性なるものは、情密にして、愛の心深く、落漠たる吾人の生涯に、限りなき慰藉を與ふるものと思ひき。而して今や其誤信なるかを疑ふに至りぬ。

さはれ、所詮は運命の手に弄ばるゝ自他の身なり、今た至りて、吾れ又何をか云はん、余は兎に角暫時なりとも、足下が懇情に接するを得しを喜ばん、足下が Lover も恐らくは余と同感なるべし。

余は只足下が健康と祝福を祈る。

明治三十九年

一月一日、余は三十九年に於て新たなる生涯に入らんことを期せり。

余は長夜の眠りより醒めつゝあり。

五日、書窓によつて、茫然空想に耽つて居ると、下婢が小包が到着したと報じて吳れた。急いて開封して見たら、柿の干したのが澤山つめこんであつた……無論國から送つ來たのだ。

今年の正月はこれで滿足した。

下宿屋に於ける越年!!!そは情に飢ゑた、吾れには、餘りに、殺風景であつた、餘りに沒趣味であつた。

今の世は金が無ければ、下婢にすら頭を下げては貰へないのだ、主婦君の「新年は御目出たう昨年は云々今年も云々」是れも金の爲めの御挨拶かと思へば一向有り難くもない。

友人!其れも悲しい事には、まだ、苦樂を共にすると云ふ樣な人は現在居ない……只、吾れを愛して吳れる今西兄はあるが……夫れさへ今日迄は一度も共に新年を祝す期が無かつたのだ、(勿論二三日のうちには會ふが)

現金主義の世の中に、僕の樣な男が生れて來たとは、何の因果だろふ？考へればつく〳〵世の中が嫌になるね――どふも世の中は、吾が輩の氣に入らぬ計りだ。

然し、氣に喰ふ氣に喰はぬは、感情の問題だから、時によると、妙に氣に喰ふ人に出會ふ事もある。安達兄や坪倉兄や村田兄は兎に角缺點もあるが氣に喰つた友人だ。又先輩としては、今西兄の如きは實に氣に喰つた人だ。東京に來てからは、まだ日が淺いから、餘り氣に喰つた人々には出會はぬ、其他、幼時の友達としは、小山梅田の二君が先づ〳〵氣に喰つてる。

是れ等の人々とは、僕は喜怒愛樂を共にする事が出來ると思ふ。

僕の性格を作つた、前初の人は、母の訓戒と慈愛であつた。少くも、僕が感情家であるに至つたのは母の感化が大である。只僕が怪むのは、父があれ程意志が强固な人なのに、何故僕の如き意志の薄弱な子が生れたのだろうと云ふ事だ。

小學校に入つて、渡邊先生は一番僕に感化を與へた、當時僕に渡邊先生程豪い人は世界に又とないと思つた。しかも此の人の感化は僕をして愈々多感な男とならしめたのみだ。

小學校の門を出てからは、僕は全く迷子となつた「行ンか戻らふか、戻らふか行ンか」と云つた調子で、野心は未來に馳する、感情は現在に於て泣いた――。

講習所の一年間は、僕をして、馬鹿にしたのみだ。小學校教員の一年間は、僕に不平と惡口を教へた計り。同志社の半年は僕を惰くならしめたのみ。

かゝる間に、吾れは酒も飲んだ、菓子も食つた、胃病にもなつた、神經衰弱も源因を先づこゝ等に發してるらしい。

廿六年は、かくの如くに過ぎ、廿七年の二月、同志社を退學して、東京に一ト先づ來た――大なる希望を以て――しかも病氣の爲め、漂涙又漂涙、一年の在京中、何の得る所もなく、翌年の五月病軀を抱いて、不名譽な歸省をした。故郷に於ける三ヶ月の生涯は、僕をして、益々神經質の人とならしめた、此の間に梅田と小山が高等學校に入學しだ、僕は少なからずあせつた。

そこで八月廿日、兄に送られて故郷を出で、再び東都に漂涙の身となつた。

九月十日、早稻田に入つた、早稻田の生涯は兎に角愉快な、又希望ある生涯である。

僕の是れ迄の生涯は、實に斯くの如くにして、今に至つたのである。而して故郷に於ける、坪倉安達の兩兄。京都に於ける、村田兄は、實に吾が半面の歷史を熟知して居る友だ。

最後に感謝に堪へんのは、今西忠世兄の慈愛だ……到底吾れの鈍筆等で形容する事は出來ぬ。

此處邊書いた處で、不圖壁上を仰いたら、雙親と兄及び叔母等の寫眞が懸つて居た……

……湧然として奮鬪の心、裏に生ずるを覺えた。

嗚呼一の小包、十數箇の柿は、吾れをして此の追想錄を書かしめたのである（午後八時五十分）

六日、吾れは今下宿屋の、一室に、獨り時計の刻々と進む音を聞いて、種々樣々な、空想に耽つて居る。

あゝ何と云ふ、靜かな夜だらふ！思ひは、過去より現在、現在より未來と馳せて、止めども無く動いて居る。

僕は、何の爲めに學問してるのだらふ？、いや僕獨りでない多くの青年男女の學生に、此の疑問を發したら、果して何と答ふるだらふ？僕は自ら問ふた、富か？否。權力か？否。名譽か？否然らば果して何か曰く不可解である。

德富蘇峯氏は、人間が得んとするものは、戀と名譽だと云ふた。然し、僕には贊成が出來ない。毎日々々、僕は不得要領に暮して居る、五十年六十年の後死ぬる時には、果して要領を得て死ぬる事…が、出來るだらふか？要領を得て後に死にたい――これ吾が願望である、學問したら果してこの要領が得らるか知ら？

僕は未だ一日として滿足して眠つたことはない、毎夜、寢前に云ふ可らざる、苦痛がある、十又九年の生涯は、全く不滿足な生涯であつた、過去現在を以つて未來を推すと、實に心細くなつて來る。

然し、僕は失望はしない、これからは、日々幾分なりとも光明ある生涯を送る樣に心懸けて行かふ――今夜は非常に疲勞した。（九時十五分）

七日、失望の時に聞く、pity の聲は、一言半句も忘れる事が出來ぬと嘗つて聞いた。

實にさふであろふ、失意の地に立てる人に報酬を得んとする者はないからだ――人は報酬を得んとするから爲す事が皆卑しくなるのだ。若しこゝに（汝失望する勿かれ吾れこゝにあり）と常に云ふて吳れる者があつたら、吾れ等は、如何に幸福で又如何に安神して事をなす事が出來るだらふ、然し果して宇宙にこんな者があるだらふかどうだらふ？宗教家はこれを神と云ふ、而して吾れは神とは何ぞやの疑問が解けぬ間は、それに安神する事は出來ない。

現在の吾れは吾が理想我を大ならしめ、且つ常に吾れと共にあらしめ、而して後夫れより、此の同情ある語を聞かんと欲する者である。

山陰の奇傑、山中鹿之助は、嘗て願くは吾れに七難八苦を授け玉へ」と祈願した、日本に過ぎたもの二つあり、豐太公に僧日蓮と歌はれた、彼の日蓮は「憂き事の猶この上に積れかし。限りある身の力ためさむ」と誅した。顧みて吾が身を思ふ、衷心果して耻づる處なきや？

九日、吾友、高瀨君、昨冬父君滿州より凱旋せられしより、之れを迎ふる爲め且つは久々の會合を兼れて、廣島に至り、昨日歸京せりき。

彼れは早稻田に於ける最初の友なり、同年輩にして、又入學の時を同しうす、情慾にして、亦掬すべきものあり、今日共に中田を訪問し、打ち連れて青山近郊を散策し、更に祝、藤井を歷訪し、歸途をでんを食つて共に快談す。一種云ふ可らざる友情の、此の間に通ふを覺えき。中田の熱情、祝の溫厚、謹嚴、皆吾が學ぶべき處あり。

早稻田に於ける半面の生涯は是れ等の人と行を共にせん哉

十日、Miss. F. K. 芳紀正に十五、蕾漸く開かむとして、可憐云はむ計りなし、其處に一點の汚れ無く、其處に一點の邪氣なし、あゝ嘗ては某々子の美に、深く心を動かせし吾れ、今やこの神々しくして氣品あるに胸を打たれ、光惚酔へるか如き心地す。

君よ、吾れは今赤手空拳を振つて人生の奮鬪場裡に入らむとするもの君は駘蕩たる春風に搖られて光明の中に黄金時代を送るもの、……あゝ余は、只君が前途の多幸を祈りてやまんのみ……。

十日、悔いを後に殘す勿れ。最初に先づ三思せよ、

吾れ昨夜下痢非常に甚だ敷、腹痛殆んど堪へ難し、是れ一昨日の暴飲暴食より來る、やみなんも哉吾が薄志弱行！

（午後四時）

四邊沈々として夜漠々、吾が室せまし、僅かに二疊——時計は刻々としてこの靜夜を刻む、吾れ惆悵として、獨り冥想に耽ける、火鉢に火既に絶えて、冬の氣身にしむ。

あゝ、吾れ喧々擾々の境に、遑々として、生を貪り、日夜小才と小才との暗鬪に疲れ果てぬ、聾の如く吾か耳久しく天地の清籟に接せず、盲に似て吾か眼遂に藝術の神彩に、遠ざかる事久し矣、今にして悟る處なくんば、何れの日何れの所にか適歸するを得ん、

あゝ歸らんかな、自然の領土、行かん哉、藝術の手圖。

夜は愈〻更けぬ、万籟既に〳〵絶ゑ、人は各々安らけき夢に入り、木も眠り、草も休みぬ、而してわが眼愈〻冴えたり。

余は今思想に飢ゑたるを覺ゆ（夜十二時十五分）廿四日、あはれ薄命の御身よ

御身は誠に幸なき人なりき、御身の同胞は多かりしと聞く、而かも相繼いて病痾に斃れいつくしみ深き、父君すら去年遂にみまかり玉へば、御身は僅かに不具なる兄君、及び母君と只三人淋しくも世を過す人となりぬ。

宿世の縁そも如何なれば、かくは果敢なき運命に泣く、御身となり玉ひしか、思へばうとましくも、又悲しき浮世ならずや、御身は齡なほ四五の松を迎へ給ひしのみなり、而かも眉目美はしき生ひたちなれば、誠は、情深き人と共に、行末長く幸ある生涯送り玉ふ可きなれど。思ふがまゝならぬ浮世なれば、御身の父君又は同胞の病ひの、なほ御身にも宿せむ事を恐れ、冷かなる世の人は、御身と親まん事をこばむと聞く、あゝ無情の世や、無情の人や。

さるにても、余は滿腔の同情を御身に注ぐ、昨夜は深々と御身の悲しき物語りを聞きて、輾轉として遂に眠る事も得ざりき、あゝ悲慘なる御身の境涯よ、神、願はくはこの

悲しく、美はしき乙女を救へ（夜頭痛を忍びて記す）

廿八日、若井茂夫君の訃を、堀江君より聞く。生あのものは必ず死ぬ、何れは逝くべき人の命とは知りながら、偖も胸驚く事よ、吾れは其夢ならざるかを疑ふ。

吾れ、君と小學を同じくし、後京都に遊ぶや、君亦余が行を逐ひ、共に叡山に嘯き、共に琵琶湖に漂ふ、扨ては、秋の夜長を眼りもやらで語り明せし事ありしを、吾れ故ありて、京都に客遊し、跟々として、紅塵の裡に彷徨するに及び、自ら書信の往復も絶に、たま〳〵君病を養ふて、故山に歸臥すとは聞きしが、まだ一度もそを慰むる事もせでありしが……計らざりき、今にして丰然君が訃言に接せんとは

夢か〳〵眞に夢なりき、幻なき時の追想――ア、多情多感の吾れをして、腸の九廻するを思はしむ、掛津濱の海水浴、與謝村の自炊……吾れをして只それ泣かしむるのみあ丶。

君が靈あらば來りて吾が吊辭を受けよ、君が友が孤影蕭然として君が追想になく、知るや（午後十一時半）

四月

一日、空曇りたれ共、雨は降らず。昨日成蹟表發表せられたり、不甲斐なき成蹟を得て、自ら耻づる事大なり。然れ共、現在の余は、宿痾になやめる身、區々たる成蹟等の爲めに、心勞するは不可なり、只己が主義に向つて、修養の行程をたどり行くべし。午後、齋藤君來る、打ち連れて、戸山目白附近を散策す。歸途、關口にて、教會に入りて、説教を聞き（牧師曰、今の世に、基督教徒の團體を外にして、人倫を講ずるの團體なし、今の世は腐敗を極めたり云々）其馬鹿氣たるに吹き出す。此日、そばを喰ひ、天どんを喰ひ、壽司を食ひ、滿腹べん〳〵家に歸れば、富岡重治君京都より來れるあり、對談數刻の後、寢に就く。

二日（月）春風胎蕩として、陽氣悠々たり、友あり遠方より來る亦樂しからずや。言や眞なる哉。午前、遠來の友、富岡君を拉して、招魂社に遊び、遊就館を見る。

四日（水）余は今思想に、大變化を來しつゝあり。心身共に革新の期に入らむとす。區々たる、衆愚の毀譽の如きは何ぞ意に解するに足らん。余は今自らを修むれば足る、何ぞ左顧右眄するを要せんや。

編者曰、此の間故人は故樗牛を耽讀せしが如く日記帳は殆んど其拔粹を以てうづむ

五日（木）國府臺に遊ぶ。

七日（土）午前、齋藤君を訪ふて、江戸川に遊ぶ。齋藤は快男子なり、余は斯くの如き、洒々たる人を愛す。彼れは淡白なる男なり、彼れは無邪氣なる男なり、余は斯くの如き人を愛す

この日妹より來信あり、今西勝治氏の長女、しげの子の訃を傳ふ。佳人薄命とや、酷なる哉言や彼の女は、鄉里にも珍らしく美はしき少女なりき、さるを未だ戀の美酒をだに味はゝぬ身を以て、無情の風に散らんとは、時や鄙も都も

花盛り、老翁共に春の陽氣に微笑める時、如何なれば神は獨り彼の女にのみつれなかりし、――いつくしみ深き神と彼の國の道者は讃美す。――余は其聲に疑ひあり――余は神に恨みあり、あゝ恨みあり。

又曰く陽春三月に當り、姉君女子を生み名を惠子と呼ぶと。

あゝこゝに逝く人あり、かしこに生るゝ人あり。世は樣々なる哉

八日(日)　天薄く曇る、花曇りと云ふ。富岡君を伴ふて、今西兄を訪ひ、新美君と共に、東臺墨堤に花を觀る。先づ上野に行く滿都の子女、盛裝をこらして群集し、砂塵漠として、梅花爲めに黃なり。逍遙數刻の後、淺草を經て、墨堤に出で、言問ひ團子を食つて歸宅す。

九日(月)　雨降る、雨中の櫻花又一入の趣あり、終日、齋藤、藤井(誠太郎)、國井等と戲れて暮らしぬ。夜は藤井(孚)を訪問す。

雨を音樂なりと云ひし、風雅なる人もあると聞けど、余は如何にしてもかゝる迷惑なる、音樂は聞くを好まず。雨中觀櫻と洒落れたきも、雨具さへ調へかぬる折柄、囊中もいたくさみしきまゝ思ひとまりぬ。

大膽なれ、眞率なれ。神經過敏も度を過して病的となれば、大いに害あり。偉人は概ね神經遲鈍なるものなり。余の何そ左顧右眄、他人の言動に心を勞するの甚だしき。友と交はるの道只一あるのみ、曰く眞率なれ。感ずる所あり是れを記す。(十一時五分)

十日(火)　健康は、近日舊に服しつゝあり。しかも時に不攝生をなてし、身神を困しむ。今日も菓子を食ひ、天どんを食ひ、爲めに胸痛むと甚だし。

健康を保持するは、嚴然たる一種の道德なり。而して、吾人はこれによりて幸福の永續を確實にする事を得、希くは吾れをして徒らに過去に泣き、未來を憧憬する、薄志翁行者流となす勿れ。

安達吉助君より手紙來る、彼れは我が唯一の竹馬の友なり、余は切に其多幸ならん事を祈る。

十一日(水)　始業式あり、式後エートル大學教授朝河某氏の演說あり、要は青年の輕舉盲動を戒むるにあり、味ふべきの言なりき。

十三日(金)　中桐先生を訪ふ、不在の由なりき、今日亦罪惡を犯す、曰く天どん曰くミルク曰く餅菓子其代約一圓(植田と二人にて)何たる馬鹿ぞ、夜に至りて後悔す。

十四日(土)　齋藤と、藤井の所に行く。東北の人間は、由來心情が淡白だ。關西の人間は、どうも一般に心情が下劣だ。彼等は金錢以外に友情を認めぬのだ、名聲以外尊長すべきものを知らぬのだ、東北の人間は此の點に於て頗る愛すべきものがある――余は齋藤藤井の二君を愛す。夜は、今西兄を訪ひ、歸途生駒家に寄る、豊子君大分氣障になつて來た、高常君は少し慢的な男だ、吾が輩は成功の一階級を上る迄、彼等と語るを欲せぬ。

十五日(日)　下宿屋から五圓借りた。月謝と書籍代に充てる考へだ。夜は、富岡の月謝調達の爲め、本郷のS店に行つて、ウオッチを犧牲にして、二圓五十錢得た。

書籍も揃つたから、これから一勉强た――下宿屋生活も中々面白い。

十七日(火)　京都に居る家兄から封書が來た、開けば病氣にかゝつて居る由、天何ぞ吾が家に禍するのかくは甚しき、早速返書を送る、骨肉の兄弟には、やはり骨肉の情がある。

廿一日(土)　桑港地震の報頻々として吾人を驚ろかす。

今西兄より金五圓借る、内三圓は返却するに及ばずとの事なり。余は物質上、精神上、同兄より保護誘導を受くる事幾何なるを知らず。同兄が余を見る眞に骨肉の兄弟の如し。余は正に滿腔の感謝を以て努力せざる可らず。

廿二日(日)　余は情に脆き男なりき、余が情は、余をして、禍の中に投せしこと、一再にして止まらず、僞りの中に導きし事も、亦屢々なりき、然かも、其禍や僞りや、皆情的なりしを以て、其動作は甚だ無邪氣なりき。余は吾が神がそを赦し給ふべしと信ず。

幼なき時の情は、吾れに於て幸福なりき。父母の慈愛に泣き、兄弟のいつしくみに笑み、友の友誼に感謝するを得たればなり。然かも、今や余は寧ろ、吾れに情の枯渇せんことを望む。あゝ戀とは誰が云ひ初めし、自然を戀ふる心は、吾れに於て美はしかりき、人を戀ふる心は、吾れに於て苦痛なり。嗚呼余は美はしき自然の戀と、若かき人の戀と、そも何れをか撰ばんや。

吾れに嘗つて戀人ありき、彼の女は年猶ほ若かりき、然かも余は彼の女と心に絶ちぬ、而して今又更に一人を得たり、しかもそも亦絶たんとす。かへらんかな自然の戀に(四時半)

廿三日(月)　祝より現在の事に忠實なれとの忠告を受く。至言と云ふべし。學校よりの歸途藤井の處に行く、高瀬及び池田あり。談笑數刻の後歸りぬ、余は高瀬の快活、池田の情熱を愛す。

廿四日(火)　夜齋藤を訪ひ、琴の名手、山崎よし子嬰の彈奏を聞く。須磨の嵐の一曲、人をして座ろに悲哀の念に堪ざらむし。十時、辞し去る、夜風颯々。

廿七日(金)　妄想の擒となる——嗚呼薄志弱行——。

廿八日(土)　腸痛の結果休校す。

廿九日(日)　天麗らかに、氣長閑なり。午後國井富岡と打ち連れて、日比谷公園に遊び、陸軍々樂隊の演奏を聞き、蕎麥を食つて歸る。妹より手紙來り、家兄の病狀甚だ宜しからざるを報ず。切に一日も早く全快せられん事を祈る。

五月

一日(火)　富岡胃を病んで困む、吾れ亦頃日健康勝れず。

二日(水)　夜、平家物語を讀む。雨の音さびしげなり。

三日(木)　靖國神社の祭典なれば、學校は休みなり。終日春雨の窓に訪づるゝを聞いて、平家を讀む。

吾が、頃日の行動を顧みて、吾れ自ら懺悔に堪へざるものあり。あゝ余は虛僞を以て友と交を結びつゝありしにあらざるか。自重せよ、余輩は黄金に向つて節を屈すべく、餘りに早からずや。吾人の前途は遼遠なり、悠々而して汲々日一日と向上の行程を進め。飲食の友、虛僞の友は、斷じて遠ざけざる可からず。

此の夜藤井と共に、土肥君を訪ふ、君曰く松本先生が、君の餘りに不勉强なるを、嘆じつゝありしと——知己の爲めに、報ゆる所あらんことを期す。

四日(金)　本を賣りに神田へ行つた、三冊で七十五錢、晝飯に十錢、牛乳に十二錢、藥代十錢(酒に醉ふて)切手代

六錢、十錢ビスケット、これで遂に一厘も殘さず消費してしまつた。

午後一時頃、神田からブラ〳〵歸りかけたら、牛込で龍子君に會ふた、大學病院へ、連れてつて吳れとの事だ。そこで、よし〳〵と承知して、本郷迄ぶらついて往つた。歸途、清岩寺に寄つて大いに飲んで遂々醉ひつぶれた。胸がむかついて、頭が素敵に痛い、アヽアヽ酒は苦しいものだ——うまいもので苦しいものだ——。

五日(土) 今日は、隨分金の爲めに、奔走したよ。齋藤から二圓七十錢、下宿から二圓、富岡から五十錢……之れでやつと岩に一圓、祝に一圓返濟した、アヽ金の爲めに心を勞する程、馬鹿氣た事はない。僕はつく〴〵いやになつた。これ迄、僕は馬鹿だつた、今月と來月とに、借金は皆返して仕舞はなけりやいかん。

午後祝の寓を訪ふべく、諏訪の森に歩を向けた、足下には麥が蒼々と成長して、目を擧げると目白台に綠の雲が靉靆いてる。世は新綠の世界に入つた——あゝ野に山に自然と同化して、連日の鬱をやらん哉だ。故郷の空も、偲はれるよ——祝は留守だつた、狀袋に一圓入れて爺さんに託して置いた。アヽ勉强せればいけない、僕はぶら〴〵すべき境遇ではない。——今後は思ひ切り勉强しようれ。(五時十分)

靜かな春の夜だ、セルフヘルプを一頁やつと調べ終つたら、もふ九時半だ。明日は井(一字不用)○君の歡迎會があるそうだから早く起きて、朝飯前にセルフと三角を若干調べる必要がある。

六日(日) 冷水浴、いゝ氣持だ、春も、もふ暮れに近い、浴衣を着て、夕風を待つ候も近づいて來た、月日は矢張り早いものだ。

井○君の歡迎會に、早朝から出かけていつたが、肝じんの主人公が正午になつてもやつて來ないので、僕は先へ歸つた。ユーゴーの戀の透影を讀む」

余は彼の女を戀ふ、余は未だ彼の女と語を交へしことなし、然かも余は彼の女を戀ふ。余は彼の女に、妻たれと云ふものにあらず。余は煩悶苦惱の間に、半生を送り、更に殺伐なる、奮鬪場裡に入らんとするもの、彼の女は○○女學校の才媛、洋々たる春潮にゆられて、若き理想に憧れんとする者、吾れ奈何んぞ彼の女に愛されんことを望まんや。遮莫余が彼の女を戀ふは、余が自由なり。

七日(日) よい天氣だ、夕方岩君が突然やつて來た、そばを奢つてやらうと思つて、下宿に通ひ帳をかせと云つたら若い妻君が愚圖々々云つたので、グツと癪に障つて、直ちに引き越しを宣言した。短氣は損氣だ、實際僕は今引つ越すと云つたつて、金はなし、行く先はなし、困ると云ふのは分り切つた話し、然し、今更弱音も吹けぬから、早速飛び出して、藤井の處へ一泊した。

八日(月) 交益社と云ふに、七十錢を投じて、漸く若松町に一軒素人屋を、見つけた。作日から、金の爲め、非常に心勞したが、今日國井が貸して吳れると云つたので、ヤツト安神した。今日は何だか胸が惡くつて到底勉强が出來ん、早く寢る事に仕樣、不攝生はつゝしまればならぬ。

九日(水) 久し振で雨が降つた、雨の朝は好きだ、雨の日もよい、室内の冥想に適するから——。胃は相變らずグ〴〵なる、僕はこれが悲しい、然しこれも意志次第で、如何樣にもなるものだ。午後梅原が來た。

十二日(土) 頃日物憂き事限りなし、妄想切りに起り制御するを得ずあゝ斯くの如くにして吾れ遂に何をかなし得ん、

やみなん哉。

學校内にて、區々たる事に、教師と論爭するは、愚の極なり。達觀せよ、修養せよ、余は手淫をすら制し能はざる者にあらずや。胃病をすら治し能はぬ者にあらずや。須らく自ら靜思修養すべきなり、何の暇かあつて、外を顧みるを得ん。

美麗な物を見ても、醜惡の物を見ても、或は利益を得た時でも、損耗をした時でも、何時でも吾人が笑ふ時、其笑の中には必ず何か醒めたる理性の囁かある――あゝ誰人か、子供の時の樣に、今一度無心に笑つて見たいと思はぬ者があらうか？

十三日(日)　「自分はイゴイストだ」との高山樗牛の絶叫は、半面に幾多悲慘なるものゝ影を宿す。あゝ余も亦故人と共にイゴイストを叫ばんと欲するものなり。

十八日(金)　今日諏訪村に移轉した。こゝは長屋だ、一ヶ月の屋賃が正に一圓五十錢、敷金と云ふものが三圓ある、差配の婆さんは親切らしい田舍物だ。自炊道具等を調達して、囊中甚だプーアとなつた。

十九日(土)　放課後、高瀨鶴卷植田の三君と共に天どんを食ひに行く、歸りに夏みかんを買つて、中桐先生を訪問した。先生は愉快に談話して吳れた。中に就て、こんな事を云はれた、天を對手としろ――人は樂天でなけりや不可んぞ慷慨する奴なんか野暮だ――成程そふた。おれの樣に、不平許り多く、何も出來ない樣じゃ仕樣が着ない、

廿二日(月)　今朝學校へ行く、途中戸山の原で首を縊つて、死んでる學生を見た。高商の制服を着けた、やせたく男だつた。座ろ同情にへなかつた。

あゝ人の子が、喘ぎ〳〵辿り行く、旅路の末は夫れ遂に死か。人生の意義に惱むとや。人は現世にありて、只茫漠たる無窮を見る時のみ、人生の意義は、死に至りて初めて解決せらるゝなり。雨蕭々と降り出しぬ、ア、靜かな夜だこと。

廿三日(火)　好天氣、天青く地綠なり、余は此の時期を呼んで、青綠の候と云ふ。

悶うるをやめよ。天のみぞ運命を知る。あゝ汝何をか論じ、何をか云はんと欲する。時正に暮春、春服既になる、何ぞ惆悵として、獨り悲まんや。

二十四日(水)　生涯の行程それ如何、宰相を夢みて、進まんか。大將を夢みて、進まんか。生涯の行程遂にそれ如何。われこゝに迷なき能はず。あゝ吾が性情由來單純にすぎ熱情に過ぐ、過られ易く、組せられ易し、今世に處するに、既に〳〵其資格に缺く……余は將來下院の一員たらんことを欲す、而して平民の爲め、其伴侶となつて、諤々の辯を奮はんと欲す。今や吾が國貴族漸く多く、其弊に堪へざらんとす、今にして警戒するなくんば、遂にポーランドの、二の舞ひを演せんのみ。

廿五日、廿六日、廿七日、日光に遠足す。

廿八日(日)　夜、食ふに米なし、富岡と共に目白に至り、林檬方より、米五升借り來る。嗚呼生活難々々々呵々。

六月七日(木)　大學病院に行く、歸途谷君を訪ひ、雜談數刻の後歸る。村田兄の許より手紙來る、人生問題に就いて、大分書いてある——思想の變化が著しく讀まれた。學費が來ればよいにな……やつぱり人間は弱い物だよ。

八日(金)　學校に行く、例によりて餘り面白くもなし。月謝の請求を受く。近頃の生涯は、非常に落魄たるものだ、生駒の家との往來も絶ゑ、梅田の家へも到底一階級を進む迄行く氣にはなれない、野勢樣へも然りだ。徒らに薄志弱行に泣く可き時ではない、泣く時があつたら活動せよ、徒らに泣くは丈夫のなすべき事ではない。

今宵朧月に憧れて、近郊をさまよふ。風野に咽んで、雲空しく動く。油然として、胸臆に通ふ物あり。あゝ偲ばるゝ哉、慈母の懷に、甘露の夢を味ひし昔の——煩悶や、憂苦や、そも何處より來れる、去れ、去れ、只吾れをして吾が生を讃美し、吾が生を感謝せしめよ。

九日(土)　前庭のローズ遂に地に委す、吾れ彼れに水を與へざりければなり。祝の家にて、山田信太郎君に會す。余は彼れの熱烈と眞摯を愛す。

十一日(月)　山田新太郎君所持の小說破戒を讀む。卷末に山田君の批評あり、余の所感と大略一致し居るを以て左に錄記す。

迷妄なる、人種的扁見を打破して、人類平等の義憤をあげたる、著者島崎君の熱烈を尊長す。顧みれば、地上に迷信と無智と未だ跡をたち居る事なし、人爲的權威は拜脆せられ、歷史的の習慣は、多大の壓迫を逞しうす。加ふるに、淺薄皮層なる物質文明の暗潮は、人心をして益々浮華ならしめ、至る所に物質扁重せられて、人格は無視せらる。加ふるに、狂熱なる愛國宗は、深く心底に潛みて、自己の意志感情理性の自由に向つて叫ぶことを忘れ、さながら牛馬の如く驅使せられつゝあることを記臆せよ。汝等の使命は大なり、自己の理性が是認し、感情が追慕せるものを斷々乎として行へ。かくてこそ新時代は現れんなり。

十二日(火)　余は未だ生存競爭の劣敗者たる事を自認せぬ、余は猶未來に生くるものである、余は猶希望を持て居る光明を認めて居る——余は修養せねばならぬ、奮鬪せねばならぬ。

余は、過去の行程の、餘りに平凡なるに飽きたり、寧ろ、大いに波瀾にとみ。苦痛に富みたる行程に進み、而して吾が果して是等に堪へ得るや否やを試んと欲す。

余は淋しいと云ふ、何が淋しいか？人世の意義に迷ひし爲めか、否、余は不幸にして、未だ爾く眞面目に人生問題を攻究したる事無し。失戀か？否々不幸にして、余は未だ戀愛の眞意義を解せざるものなり。境遇か？吾が境遇に何の不幸かある——只是れのみ、

吾が薄志弱行病のみ、あゝこれ余に悲觀を敎へ、余に寂莫を敎ふる唯一の原因なり。

小田内先生の訪問に會ふ。余は先生の無邪氣にして、道學ぶらざるを愛す。打ち連れて少時散歩す。

十四日(木)　同じ諏訪村だが、より一層閑寂の境に居を轉じた。林檬より菜飯を持つ來て吳れた、好意多謝。

僕は全く空想の子だ、常に夫れより夫れと空想を走せて暮して居る。或は終生空想の子に終るかも知れない。而し、吾れは空想の兒に終つたとて毫も悲まない、人間萬事空の空の空々寂ではないか、少なくも、吾れ等迷へる者の目からは、そふとしか思へない。空々の世に生れて、實のある事が出來るもんか、むしろ空々として死するに如かずだ。あゝ人間萬事空の空々寂たる世なる哉。

十九日(火)　午後、山田新太郎君、祝君と共に來る。打ち連れて戸山原に遊び、歸りて後三人にて畑を作る。今日より胃病の爲め絶食す、

廿二日(金)　朝、妄想の擒となる、又罪惡の一日か、あゝこの薄志弱行沒理性を如何とする。終日欝々として樂まず。

廿五日(月)　終日霖雨蕭々、夜三角をやる、數學はいやな學科よ。

廿七日(水)　作夜奇しき夢を見た。薄命に泣く、可憐なる一少女と相愛に落ち、吾れ兄に書を送つて、彼の女を妻たらしめんと乞ふ……と云ふ實に甘い夢であつた。

廿八日(木)　何だか此頃は妙に物淋しい。余は正に、家庭の溫情に飢ゑて居るのだ。

廿日(土)　吾が愛する姉から手紙が來た、吾が心を動かすもの大――僕は修養をせねばならぬ、多情多恨の吾れ。これに強大なる意志の力を加ふれば、余は英雄の素質に缺くる處ないのである。

七月三日(火)　夜既に深し、雨蕭々、僕は考へた。僕は惱んで居る、然し僕の惱みは眞箇の惱みではない、人事をつくして、後に惱むのが眞の惱みだ、然し僕は人事をつくして居ない、

今日進歩しないものが、明日進歩する筈がない、今日向上の道程にあらぬ者が、明日突然向上の波形に、觸れんと云ふは困難である、否、普通の人間には、出來ない事だ。僕が過去の生涯は確に罪惡の生涯であつた、虛僞、卑怯、不勉强、無氣力、薄志弱行、あらゆる罪惡の生涯であつた、然し、かゝる事は今はもう悔ゆるに足らない、僕は確に修養しつゝあるから。(十一時)

四日(水)　紀念舘落成式があつた。大隈伯、高田博士、島村胞月氏、校友總代の某法科大學生の演說、皆夫々有益であつた。

五日(木)　頭腦を緻密にするを要す、紀律を嚴肅にするを要す。或る時期を除いて妄想をするを要す。至誠と勇氣とを以て不斷の健鬪に資するを要す、

十日(火)愈々十六日から、試驗だ、僕は今回の試驗は受げ樣か、受けまいかと大いに迷つた、現今、頭腦は實に不明明だ。而し試驗は斷然受けるに決心した。祝君は實に僕が早稻田中學に於て、忘る可らざる良友である、僕が京都に於て村田君を得、東都に於て祝君を得たは實に喜はしい、彼等は故鄉に於ける、安達、坪倉兩兄と共に、僕の生涯に於て最も大なるインスピレーションを與へたフレンドである。

十一日(水)　千輪健吉君曰、頃日女子大學の生徒連、歸省し終りて、何となく淋しいと。又曰く何等自己に關係なき

即ち自己の戀人でもなければ、又知己でも無き、眞に路傍の人ですら斯くの如し。婦人と云ふものは、確に一種の魔力を持つてる者である云々。石部金吉ならぬ、健吉君の口から此樣な事を聞かうとは思はなかつた呵々。

考へて見ると、僕の思想の變轉も隨分甚たしいものだ。昨日の吾れは、今日の吾れではなく、今日の吾れ、亦明日の吾れではない、自分乍ら、冷靜に考へて見れば、滑稽に思はれて仕方がない。やれ軍人か如何の政治家になりたいのと、區々たるヴァニティーの爲めに、浮動して居たかと思ふと、實に馬鹿氣て來る。特に、生駒家との交際の如きは珍無類の馬鹿さ加減であつた。

夏期休暇も近づいて來た、僕は、今年は身體の養成を主になさればならぬ。前途遼遠の時に、神經衰弱になつて居る樣では、眞に致し方がない。今の豫定では、伊豆の伊東邊を旅行する考だ。

夜三角をやつた、數學は、やればやる程趣味の出てくるものだ。神經衰弱の療法には、數學と冷水浴が最もいゝ。

十二日(木)　汝の虛榮心を去れ、汝の虛榮心は只汝に苦惱を與ふるのみ。銅は銅としてあれ、黃金の裝ひをせんと欲する勿れ。錫は錫としてあれ、銀の裝ひをせんと欲する勿れ。貧者は貧者らしく、富者は富者らしく、愚者は愚者らしく、智者は智者らしくあれ。

十七日(火)　半前三時迄床屋外に出づ。弦月高く中空に掛り、凉風座ろに肺肝を洗ふ。立つ事少時、汪然として涙下るを覺ゆ。

眞箇、宇宙を統御し終ふ、大實在者よ、吾れ汝を信ず。あはれ、空名に憧れし吾れ後ろに去れ、虛榮の奴たりし吾れ彼方に去れ、斯くて、吾れ汝によりて生ける生命を得、汝を讃美しつゝ、清き〳〵信仰の生涯に入らん。

○三十九年の夏

八月十三日、岩瀧に於ける三日間の海水浴も、友人無きと、海の穢きに平降して、早速歸宅した。矢張り、掛津濱や八丁濱がなつかしいよ。

十四日、讀賣新聞に、德當蘆花氏の、エルサレム巡禮談がのせてあつた。其最後に記して曰く日本程よい國はない此の國に居るものは、慣れて居るので、種々樣々な不平を云ふが、實際こんな美しい國は無い。余は、遂に日本を愛せざるを得ぬと……故國を咒ふ、内村鑑三氏一派の人以て如何となす？

十五日、親君から手紙が來た、余は親君だに友とし得れば、もう澤山だ。紛々たる奴輩に交際を求むる必要はない

十六日、吾人は、吾人の事業が上帝の審判によりてのみ、初めて其眞價を辨ずるものだと云ふ一大自覺を要する。吾人は、上帝の攝理によりて、地上に生れ、上帝の攝理によりて、此の土に生息し、此の事業を成し、此の學を學ぶ。この自覺ありて、初めて敬虔の念を生し、勇氣體に充つるを覺ゆるのだ。希くは、吾れをして、世の潮流を

逐ひ、蓬迎を事とし、象愚と共に蠢動するの人たらしむる勿れ。

十七日、無用なる言語は、婦女子の事なり。余は休暇終りて、再び東都に客となるも、斷じて無用なる、人生問題社會問題、或は校風問題等に向つて、駄辯を弄せざるべし。吾が性由來感情に富み、時に自己を忘却して盲動する事あり。あゝ小感情の爲めに、盲動するものは、禍なる哉。吾れ頃者、最も痛切に、此の事を感ず。

吾をして、一面に冷かなる血を流れしめよ。しかも他面に於て、涙多からしめよ。余は此二者の調和に缺くる事なきを信ず。

十九日、余は、故郷に歸る毎に、未だ嘗て田園の俗化を悲まずんばあらず。あゝ人情の淳澤を田園に求め能はずして、吾れはた何處にか適歸せん。

廿日、墨岩涙香曰く、常人にして、偉人となるの法は、他なし、心に遠大なる、理想を抱いて、其日の義務を遂行しつゝ行はば即ち可なりと。然り、吾人にして、裏に仰ぐべき理想の光なからんか、汲々たる修學、必竟、無用の閑事業ならんのみ。

人は、何でも未來を考へて働くがよい。仕越した仕事は、天に預けたと思へ。六圓の月給取りが十圓の仕事をしたら四圓丈けは天に貸して置いたと思へ。天は數年の後、利息をつけて汝に返金する事受け合ひなり。

廿三日、今西兄が歸省した。今夜は其歡迎會だ、僕は詩吟もやつた、放歌もやつた、又吉岡某の暴論に對して、大々的反駁を加へてやつた。學校の教員サンの「宇宙が云々」と云ふ御名論、馬鹿氣て御話にならない。

吉岡某との論爭後、今西兄が、一言吉岡の事は御心配を要せん、乃公が居る——自分獨りは首も斬るだらうが、乃公の首はよも斬れまいと云はれた——僕は思はず涙が出た。

廿五日、村田次郎君から手紙が來た。僕は只譯もなく、其手紙が懷しく覺えた。

彼れも亦薄命？の兒だ、彼れも亦物質的に呪はれた兒だ。物質尊重の風が漸次擴まるにつれて、偉才を抱き乍ら、不遇に泣く兒が多くなるは、眞に慨すべきである。

二十六日、昨夜は、殆んと眠らなかつた。駄目だ。……今から眠られない樣な男は駄目だ。何故眠られない樣に、神經を衰弱させたか？馬鹿奴。僕は眞個思ふた。自己を救ふものは只自己のみと。其自己が、かう自己を愛しない樣では、いくら勉强しても到底駄目だ。僕ももふ二十歳になつて居る、何時迄も、自分を欺いて足れりとする柄ではない。自ら警醒せねばならぬ、自覺せねばならぬ。

僕は確に今妙な男、しかも惡意味に於ける、妙な男となつて居る。藤井誠太郎君が云ふた通り、不得要領な男かも分らない。

廿七日、休暇になつて、高瀨に二度端書を出したが一度も返書が來ない。僕は高瀨の心情を疑ふと共に、友としての彼れを疑はざるを得ぬ。

（此の項、抹殺しあれ共、故人に對する罪滅ぼしの爲め、こゝに錄す。高瀨）

最早、休暇にも飽き〳〵した。今日は陰曆の八日だ、二階の窓から、御月樣を見る。今の御月樣は、青年時代の御月樣だ、一日々々進歩の跡が見えて面白い。

Work hard and fear God. Love not pleasure, love God.

廿八日、成功と云ふ事に就て、今の人は大なる誤解を持てり。特に、山間の地に於て、其甚だしきを覺ゆ。吾人は敢へて世の潮流に投合して、衆俗の稱讃を得んとするものにあらず、然れ共、吾人の事業が、社會と關係すること大なるだけ、是非共、誤解の一端なりとも正し置くの義務と必要あり。あゝ黄金崇拜の弊は、今や田園に浸入し、人情最も朴訥なるべき、山間の地をして、猶ほ且つ、俗惡居るに堪へざらしむ。

慈愛深き父母は、鶴首して吾が所謂成功を待てるならん。而かも吾が地上に生れ出でしは、決して父母の爲めにあらず。吾れは、上帝の攝理によりて生れ出でし事を深く〳〵信ず。吾れ既にこの自覺あり、吾が前途に横はれる、責務は重且つ大なり。自ら戒め、自ら重んじ、不斷の健鬪を續けざる可らざるなり。

悠々たれ、よく眠れ、平氣なれ、冷熱なれ、最も笑ふべき人は、口にのみ理想を云ひ、偉大を云ふて、遂に何事をも遂行し得ざる奴なり。余は斯くの如き人間の、眞に無用の長物なる事を覺ゆ(夫子自ら顧みて可也)

僕のバイ、スクールに入らんと欲する心情を分解すれば曰く鄕黨に誇るに足る、曰く婦女子の歡心を買ふに適す、曰く坦々たる順境を進み得、曰く學生々活の花、咄、馬鹿野郎、是れ果して直面目なりと云ひ得るか汝は空漠たる虚榮の花に醉ふて、汝の心身と汝の一家を犧牲とせんと欲するか。あゝ吾れに、風雲に乘じ、雷霆を叱咤するの

慨なきか？余は、更に々々修養と熟考を要す。

余は、往々競爭の合手もして、生駒や小山や梅田を見る事あり、咄、吳々も朝河先生の演說に注意せよ「諸君は、世界の前に於て、修學すると云ふ觀念を失ふてはいかぬ」と

學校に於て、校風問題等で騷ぐ奴は馬鹿だ。校風問題を決する前に、先づ自己の問題を解決すべし、自己の如何を顧みずして、校風等云爲するも、所詮は、自家撞着なり(もうやめたよ)。

僕は、孤獨的生涯を送つて、崖々修學し樓。

僕の Lover は、依然として、F. K. だ、而かも彼れはピーアレス、スクールに學びつゝあり。僕も到底飽魚の片思ひかれ、呵々。

マー何と云ふいゝ月だろふ。虫の音が聞こへる、時は正に秋のシーズンに入らんとして居る。

廿九日　夜、今西兄を主賓として、小宴を張る。余は今西兄の、壯んなる意氣を愛す、而して、其濃かなる友誼に泣きぬ、あゝ兄の余を辯護する何んぞそれ勉めたるや。人生知己に感ず、成否は論ずる所にあらず。余は、只兄を思ひ、努力して、知己の恩に報ゆ可きなり。

既にして月中空に冴え、滿天の秋色、清冷を呼び、快心座ろにわく。酒を酌んで、且つ談じ、且つ樂む、王侯の樂と雖、豈之れに如かんや。あゝ吾人美酒佳肴にのみ飽かんと欲すれば、即ち易々たるのみ、然かも、眞個溢るゝが如き、眞情に接せんと欲せば、故鄕を外にして又求む可らざるなり。

卅一日　朝、若井茂夫君の、墓に詣でた。たゞ一片の石のみ……何とも云はれぬ、いや

な味氣ない感に打たれた。茂父君の、日誌等を見た。京都で遊んだ昔が戀しい。

午前十時頃、若井氏の宅を辭して、歸つて來た。其時紙折りを紀念に貰つて來た。紀念——何の紀念だ——紀念品を貰ふた自分も、やがて一片の墓標の下に、淋しく眠る樣になるのではないか。

九月一日　もう秋が來た。雄圖？を抱いて、再び鄕里を去る日も近づいて來た。

東京は、日本に於ける理想境だ。人は、やれ俗惡だの、紅塵の巷だのと云ふが、僕等は地方に歸ると、直ぐ東京を思ひ出す、矢張り東京は吾人の事をなす處だ。

日本全國に於て、何處が又東京にまさる所がある、紅塵萬丈とや、俗嗅粉々とや、紅塵可なり、俗惡可なり、紅塵の中にありて淸楚、俗惡中にあつて高潔、斯の如き人にして、初めて共に談ずるに足るのだ。

昨日、若井君を訪ふて思つた。平和なる哉と、平和ではないか、田舍の小學敎員！彼れは競爭等云ふ事も知らず、只山と川と兒童と村夫子とを相手に、其日を送つて居るのだ、又茂夫君の墓に參詣して、寺僧と面談した、これも至極呑氣相である、朝起きて、鐘をたゝいて、お經を讀んで——然し、眞の人生と云ふものは、果してかゝる隱遁的の物であらふかそこは大いなる疑問である。

二日　夜來の細雨未だやまず、蕭々として窓にせまる。

午前五時、今西兄來り、共に東上の途に就く。老父門に送つて曰く身體を大事にせよ、吾れ唯々としとて別る。あはれ吾が愛する、故鄕の山よ、河よ、汝靈はありや、靈あらば願くは吾が老いたる父を守れ。

卅九年の秋

九月四日　秋風都門に入り、雁南に歸る時、吾れ再び弊衣を飄して、東都に孤客となりぬ。一夜を車中に明し、新橋に着せしは、午後一時、今西兄に別れ、雜司ヶ谷なる、林檬方に至り、母氏の笑顏に迎へられて、こゝに足を止むる、事となしぬ。

五日　城西諏訪の里に、祝兄を訪ふ、二日に上京せし由、依然として穩健の風致、寧ろ敬するに足る。

七日　いつも云ふ事乍ら、小事に心を勞する勿れ、運命は神のみぞ知る。運命に就て憂ふる勿れ、前途に就て痛心する勿れ、境遇に就て悲觀する勿れ、只現在——單に現在の事にのみ忠實なれば足る、奮鬪すれば足る。

九日　吐月峯(高瀨俊君)空々閑人(植田政治君)來訪、吐君依然として建、閑君依然として快、磊々落々放言放歌して夜に入つて去る。高瀨は相變らず愉快な男だ、植田も——人生そう僕の樣に憤慨して送つても仕方がない、寧ろ騷たり笑つたり送るべしだ。

十　日　學校に行く、敎頭中野氏の訓戒演說あり曰く今學期は諸君の成蹟頗る惡し、鐵は磨滅するよりは鏽びる、諸

君の勉學を望む云々と、好意多謝す矣。

十三日　學校に行く、終日田島乙骨等と嬉戯談笑す、學校はパラダイスなり、歸途、千葉を訪ふ、眞面目愛すべし。今日、中田が海軍兵學校入學試驗に合格せし由聞く。吾が黨萬歳なり。夜は德子君と讃美歌を練習す。

十五日　放課後、高瀬植田中田と共に、千駄谷なる建部氏邸に城山を訪ひ、近郊を散策す。風無く氣清く、初秋の風趣座ろに掬すべし。とある芝生に相模をとろ、敗又敗、あゝ衰へたる哉。後相率いて神樂坂に至り、天どんを食ひ、汁粉を食ふ、蓋し主人役城山の散財なり。田島を訪ふて歸る。

廿一日　學校に行く、浮田先生の倫理傾聽の價あり、放課後、尾關に同道して歸る、尾關淡白にして情趣あり、友とするに足る。

廿六日　某々縣事務官某々氏林樣方に來る、彼れは吾が丹後の人、吾人其不德背倫の行を聞くや久し、穢奴彼れが如きは、正に筆誅の鐵鞭三百を加ふべき者なり呵々。

廿七日　四谷なる中田操君の宅に、瓔珞一同招かれて行く、赤飯の御馳走あり。

廿九日　南組々會兼中田君送別會を開く。歸途今西西を訪はんとして、道に生駒氏毋堂に會ふ……偲ばるゝ哉去年の秋……

○十月一日　愈〻十月となつた、いゝお天氣である。鬼子母神に百舌鳥鳴いて、秋思天地に滿つ。

七日　目醒むれば秋光窓に入つて輝々……清澄の氣先づ吾れを襲ふ、千葉、尾關と共に千駄ヶ谷より、目黑、近郊に秋を探る。一日の清遊得る處多々。よい哉秋の自然。

十一日　秋雨蕭々、秋冷頓に加はる、庭前の梧桐、風なきにはら〳〵と散る、を見る。

十四日　午後、落合附近を散歩し、楙の木蔭に、萩を薄として、ゴルキーのナトネを讀む。

十五日　高瀬、池田と護國寺の裏に、秋草を敷いて語る——よし。

十八日　吾校は運動會あり、梅田の馨君を連れて見に行く。角力を取つて連戰連敗、笑止々々。

十一月三日　天長節なり、青山原頭に、觀兵式を見る、こゝはこれ、近時物質的文明の裝飾物たる、軍兵の晴れの場所、たゞ見る、紅紫競ふ群集の、擾々乎たるを聖代の殺人人形、燦然又爛然……アゝ國家は泰平なる哉呵々

午後、中田の送別會を開く。亂舞歡笑、興味、津々、歸途、更に赤城神社々頭に清月を横へて亂舞放歌して去る。

四日　朝、本郷に至り、宮岡の時計の禁錮をとき、武男君と共に、動物園を見る。獅子の風貌は少なからず、氣にいつたり。

八日　紀念の爲め、瓔珞社一同、神樂坂上の某寫眞店に撮影す。

午後二時より、幸田先生の送別を兼れて、五年級級會を開く。丸山、僕、上村、祝、野明及び小田内、松本兩先生の送別演説及び、幸田先生の答辭あり、餘興にうつりて、瓔珞社の悪魔の踊り、植田の旅行談、城山の追分等ありて、薄暮散會す。

十一日　茫々然裡に一日を送る、嗤、馬鹿！、

十三日　夕刻、行待君來る、就て來京の意を問ふ、只家庭の心よからざる爲と云ふ、夕食後、打ち連れて小日向臺町に、今西兄を訪ふ。

今西兄の、行待に對する注告……言々至誠より出づ、至情より出づ、あゝ彼れは眞に好丈夫なる哉——蓋し好丈夫とは所謂世の冷酷鐵意の人にはあらず、丈夫の胸中には、實に鐵の如き意志あると同時に、溫情の掬すべきものを要す。

あゝ陽に甘言を弄し、陰に冷語を吐く輩、滔々乎たるの時、獨り今西兄の、堂々として自己の信條を表白し、他の感情の如何を顧ず、而かも其間自ら同情の念裏に溢るゝを見る、嗚呼敬愛すべき哉這般の好丈夫、吾が親愛なる今西兄、

十四日　午前九時頃、祝、高瀬、鵜巻、植田連名の端書大森より來る、曰く中田の西下を送りてこの地に來ると。余は中田を送らざりしを憾みとす——中田、彼れは實に好箇俠骨を備へたる血性男兒なり、吾人もとより彼れが前途に、囑望するや大なり、切に前途の幸福と健在を祈る。

十五日　憂への日と、喜びの日。

憂への日哉、さびしみの胸に滿つよ。

煩悶何處よりか來る？病の爲か？否、病ありとて肉のなやみはなど怖れん。たゞ堪へ難きは、それ心のなやみか……青春の胸を抱いて、空しく此の秋の寂寥をかこつ。知りがたの思ひ、われにあればなり。財と名とを求めて迷ふ若き身の樂しみ今吾れになし、あはれ世の敗者よ、浮世物憂き哉。

喜びの日哉、憧れの胸に滿つよ。

心のなやみとく去れ、聞けよ洋々たる賛美の聲、奇しき天上の樂、知りがたき啓示、感謝せよわが神……さらば〳〵カイゼルの物はカイゼルにかへし、神のものは神にかへさん。

複活の兒よ、此世樂しき哉。

十六日　久しく學校を休みぬ、友戀し、學びの窓の友戀し、へだてなき心に吾れを迎ふる……學校に行く。

十七日　吾れは思ひぬ、吾れは幸なり、吾が前途に燃ゆるか如き光明の輝を認むれはなり。さはれ、悲しからずや、吾が妹の趣味もなき世のくさりにからまれて、空く青春の胸に懊惱を包める事や、こを救ふは吾が義務なり、いそしめよ。

四十年

一月一日　新春の曙光を、伊東海濱に見る。

わびしき浪の音、ことほぎの韻をつたへ、海を渡る新春の氣、靈を帶びて身に逼る、

曙光初島のあたりより、光明の笑ひを漏らし、紫雲瑞相を湛へて　胸座ろに躍る。吾は山の端に坐して、靜かに祈りぬ。嗚呼明治三十九年よ、汝は吾に幾許の苦悶を與へし事よ、吾が身は汝が囹圄のもとに、如何に淋しく其三百六十餘日を送りしことよ、希くは、こゝに新たに迎へし明治四十年よ、吾が爲めに汝は希望ある月日をつくれ、

光明ある生涯の指導者たれ。
歸り來れは、鷄あり、雜煮あり。

一月十四日　伊東に於ける、二旬の靜養に、克ち得たるものは、一入の憂悶の情のみ。憐れ血は湧く青春の期、吾獨り春夢醒めて、輾轉悶情やるに處なく、世を呪ひ、世に咀はれて、一人こゝに詩をやらむとせしも、想へば痴けたる業なりき。

この日塚越君（歩兵少尉仙臺第廿九聯隊附）、福島君（二高學生）修善寺まで行を共にせんと云ふ、乃ち相携へて發す、道中は至つて平凡、午後二時頃修善寺着、浴後のビール一盞、快云ふべからず、夜に入りて春雨降り出でぬ、眠られども情趣多し。

一月十五日朝、範頼の墓に詣づ、憐れや征夷大將軍の弟源の範頼公の墓前に今はスシ屋の看板ぶらさがり居れり。午前十一時過塚越福島兩君に分れ獨り大仁に向ふ、到れば悲しや十分の差を以て汽車に遅れたり、即ち午後六時の列車に乘りて三島に向ふ、汽車漸く進めば富士の靈峯鮮かに顯はれ出づ、此の日は稀れに見る好天氣にて空は清澄……。雪を戴ける芙蓉の峯……余は淘然として宇宙の美觀に醉ひぬ。

後九時新橋着、風寒きなかを銀座街上に孤影を横へつゝ梅田方に至る、先生妻君岩君喜び迎ふ。

十六日芳子君△△君の可愛き哉、殊に芳子君のオシロイを塗る技術に誠ほに感服仕りたり、希くは此の小女の前途幸多かれかし。

十二日（水）小雀に呼び起されて床を出づ、寒し、此頃教室の腐敗を見て座ろ肉の躍るを覺ゆ。

十四日午後四時頃家兄より葉書來る、從兄の森戸藤六胃加太兒の爲めに逝けりと、嗚呼悲しき世なる哉、何の因何の果、偲ばるゝ哉、彼……彼や幼にして慈母を失ひ、吾が家に育ちて吾と居を同じうせしこそも幾年、而して今忽として訃を聞く、惆情何ぞ夫れ堪へん、四十年に足らざる彼の短生涯はたゞ不幸の連續のみ、悲しい哉。

十五日（金）信州諏訪郡原村拂澤野明任夫君より葉書來る、慈母の訃に接して歸省したりと、若き人の慈母を失ひたる時の悲しみは又一入なるべし。

植田來りて吾が家に一泊す。

十七日（日）午後千葉と神田に行き千葉は分れて須田病院に行き余は梅田方に行く、川上少佐の妻君いと快活なり、夕方岩君と其兄君の處に行き、毆ドンブリをおごらる、ウイスキーにほの醉ひて歸る。

十九日（火）朝起きると雪が大分降つて居る崔君の支那服を借りて學校まで着て行つた、頗る暖かい、途中女子大學の生徒等が僕を注意して行くのも一興だ、

二十一日（木）近頃稀なる好天氣。

舊曆の正月に崔君が紀念の爲めにと撮つた二人の寫眞を宮内寫眞舘から取つて來た、英文法の試驗があつた、僕は三題逸つた樣に感じた。

廿二日（金）珍客があつた、それは例の植田と井上欽チヤンと山川とであつた、女子大學附近を姨捨山の馬鹿野郎等と怒鳴り散らしつゝ鬼子母神の邊に行き大に嬉戯した、頗る面白かつた。

廿三日（土）何だか間が惡い、學校へ行くのは嫌だ、遂に欠席した。

午後四時千葉を誘ひ田島の處へ行く打ち連れて神田錦輝館に社會主義の演説を聞く、別に面白き事もなし、何だか馬

鹿氣たやうな氣がした、たゞ醫部先生中止〳〵とやらかすので聽衆が騷くのは中々面白かつた。

廿四日（日）午前中祝の處に行き戸山原頭に嘯いて悶をやる、今日は來客の多い日であつた、祝の處から歸つて程なく岩君が來た、晝食後打ち連れて今西兄を訪ふ、在らず、杉原君と雜談の後歸途に就て、門の前で高瀨に會ひ、共に我家に入る、德子君藤原さんていふ大學の御方が入らつしやいましたとて名刺を出す、三人鼎坐して語る。夕方千葉來る、ビーフ一斤を購ひ四人して食ふ、中々快。

十時頃まで語つた後皆辞し去つた。

昨日エルダーと彼れがシスターと同封で手紙が來た、中々情か深い、僕はこの同情ある後援を有しておる、力の續く限り修學せねばならぬ、僕が失敗したと聞いたら此の同胞はどれ程嘆くであらう、哀れ、僕を信頼して居ることがこの樣に深いものを……。

昨日又△△△中學に居る。村田兄より葉書が來た、君は卒業後何うする考？矢張り神戸高商かと（廿五日午五時）

二十五日（月）學校へは行かない、朝より高瀨池田が來た共に千葉の處に行き晝食をこしらへて喫した、なか〳〵面白い、僕は今日國許及び今西兄（欠席届の調印を求めに）及び村田兄へ葉書を出した。

高瀨の筆記を借りて英文法を寫す、精神の確りした男は流石に英語の排列も順序だつて居る、何にだも秩序的の腦力を養成せねばならない。

編者註、一杯主義とは毎食飯一杯に限る事也

今日は攝生を重んじたので非常に心地がよい一杯主義を嚴に勵行しやう（十時記）。

廿六日（火）天は清う晴れた、學校に行く、歸り來れば机上に葉書あり、仙台福島一郎君よりなりき、これは伊東に於ける信仰上の知己で現時第二高等學校に學んで居る友だ、波は獨眼である、然し彼の心靈上の眼は慥かに活きて居る、世には肉體眼のみを有して心靈の盲目なるものがどれ程あるか分らぬ、僕は此の意味に於て福島君の獨眼を寧ろ祝するのだ。

攝生を重んじた方だ、しかし今日は夕食の一杯主義にそむいたのは深く耻づる次第だ、今夜は八時に眠る（八時前十分）。

枝君に英語を教へてやつた、中々むづかしい。……一杯主義はもうやめだ（三月二日）

廿七日（水）何事にも大ならむ事を期せよ、區々たることに一顧一動するは偉人となる所以の道に非ず、須らく一大方針を立て、一大主義のもとに最後の勝利を期して進めよ、道程に於ける區々たる雜關の如き豈恐るゝに足らむや。

病氣は苦しい、而かし此の病氣が幾分にても吾人をして人生其ものに近からしむる樣なとがあるとすれは病氣も亦愛すべく親むべきものに非ずや、凡てのものを理解せんとを勗めよ（朝七時十分感する處ありて）。

○春の日を向上主義の寢言哉。これは祝君が作つた月並流の俳句だが今日の樣によい天氣ではさすがに向上主義を寢言に云ふても晝寢かしたい樣な氣持かする。

○時間は餘程經濟的に使ふ癖をつけねばいけぬ、タイム、イズ、マネーとふ云やうな陳腐な語は今の吾人に於て要はないがタイム、イズ、ライフといふのはよくよく吾人をして自省せしむる力を有して居る、嗚呼ライフよ、吾人は一刻一刻宇宙にこのライフを刻しつゝあるのだ、ライフは即ちスエルフである、即ち自我である。自我は刻々死しつゝある、無用の事に自我を殺するはあまり好ましくはいてはないか、否タイムの徒消は寧ろ一の罪惡である。

○ウォーク、ハード、アンド、フィヤー、ゴット。再びこの語を繰り返す、嗚呼この語は僕が京都に於ける最初の生涯に於てリピンゲストンの傳を讀んだ時に卷頭に書つてあつた語である、今一つ記臆て居る、ラブ、ナット、プリージュアー、ラブ、ゴッド三誦してセルフ、カルチュアールに資する處あれよ。

○今日學校へ行つた、中々面白い、いい天氣だ、シエレーの詩でも思ひ出しそうな……春の野は一入にいい、駒塚橋畔頗る情趣あり、(後四時半頃英文法筆記に飽き果てた時)

○どうも杞憂をして仕方かない、吾は現在に於てベストを盡せは別に考ふるとはいらないではないか、無用のとに頭腦を刺戟するのは甚だ愼むべきとである、深く考へねばならぬ、冷靜の頭腦を養成せねは病氣はなほりはしない。あまり殺風景なとばかり書いて居てもつまないから一つ面白いとを記して置かう、僕の室と女子大學の寄宿舍とは相對して居る、今朝起きて窓を開けると向ふの室から一人の式部が頻りに此の方を見て居る、其先生は顏の赤い頗る不印であつたにはいさゝか失望した、しかし彼處の室には慥かに不印の先生も居るらしい、僕の室からそんなものを眺めて居た處で別に何の利する處もないが、こゝが面白いものだ、何をか見たいやうな心地かする、今の道學先生は男女の情事を目して醜交だとか何だとか頻りに罪惡呼はりするが、實際樗牛が云ふた通りにこれは自然の法則で人力で如何ともするとの出來ぬとだから寧ろこれを指導して純乎たる或者にすればいゝのだ、或者とは乃ち戀愛である、戀し戀せらるゝとか出來るものは誠に幸福である（五時三十分記）

○女子大學の生徒が優雅な聲をして歌を唱つて居る。僕は今三角をやりかけたが何だかその歌の方へ氣が奪はれて、仕方がない……おかしいものだれ……女の聲は……何とした情の含まれた聲であらう……何とした美い聲であらう……坐ろ聞きされて居た（六時二十分）。

○頻りに腹痛がする何故此樣に多病なのかしらむ、もう眠らう、無用な事に時間を費すのは吳れ〳〵注意せよ、（七時半）

二月廿八日(木)　此頃よく忘想に耽つていけない、忘想をやめて現實に勵まれば到底事業は出來ぬ、今日は二月の終りである、いよ〳〵〳〵春てふ形式にすすむのだ、僕は二月の終りに於て他の妨き訓戒を得たる事を喜ぶ、

三月一日(金)　いよ〳〵三月となつた、風は寒い――田中邸の梅が綻びた、學校へ行く、朝の食事は注意不充分なりき、警戒を要す、明日から朝夕二回パンに牛乳ときめた。今日德子君にからかつたら御氣にふれて僕にはもう口きくのも嫌いになつたさうだ、前に平民新聞に下田歌子のことか書いてある、濡れぬ先きには露をも厭ふと云ふ語がなかにあつた、女といふものは確かにさういうものらしい、僕に於て無論こんなことは何ん等の關係もないが、七時半に就寢する、(七時過き)

三月二日(土)　早く起きるに限る、何とした心地のいゝことだらう、六時前二階の雨戸を開けて見た、月はなほ皇々として中天に輝いてゐる、女子大學の電燈は爛としてあたりを照らして居る、僕は今三角をやつて居る、なか〳〵六ケ敷い、今後の學習は總べて朝に於いてすることにする、今日はいゝ天氣らしい、(前六時)

午後胃病大會を矢來倶樂部に開く、會するもの祝、高瀨、鶴劣、井上、山川、河、植田、小山等であつた、放論笑話の間各々快をとり後一同撮影す。晩餐はビスケットと、鶏卵とパン也八時頃此處を辞して自持寮に行く、余等路傍に立ちて戯れに基督教の演説をなす鶴劣町にて。吾れ先つ立ちて馬太傳及び信仰に就て述べ、續いて植田は神に就て陳す、後學校の前にて高瀨又説くところあり、(醉漢あり、狂態陋劣)自持寮に至れは同じく會あり、種種餘興なとをなし歌ひ食ひ躍り後月を踏むで歸る、正に十一時を過ぐ、机上に封書あり、村田よりなり、此の度高師入學試驗に合格して四月三日頃上京すと、余はこの親友と語るの近き將來にあるを喜ぶ、ニュースを見つゝ眠りにつく、即制廢止案は醜的運動の結果議會を通過せり嗚呼日本の議會は何すれぞしかく醜類を以て充さるゝ。なか〳〵眠れない……昨夜眠つたのは四時間位なものだらう。(三日後一時記)

三月三日　清澄、昨夜眠れなかつた爲め甚だ懶し、今西兄より本官になれりとの報到る、之れにて積日の溜飲が下つた、夕方祝の處に行き暫く語る、快、今から就寢するのだ、(七時半)

三月四日(月)　會話の試驗があるといふので學校に行つて見たら高杉君欠席したので、なし、故に直ちに歸宅す。今日は一の罪惡を犯した、そは食後だからと云ふ名義のもとにミルクホールにかけ込むで驚く勿れ、栗饅頭六個カステラ二個を平げ口を拭つて出て來た、それより戸山原頭に祝を訪ひ(午後一時)しばらくして歸る、罪惡おもむろに酬ひ來つて不快此上もなしあれはどうも間食の部類に入つたらしい胃病大會の決議により彼の連中にオゴラねばなるまい、偖〳〵困つた事だ、夜間赤酒一瓶購い來る。昨夜は少しく眠つたらしい而し熟睡の域を去るや遠し、何とかしてよい眠る工夫をせねばなるまいて、今日得たる思想とては別にないが只將來に於て事業をなすにも切に整々堂々と事を行はむことを期す。

人を議する勿れ、已れも亦議せられられん、これ聖書の教ふる處なり、現時の學生集れば即ち喋々と他の褒貶に餘念なし、何ぞ越味の墮落せるその甚しきや。

余は昨日丸山の境遇を聞く、彼れの斯の如く怜悧にして而かも社會主義の如きを云々するに至しりも境遇の然らしむる處、思へば一掬同情の涙を賀せずや、吾は深く彼に吾が鋒を向くるの非なるを悟りぬ。遮莫彼か去月の輿風會雜誌に載せし諸君に警告すてふ一論文は確かに癖の種なり余は猛然之に對して反駁の爭を加へむことを期せり、而かも今彼か境遇を聞くに及んでは又書くに忍びさるものあり、茲に於て再び痛切に人を議することの罪深きを悟る、(前五時三十分記す)

三月五日(火)　今日三角の試驗があるので學校は休む。雪が降り出した。胡蝶のやうにフワリ〳〵と空より舞い下る處はさすがに精趣がある。窓をあけて餘念なく此景を見とれて居る、丁度繪のやう……故郷が偲ばれる。

村田兄は此間書を寄せて僕に文學をやれと云うてくれた、顧れば僕は確かに多感の兒である、多恨の兒である、人情に泣き自然に對して想ひを馳せしとそも又幾許なるを知らず。吾に若し燃ゆるか如き熱情なかりせば吾の價値は正に零である。吾は自を深く信ずる、吾にして若し取るへき處ありとせば、そは慥かに熱情である、然り熱情は確かに吾生命である、而して古來より大文學は殆んどこれ等熱情家の特產物たるに似ておる。吾れはミゼラブルを讀出時、ユーゴーの沸々たる熱情の面影を認む、吾人は英雄崇拜論を讀む時に、カーライルの炎々なる胸中の熱火を想ふ。大文學は確かに大熱情の胸中より生るゝものである。

何故に文學がかく感情に伴ふものであるのか……吾人は古往今來幾多の文學書のうち最も大なる文學、偉なる文學としてバイブルを推す、新約聖書を繙き見よ、悉くこれ人の肺腑を貫き心をして波動せしむる底の感情の文字ならざるはなし、吾人は今こゝに一々之が例證をなさゞるべしたゞ吾が亦目然なる人生の表皮を剝ぎて眞人間本然の至情を赤裸々に表白せるを信ず、然り、感情は確かに人間の本性である。誤れる哉、今の所謂成功主義の教育この本義を忘れて只外の修飾に力む世の文明に進むる從うて人道は反比例に野蠻に趣くと若き宗教家が絶叫せしも理なる哉。

吾は此意味に於て感情の高尙なるを知る、然れども翻つて吾自身を思ふ。吾よ熱情あり と雖もそは未だ理想化せられざる熱情なり、至純ならん事の熱情なり、如何ぞ、よく至美至純なる文學を產し得んや、蓋し不健全なる文學より大なる罪惡を誘導し產出するものあらず、こゝに於て文學者の責務の誠に大なるを知る、徒らに、小才を算して聽々に浮動すへきものならむや。

余は近頃に至り痛切に自己の弱く罪深きものたる事を覺ゆ、而して幾度か吾は宗教に走りぬ、吾か心の至純ならざる、眞理を垣間見ては眞理に遠かる事愈大に、短恨長恨交、胸に纏りて、解くに由なく悵乎として深夜寒燈に俯して泣く。

泣けばとて曇れる胸は霽るべくもあらず、長へに吾は靈界の審判を受けて悶死すべき運

命の兒か、やみなん哉。

さなり吾は到底罪の子なり、罪の子が皷吹する文學は罪の文學なり、罪の文學は人心をして沈淪せしむ、吾は斯の如きをなすべくあまりに小膽なるを如何せん、かくて吾は遂に文學を爲すの資たらざるを知る、吾は到底精神界に呼號するの材たらざるを知る、希くは吾をして適歸すべき處に赴かしめよ、（前十時）

三月八日（木） 學校へ行くのは何だか嫌だ遂欠席。十時頃高瀬、池田、梅原が來た、それより午後五時まで快談した、高瀬曰く君は文學をやつた方がよい。池田曰く君は今少し大きしすれば、樗牛になり、スピリチュアルにすればカーライルになる」と。村田よりあの手紙は來るし僕は果してこのやうな者かしら、兎に角今一應考へて見る、而し村田がいふたやうに天才があるなんて云ふとは到底信じられぬ、自分は天才どころか下根の下根の塊だ。

三月九日（金） 紀念館にて午後一時より謝恩會あり、中桐先生の演說、上村、中野先生高瀬、僕、鶴卷、植田、鴻巣先等丸山田島浮田先生增子幹痕等の演說あり眞龍齋貞水の講談等あり、茶菓及びすしの配付等あり、先づ學校の會としては理想的の會なりしならむか、

七時半より大西先生宅にて瓔珞及び四年十士會の連合會を開く、中桐先生、佐久間先生、小田内先生も來られ野明君も來れり、高瀬は開會の辭、中桐先生の哲學會の話（先生同時代早稻田專門校出の抱月筑水淺河貫一氏等の人にて組織し、一ヶ月一回開會しつゝありと）僕の瓔珞の歷史談、三好君の十士會の話、池田君の心靈上の話、鶴卷の瓔珞の逸事、小田内先生の中學時代の感想、祝の去年四月市川遠足の話、小倉君の十士會の方針、野明の「己が罪」末節の朗讀、佐久間先生の塞翁が馬論、更に僕の希望、梅原植田の過去の生涯、九時過き先生等先つ去り一同團坐して大に談笑す、大西先生歸り來り、與一層湧き、僕は起つて例の惡寃躍をやり、衆皆歡を盡して散會せしは十一時過き千葉と共に、高聲雜司ヶ谷路を放歌しつゝ歸る何れ詳しくは暇ある時に讓る、（十二時十五分記）

三月十日（日） 昨日の不攝生の爲めなるべし胃の加減妙ならず、體甚だ懶し、

遂に午後辨天町に齋藤を問ふ、居らず、大久保館に國井を訪ふ、在らず、田村方に國井四郎君を問ふ、居らず、即ち飄然として戸山原頭に嘯かんと歩を轉ず、途に齋藤に逢ふ、打ち連れて、田代方に至る、待間程なく、國井四郎君歸り來る、雜談數刻にして夕方歸る晩餐後千葉と入浴し七時過き臥床す。

信と愛と壯なる生涯こそ送りたけれ（七時）

三月十二日（火） 午後より學校へ行く、廿錢のマネーに窮し、種々奔走して見た、考へると實に馬鹿々々しくなる、國井を訪ふそれより戸山の原に嘯き祝の處に行きて十錢借り來りミルクホールに支拂ふ、今後は斷じてかゝる處には行くまい、今日は十分運動した、定めて今夜は眠れるだらう岩より葉書來る、村田と加納とへ葉書を出す（六時記）

三月十三日（水） 愈々明日より試驗だ、僕は身體の不健康なるを深く恨む、運動に限る、昨夜はまあ眠られた方だ、運動して睡ると慥かに少し位は眠るとか出來る自分はよく時間を徒費した、これは文字を出來得る丈け美しく書かんが爲めでノートブックの數冊はこれが爲めに犧牲に供せられた、而して後に得たるものは果して何であつたであらうか、實に沒常識の甚しき行爲と云はねばならぬ僕は僕自己の物の輕重に就て判斷の明のないのを耻ぢる。

は姓名を記すを以て足るとは項羽の云つた事であるが、余は斷言する、書は了解せらるれば足ると、これ字は一の

符號である、只だ讀めさへすれば充分である、奈翁も頗る字が拙つかつたそうだ、苟も遊戯三昧に文墨を弄するの徒に非さる以上、文字の巧拙の如き吾人に於て果して何の要かある、僕は今後斷乎として文字の練習(落書)はなさゞるべし、單に時間を浪費するのみならず、腦力を徒費するや又大なり、深く戒むるを要す。

文字は既に了解し得らるれば足る、然らば今後ジイペンを用ふべし、ゼイペンは徒らに文字を修飾するのみして不解明なる甚し。

空想場裡に思ひを馳する、時に取つては又一興あるべし、蓋し吾人は到底謳歌すべき半面よりも呪ふべき半面の遙かに多き現世を以て滿足し得べきものに非ず、

此處に於て思ひは去つて空想場裡に逍遙す、又勢の然らしむるところ、嗚呼吾人にして若し現世現境より超越し能はざるものとせば吾人は如何に憐むべき將た果敢なきものならずや、所詮吾は空想の兒なり、空想は吾に取つては寧ろ、深嚴なる實在なり潑溂たる生命の宿る所なり、誰か空想の兒を以て、妄これ事とするものとなすものぞ。

實に吾人の管見を以てすれは、古來幾多の偉人は、皆これ空想の兒なり、殊に宗教的天才、文學的天才に至つては、其最たるもの、三聖は吾人の覗ひ知る處に非ずといへども

かのマホメットの如きは確かに一種空想の兒たりし事は否むべからす、カーライルの

如きも正に然り。空想なる哉空想、吾人これによりて永遠なる未來を洞見するを得、現在の空想は永刧生活に於ける一大事實なるとを吾人は信ぜざらむとするも得ざるなり

余は近頃、自己の生命は慥かに永遠なることを信ずるに至れり、誰か吾人靈り、性の支配する處を更に現世のみと斷言し得るものぞ。彼は實に永遠なる過去より永遠なる未來に連る一大實在界の總てに其權威を振へり、何すれぞ其關する處、僅かに現世のみならむや（前三時十五分記）。

鶯の鳴く聲聞けば家戀し、今朝鶯の聲頻りに書窓に聞こゆ、情趣いや優さるを覺ゆ。幾何を學ぶのはなか〳〵樂しいものだ、歩みはよし遲くとも悠々として進まむかな。無用のことに腦力を費すは吳々注意すべし一事をなすに當つては其一事に精力を集中すべし、決して他を省る勿れ。

知るは易く、行ふは難しとは陳腐なりと雖名言なる哉、余輩ただ知るとのみ多くして行ふと何ぞ寥々たる、（九時半幾何にあきて）

昨夜は運動の効能にや、よく眠られぬ、余は今日も運動せむものと、夕方より護國寺畔を逍遙し送に清嚴寺に至る、途に生駒正俊君に會す、遊びにお出よといふ、試驗が濟んだら行くとお母さんにいつて吳れと云ふ、僕は到底あの家を忘れるとは出來ない、龍子君健在なりや、信子君光子君はた如何、今西兄は頗る元氣だ、僕も嬉しい。夜は八時まで勉强した。これから寢る積りだ（八時）

十四日(木)　朝目が醒めたのが四時、幾何をやつておると鶯の聲がいと懷しげに聞える、嗚呼自然の寵兒よ、何ぞ徒らに人界の束縛に泣かんや。

思ひ起す一昨年の今頃、熱海に客となり、魚見崎の濱に横臥して鶯の聲を聞きしとを、一時は徒らに、多感の兒をして空想に泣かしめぬ。渡邊氏逝けりと、聞きし吾豈惆悄やる瀨なきを覺えざらむとするも得んや、豐子君よく吾に慰安を與へしも憐れ何故に運命の神は彼の女をして吾が空想場裡の人たらしめざりしぞ。

鶯の聲を聞いて又あらぬ思ひに馳せぬ、現實界は滔々として吾が運命を醜弄す、前程を望めば雄心坐ろに湧く、吾豈徒らに追憶にのみ泣くものならむや、

鶯の泣く聲聞けは友戀し
なき友戀し春の更けゆく

(前六時十分)

午後は殆んど何も見ず(本は)千葉と共に祝を訪ひボール投げて遊ぶ後ち高瀨の處へ、三人連名の手紙を送る。

今夜は七時になつたら睡る考だ、明朝は二時に起きやう。

十五日(金)　倫理(人格の發展と社會の價値、男女共通の倫理上の原則)幾何圖法の試驗があつた、神經衰弱で殘念でたまらぬ。多分は落第はしまいが此の樣に身體が惡しくてはどうも困る、昨夜は一睡もしなかつた、試驗がすんだら大に身體の恢復につとめねばならぬ。

夕方千葉と目白ステーションの上の橋の處まで散歩した、夕の氣は身に逼つて鐵道線路の彼方に見ゆる、青い赤い、電燈が濕つぽい、空氣の中に濛朧たる光を放つて居る、何だか僕は悲しい樣な、そして嫌な〳〵心地になつた、歸つて來て机に向つても何だか其思ひが心の奥底から囁く樣な心地かして本を讀む氣になれなかつた、八時にユニホンをしまつて睡る考だ、どうか今夜は睡られ〳〵ばい〳〵がなあ。珍らしくも朝起きて見たら雪が降つて居つた、今年は珍らしく雪のよく降る年だ豐年の相かもしれぬ。

十六日(土)　昨夜は少しく睡られた、オー寒い鶏が鳴き出した、これからユニホンを〳〵としてはならぬ、(前四時半記)

新希望

題して新希望と云ふ、余が今後の日誌なり。何が爲めに此の名を取りしか、吾れに新希望の湧きしが故なり。

嗚呼希望なる哉。希望、吾れこれあるが爲めに、なほ現世の痛苦より脱して、義務を遂行するの勇を生ずるなれ。

よし、さらば明治四十年の四月よ。吾が新になる希望の門出よ。

四月五日、日の二日、村田君鵠沼の寓居を訪づれ來る。彼れは新に高等師範學校入學の爲め東上し、途吾れを訪ひしなり。相見し殺那其豫想よりも元氣なりしに喜びつ。

夕刻、手を携へ江ノ島に遊ぶ。夜は村田の戀物語りに更くるも忘れて興を覺えぬ。

三日の朝早く一番列車にて歸京す。

自分は確に病氣だ、誰れが何と云はうが病氣だ。而して精神の浮動が其の源因たるに相違ない。若し僕にして眞に強健なる身體にならうと思ふたなら先づ健全なる精神を養成するが必要である。人は云ふ、健全なる身體には健全なる精神宿ると、或は然らん、而かも余は云はんと欲す、健全なる精神は健全なる身體を作ると。よし病氣なりとも、若し病氣を感ぜざるまで即ち其痛苦に打ち克つ丈の修養が出來たなら、事實に於て病氣でも猶健全なる人と稱するを得るだらう。僕は今後必ずこの事に就て修養する。

稻村ヶ崎に山田新太郎君を訪たことを一寸しるして置く、

鵠沼にある日、一日高瀬鶴卷と打ち連れて稻村ヶ崎に病を養へる山田新太郎君を訪ふ。精身は舊によりて健全、而かも其面影に生氣なきを如何せん。余は何となく涙胸に充つる心地せられぬ。

祝は彼れを薄命の志士と云ひぬ。ガ、薄命の志士よ。……余は鎌倉の地に向つて切に彼れの健康を祈りぬ（午後十時十五分前）

小問題に齷齪として、常に頭腦の安き事なし、實にアクチビティーの徒費と云ふべし。

徒らに過去を追迫して悔恨に泣くよりも未來の光明を認め現在の事に勉めずや。

（編者曰、之れ實に故人か絶筆なり）

冷熱集 畢

令兄よりの書狀（故人の履歴に就て）

御厚志の溢るゝ御手紙を頂きまして、深く御禮を申し上げます。親しき君の御壯健を承り、一同この上もなく喜んで居ります、當方も皆頗る健全にて、毎日家業に服して居りますから、御安神下さい。

弟の遺稿上梓に關し、非常に御配慮を煩らはし、恐縮に堪へません。出來の上は長く〳〵紀念として相傳ふべく、これのみが樂みであります。

偖、弟の畧歴通知せよとの仰せ、忝く拜謝奉ります。別に記すべき程の事のあるべき筈も御座いませんが、御言葉にあまんじ、ありしことのあらまし御通知申しあげます。弟は明治廿年の六月七日生れで――出生地丹後國作野郡溝谷村――廿六年に等樂尋常小學校に入り、卅年四月卒業、同時に溝谷小學校に入學、卅四年三月同校卒業、これで小學校は全部終りました。弟は左程勉強家と云ふ方とも思へませなんだが、學問好とでも云ふのか、小學時代は入校するから卒業する迄必ず一級の首席でありました。それから卒業する頃に、渡邊幸作と云ふ教師が弟を非常に愛して、倚進んで中等教育を受ける樣にと勸められたので、吾々も人間は兎角理想の向ふ所に從はしめたが宜しいと思ふたので、希望通りにせよと思ふ儘に任して置き

（故人の履歴に就て）

ましたが、弟は渡邊君の勸告で、京都府立師範學校の附屬小學校教員養成所（一ヶ年講習）へ入ることになりまして、卅四年の四月に京都へ行き、三百人講習に飛び込みました。

其れから、卅五年の三月卅一日に、相當の成績で同所を出で、同時に尋常小學校本科正教員の免狀を授けられ、溝谷尋常小學校訓導に任ぜられたのであります。で弟は翌年の七月迄奉職して居りましたが、兎角僅な俸給生活が不平で不平で堪らなく、毎日小言を云ふて居りましたが、其年の夏期休暇に、京都に教員の講習があるから行くと云ふて、突然同地に參りましたが實は同志社入學志望で、同校の試驗を受けにいつたので、遂々教員を辭し、同志社の二年に入つたのであります。それから又卅七年の夏期休暇に歸省して居つたが、九月に學校が始まると云ふので、京都へいつたなり、直ちに東京へ飛び出しました。これが始めての東上で、東都では全く今西兄の監督を仰いて居つたのでした、で始め暫く正則英語學校へ通ふて、其後錦城中學の四年に入つたのだそうでしたが、餘り學校が感心せぬと云ふので、又少し勉強して攻玉社の五年へ競爭試驗で飛び込みました。然し入學して間もなく病氣にかゝり、醫師の注告もあり、已むを得ず歸省して自宅療養をやつて居りましたが、其後再び上京して見たら、豈はからむや無屆缺席と云ふので學籍を除かれて居つたのでした。然し折よく早稻田中學が補缺生を募集して居ると云ふので、それに應じ試驗を受け、都合よく同校の四年級に入學したが、弟は渡邊君の勸告で、京都府立師範學校の附屬小學校教員養成所（一ヶ年講習）へ入ることになりまして、卅四年の四月に京都へ行き、三百人講習に飛び込みました。

其れから、卅五年の三月卅一日に、相當の成績で同所を出で、同時に尋常小學校本科正教員の免狀を授けられ、溝谷尋常小學校訓導に任ぜられたのであります。で弟は翌年の七月迄奉職して居りましたが、兎角僅な俸給生活が不平で不平で堪らなく、毎日小言を云ふて居りましたが、其年の夏期休暇に、京都に教員の講習があるから行くと云ふて、突然同地に參りましたが實は同志社入學志望で、同校の試驗を受けにいつたので、遂々教員を辭し、同志社の二年に入つたのであります。それから又卅七年の夏期休暇に歸省して居つたが、九月に學校が始まると云ふので、京都へいつたなり、直ちに東京へ飛び出しました。これが始めての東上で、東都では全く今西兄の監督を仰いて居つたのでした、で始め暫く正則英語學校へ通ふて、其後錦城中學の四年に入つたのだそうでしたが、餘り學校が感心せぬと云ふので、又少し勉強して攻玉社の五年へ競爭試驗で飛び込みました。然し入學して間もなく病氣にかゝり、醫師の注告もあり、已むを得ず歸省して自宅療養をやつて居りましたが、其後再び上京して見たら、豈はからむや無屆缺席と云ふので學籍を除かれて居つたのでした。然し折よく早稻田中學が補缺生を募集して居ると云ふので、それに應じ試驗を受け、都合よく同校の四年級に入學した樣な次第でありますが、此の時同時に君も入學したと聞いて居りますから、其後の事はこゝでは略す事に致します。

弟は中等教育になつてから、少し無理な勉強をした爲か兎角健康が勝れず、あまり優等の成績を得能はなかつた事は殘念であります。自分が弟を評するのは如何と存じますが、只無邪氣な無頓着な男なので、人に愛せられたと云ふ事は小生共の信じて居つた所であります。今回弟が死んだと云ふので、僅か一年位教育した生徒や其親共が皆涙を落して葬式に列して呉れたので、他の教員連が羨んで居つた位ださうです、尙弟の家族は、父藤吉、母順、兄市二、姉はつ、妹かなの五人で御座います、永く憾みとするは、兩親にも兄姉妹にも先だつて弟のなくなつたことのみです、尙詳しく申せば記すこともありませうが、今はこれだけにて失禮致します、不分明の點は幾重にも御海容を願ひあげます。

七月廿八日夜

高瀨君

机下

市二

編者附記、早稻田中學入學後の君の生活は日記に委しければ畧す。四十年三月同校卒業後君

（故人の履歴に就て）